

第七回

工み、下焼き成つて又一と驚、二た竈三竈よはいつしか、殘菊落葉ときの間の霜と消えて、煤拂ひの音もち搗きの聲、北風の空に松や飾り松。

送る歳くる年珍らしからねど、心改たれば一段の光り、のぼる初日の影にそひて、汲みたる若水の車井に、廻ぐる世の中ももしろく、とそその盃まづ歳したよりと、さすも可笑しや一家二人の活計に、内裏儀式のむかしを學びて、三つ組の重なるきを捨てず、新らしき物は二間四枚の椽がはの障子、切り張りの斑ならならず、是れ例年に替りたる處、篠原が庇護なりとて、元旦早々囃は出でぬ、竈三片意地の質、入に受くる恵み快からねど、濁る、藪に我れと負けて、二十金の生地二拾匁の金箔、此處四五月の費用幾度の簾代、積もりし恩の深きが上、猶心づけの數々もうるさく、其都度に斷わるを、新年度の料にとて、送られし去年の反物、迷惑さ限りなく、遣りつ返へしつ止の果、さらば妹に頂戴せん、我れは男の宜き衣類きて嬉しからずと、兄弟ぶりの一反を返へして、殘さす一反に人の情無にせじと、お蝶の贖衣仕立させて、今日の委つくりひしを見れば、今歳十八の出花の色、玉露の香り馥郁として、一段の見榮え流

石に嬉しく、此服装平常着にさせたく思へり、人は廻禮に忙がしき日も、世捨て人の其苦なく、今日一日はと仕事休みして、横に轉るぶ別枕、御慶の聲に夢やぶれて、珍らしや誰れと問へば、平常は疎とき問屋の何某、末廣に祝詞を籠めて、長々と去年の不沙汰の詫、是れよりの戀信、一向たのみて行きしこと、お蝶その通り取次げば、はて扱利欲にくらみし眼は、何處まで聞らきか方圖のなき物、其詞我れへではなし、御本尊は彼方にとて、指さすは座敷の花瓶、是れ高く成りし評判に、出來上がらぬ内より我れ買ひ取らん、いや是非とも私しにとせり合ひの申込、一々に跳ねつけて、今歳コロソニス博覽會に出品の計畫、諸事は辰雄の周旋に、優然構へる小氣味よさ、竈三いよ／＼大言を吐きけり、暮れて其日も點燈ごろ、辰雄廻禮の車を其まゝ、交際ひろき身の勞れも厭はず、門に提棒あるとすれば、春色いとし長閑に成りていふ事さく事一々にあもしろく、竈三紙鷲の昔しを言へば、辰雄廻禮し獨樂の面白忘れずと語り、彼れに移り是れに移り、次第／＼に密に成りて、幾變遷の今の身、中々に其かみの無心戀しきばかり、世のこと人のこと目に移りて、彼れも助けたく是れも救ひたく、不相應の事業に身を委ねて、及ばぬ力の我ながら口惜しく、暗涙を呑むこと誰が業ならねば、訴ふるに處もあらず、凝りにこりし憂鬱の氣の晴る、は此處に斯く遊ぶ時ばかりと、何故か例に似ぬ詞、竈三聞き答めて、



怪しき事かな君が博愛の徳、上に聞え下に渡つて、推尊せぬ人なき筈と、何故の御不満ぞと問へば、何事も言はぬが花なり、お互に聞きつ聞かせつ、樂しき事ならば宜けれど、我が胸にさへ持切れぬ苦を、君達に分けて成る事か、元來正は邪に押され、直は曲に勝ちがたきが常、何事も問ひ給ふな、腦いよく亂るゝ様なりと、振あふぐ而氣の處爲にや、血の氣も見えず青く白く唇を噛んで沈思の牀、お蝶たまたず兄の袂と曳けば、頼三少し前に進みて、宜き事のみを聞き聞かせの友いくら有り、愛喜ともにと言ふ處眞實の價値ならずや、是れを藏くされて喜こぶ者、世の中には有るか知らぬと、我等同胞おもしろくなし、とは不遜の詞なれど、兄弟と思ふ君の事、水火の中にも手を携へたきが願ひ、何と打明かしては下さらぬか、承らぬば氣も落付かず、我よりはお蝶どの位心ほそまか、女は氣の狭きもの、役にも立たずくしくと氣にして、我れも迷惑、可愛さうにも有り、五十足の同じくは、諸ともに苦を分けたしと腹からの詞、お蝶も言はず打たはれて、組み合はす手を解きつ返しつ、哀や胸の動悸高かり、長雄俄かに心付きてや、扱も馬鹿な事いひ出して、折角の面白さ臺なしになりぬ、苦あれば樂あり、樂あればこそ苦も有るなれ、順環して行く處奇な物なるを、一々に愛れはしと見る日には、五十年の壽命たまる事か、お蝶さま案じ給ふな、今いひしは昔醉の上の謔言、泣上戸の言

分何でもなし何でもなし、笑ひ顔みせて我れにも落つかせ給へど、からりと笑つて一物の殘らぬ様子、再度もその話しに返つて、更くる夜遅く歸宅せしが、お蝶いよく心悶えて、寐られぬ枕うくばかり、涙の床につくづくと案ずれば、最惜しや君様、彼れほど熱心の計畫に、何ごとの聖いりたるか、談合する友は少なく、打ちあす仇は多き世の中、口惜といかばかりぞや、今宵の詞今宵の顔色、必らず仔細なくては叶はじ、我れに隔ての包みかくしか、我れに歎きを懸けまじとてか、とにもせ上角にもせよ、我れは君の妻、君を置きて我が夫なし、見すべき心は斯る時よ、萬人一樣表面は同じ、其皮一重下の下の骨に刻んで忘れぬは何、知らせて知りて愛喜は共にしたき者と、思ひを曉の鐘にかぞへて、新玉のどしの始め長閑けからず、暇なき戀に身は使はれ物、三が日も過ぎて七種の日に、長雄誕生日の祝ひながら、新年の宴開きたく、お蝶さま是非借りたしどの文言、我れ悦ばせん爲かあらぬか、當日一式の身の廻り、何處貴願の席にも恥かしからず、心をこめし贈り物の品々、頼三喜んで許せば、我れも其人の意に背かじと、こらす粧ひは錦上の花、嗚呼純粹の淑女さま、此運此姿、見せたき者は亡き親といはれて、お蝶鏡の前に泣きけり。



第八回

百花に魁がけて咲くや窓の梅、來鳴け露わが宿は、春風ぞ吹く品物の落成、四圍八度びの窯の心配、薪の増減煙りの多少、火色に胸をもやし微塵にも氣をいたためて、壺や入たる流れやしけん、金色の不明繪の具の變色、苦を嘗めつくせし此處幾月、思ふこと思ふに叶ひて、新蕪みがきに磨き出せし光澤、耀く光りは我が光り、花瓶の上部見切りの中、正面は龍に立つ浪の丸模様、廻ぐりに飛ばす菊桐の、あしらひは古代唐草にして、見切りの境界雲形の、上下に描くや東大寺模様、此處さや形七寶の地つぶしに、帯の菊の丸ありふれたれど、丹誠の筆いやしくもせず、上部終つて割どりの内の畫は、表面對の金銀閣寺、裏面向かひ合はす港川稻村が崎、誠意誠心みちくして、粧ひなす彩色凡筆ならず、割の廻ぐりは古薩摩風の秋の七草、金模様の蝶のちらし書き、此地つぶしの雲ぼかし形金なし地、先人未發の工夫をこらして、刻苦の跡いちじるく、雲の書きつぶし淵腰のわり模様、徹ならず細ならずと諍らばそれれ、眼を持つものは來ても見よ、一打棒にも美はこもる我れ頼三不器用の技倆、此品物に止めぬと誇りて、晩酌一杯酒氣さへ添へば心いよ／＼面しろく、篠原に風聽がてら、お蝶まねかれし日の禮も言はん

と、立出づる門口に、兄様まばしと袖ひかへる妹、言はんとして言はんとして踏たふを、何ぞ用かど小戻りすれば、何でもなければ夜風お寒し、風引て給はるなの心づけ嬉しく、夫ほど遅くは成らぬつもり、なれども酔さめは油断が成らず、羽織今一つ着て行かんと、立歸つて着重ねる様の先、襟に手を添へて折りながら、兄様大層お髭が生へたり、新年といふに見苦るしやど、横顔つく／＼眺められて、何の夜るでは有り知れる事か、明るき處で明日剃りて給はれ、先づは品物も出来上がりて、小成に安んずるでは無けれど、祝ひても宜き事なり、四五日の中に辰雄どの誘ひ出して、三人連れに何處ぞへ行かん、其約束今宵して來る心、あそくは成らねど金目の物、家にある丈不用心なり、門の戸さして待ち給へ、さりとて胸に雲もなし嗚呼月もよしと立上がる兄、其手にすがつて門まで送れば、地上に落つる影二つ、見る見る二つは遠くなるを、見送つて立つ影うらがなく、夜風軒ばの根に淋し。昔しは他處にみし表札、やがては弟の門くゆる頼三、頼む、どうれの支關向き小うるさく、辰雄の居間は兼て知る、庭口の戸を押せば明きたり、霜にまゆりし芝生の上、踏むに音なき袖がき隠れ、聞こゆる聲は高からねど、影は障子に二人三人、聞きたし何の相談會と、引き立つる取に一と首二九言、怪しや夢か意外の事ども、某の子爵たまに運ひて、何某長官に頼願さへ



せば、此事必らず成り立つべし、某の殿の證印は柳橋のに握らせ次第、金穴は例の大盡、氣  
豚は兼て通じ置たり、跡は野となれ、山師ともいへ詐偽とも言へ、愚者に持たせて不用の財、  
引き上げる事世の爲なり、思ふも腹筋は洋行がへりの才子どの、何の活眼しれた物よ、魔睡劑  
は入江の妹、此間の宴會に眼尻の角度見て取りぬ、彼の頑物に説きつけが六づかしけれど、  
恩と言ふ獄屋入り、八重からげも同じこと、女は増して懷中そだちの世間見ず情の深き丈丸め  
安し、下ろす元手の細工は粒々、頼三といふ奴もひの外、遣ひ道不向なれど、飼つて置かば  
何にか成るべし、楠どの泣き男、人間に不用もなき物、博く愛する是れも仁かど不敵の詞、  
慶は辰雄か汝れと計り、奮然立ち上がつて更に摩する腕の無念さ、内には何時か話し絶えて、  
玉笛の聲、曉々ど聞え出でぬ。

第九回

此人の一笑に無限の喜びを知り、此人の一滴に萬斛の憂ひを汲み、形より濃き影の如く、起  
居に心は志たがふ其人、玉をのべし容顔憂ひを合んで、まみじみどの物語り、何の契りの君と  
我れ、宿世あやしく忘れ難く、國家の爲に盡くす心、半分は君に取られて、人に言はれぬ物を

も思ふ身、はかなしやち心も知らず、天下に妻は又なしと定めて、何の子爵の娘、振りむく  
處か、にべもなく斷りしが蟻の一穴、實を言は、我が所爲あるかりし、其子爵殿今までの  
一臂にて、支出の金に事も欠かず、事業はこびかけし今日に成りて、俄かに破約の申込み、此  
道たえて又こと成らず、恨らみを呑んで我れ此まゝに退ぞかか、殘す請りも嘲けりも君故と  
知れば惜しからぬど、何と成るべき世の中にや、國家の末を思ひいたれば、殘懷山のごとく  
此胸やぶるゝばかり、此事誰れに語らるべき、隔てぬ中の君にさへ、言はれぬは斯る譯、外に  
どる道なきでも無けれど夫れいよゝ心苦るしくと、言ひはてぬ詞、なほもどかしく、此真情  
まだ見えやと打ららめば、さりとは其真情、見えて悲しきは事君が上なり、成否善悪はち心  
一つ、今日賓客の一人彼れ有力の貴顯、我が爲金穴たらんと言ふ、心はと問へば、苦るしきは  
此處、君の噂を如何に聞きしか、一向妹と思ひ込みて、達ての處望つらからずや、君を他人  
にゆるして我れ、國家の爲と断念られず、よし我れ慾を離なるゝ共、斯の事何として我が口よ  
り言はるべきと、愛しや戀人斷腸のけしき、可憐の小女魂を奪はれ骨を消されて、責を我が  
身の上を負へば、操を破つて操をたてんか、人知らぬ罪わが心の内にあり、さりどて我れ故  
君が名まで、世に滅るぶるを他處に見んこと、恩を仇なる音類の處爲、彼れも愁らしこれも憂



し、何とせんと計の胸、智慮分別かけきえて、取る處は只死の一つ、影あり形のある世なればぞ、障り多く妨げ多し、生れぬ昔しの空無量、我れも蝶といふ身がなくば、何方へ義理なく憚りなく、此戀圓滿にあるべき筈、よし是れも天命なり、病ひに死ぬも戀に死ぬも、命は一つよ二た度は行かぬ道、天地にも恥づる處あらず神佛もどがめ給はじ、兄さまも死るし給へよ我れも悔む處なしと、決心するどく未練なく、憐れも蝶潔白無双の身、濁りに染まじ亂れじの行ひ、寐る夜の夢のまばしも忘れず、富貴に眼をどち貧賤に心をみがきて、今歳十八年くもりなき美玉、打たく大魔王は戀とらふ胸の一物、形を辰雄に假り聲を篠原にかりて、或る時は勝ふ春風花ひらく園、ある時は指さす秋雲月くらき天、喜憂を包みし袂のさき、引きて伴ふ果ては何處ぞ、東西南北かげもなく形もなく、愛らしかりし双頬の壓いづくに行きし、なつかしかりし遠山の肩いづくに行きし、双星の眼破齋の口、又耀やかず又開らかず、黒漆の髪雪白の肌、あれも無しこれも無し、寒風ふきしきる夜半の月に、追へども見えす呼べども答へず、形見は止むる一封の文に、残す手跡のうるはしきも涙

第十回

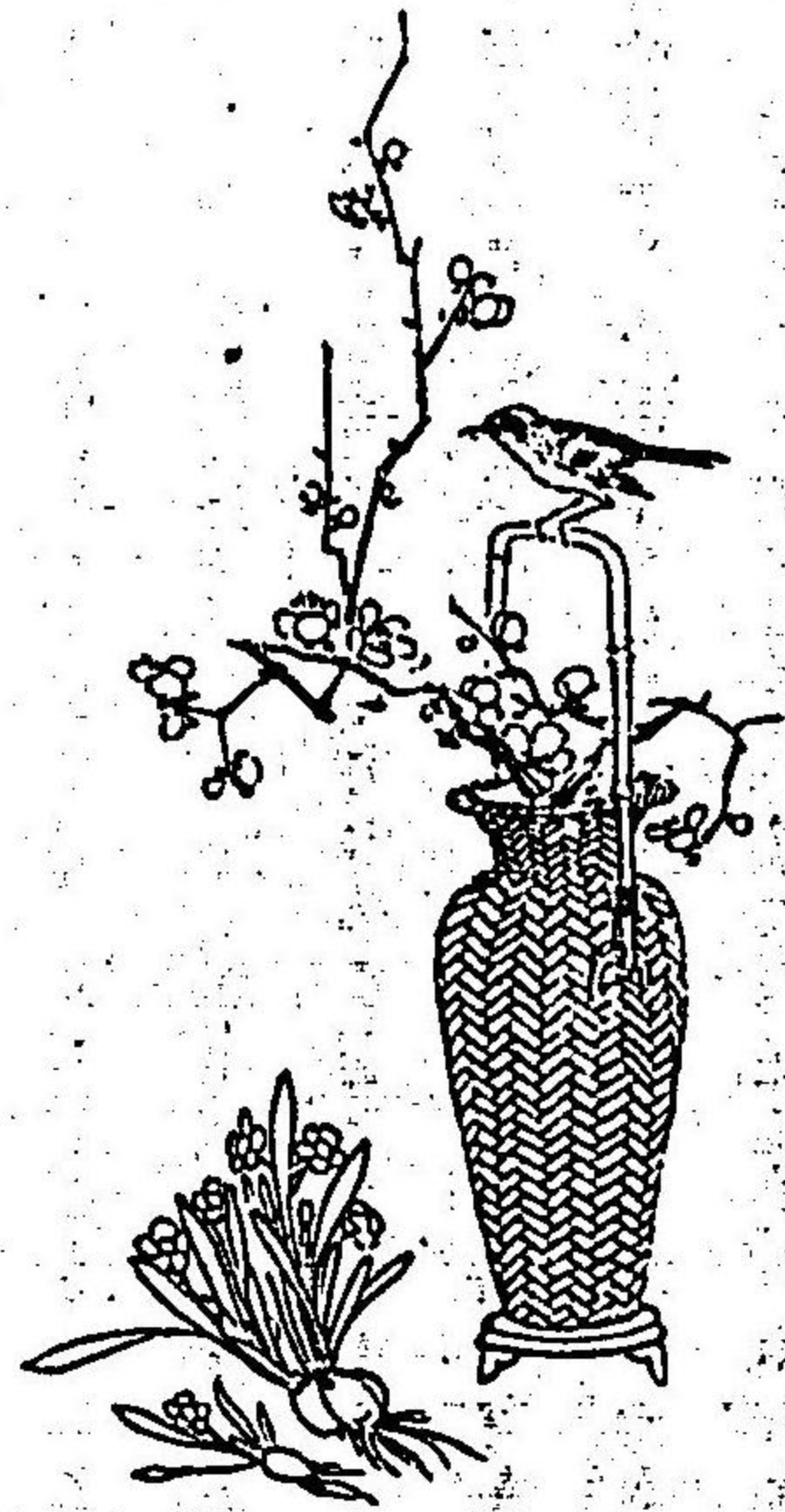
どつかと坐す花瓶の前、あぶれ出る熱涙はらひもあへず、にらみつむる眼光火と散つて、取りしむる腕、くだけよ此骨、寧ろ生れながらに指まがり筋つまりてあらば、斯道にと志すこともなく、入立ちぬ昔しに何をか願はん、生中陶畫の粹と呼ばれし、先師の畫工場にいと稱へられて、我れは賣らぬと自からは人も知る名、貧ゆえうつもる、事口惜しの念、我れ潔白の心に沸きて、願ふまじき名譽ねがひしは何故、たのむまじき人頼みしは何故、喰ふまじき不義の食この口に食みしは何故、死るすまじきと蝶、不義の人に死るせしは何故、汝れ汝れ此腕此心、心をまどはし目を眩まして、見えす悟らず今月今夜、ち蝶不幸の家出は誰が業、磨きし多年の筆故に、最愛の妹ころとするか、ねりし經營慘澹の苦は、汚濁を我が身に染みこませしか、冷笑し辰雄、嘲けりし辰雄、聲は彼れよ罪は汝よ、交りを断つて悪聲を出ださぬ、我れ君子の道は知らねど、受けし恵みの泰山蒼海、無念骨髓に徹れど恩は恩なり、彼れ奸悪の秘事この耳にして、まこと聞き捨てにすべきならず、世の爲人の爲正義の爲、揮ふべき拳こゝにあり、秘藏の短劍ひらめかして、彼の胸もどを貫くも容易、さりとて無念や此品物、此恩此恵み身をまばりて、向くべき又なく揮ふべき拳なし、思へば恨らみは我れにあり、腕にあり藝にあり此花瓶にあり、憎くし口惜し仇め敵め大悪魔め、汝れを碎いて辰雄も刺さん、汝れなくば



何の恩何の恵みと、拳しをかためて突立ち上がり、見れば見れば月明りに浮きて、見ゆる金銀閣寺、砂子一つ筋一本心をこめぬ處もなく、まして廻ぐりの金なし地、嗚呼幾年の苦の名残描きも描きたり我れながら、天晴斯道の妙の妙、この筆たえてつぐ人ありや、我れ道に入りて十七年、惜しみに惜しみに名を記るして、見よや海外の青眼玉、來たれ萬國の陶器衛工、日本帝國の一臣民、入江頼三自まんの筆と、心に誇りし満足の品、これ何として碎かるべき是れ何として碎かるべき、兎にも角にも世に合はぬ身の、一生の思ひ出是れに止めて、入らんか深山の夫れも口惜し、お蝶ふたゝび歸りもせば、辰雄に邪心の無くも有らば、此品保存も成るべきをど、双手に抱いてためつすがめつ、眺め入る心惚として、我れ畫中に入りたるか、畫圖我が身に添ひたるか、お蝶もなし辰雄もなし、我慢もなし意地もなし、金光我が身に輝いて、四方に沸く喝采の聲、莞爾と笑めば耳ちかく、新三愚物のつかひ道なしと、聞こえ出づるは篠原か、汝れと振仰ぐ袖ひかへて、お風めすなと優しき聲、嬉しやお蝶かへりしか、兄さま彼方へ諸共にと、指さす方は金閣寺銀閣寺、咲くや秋草小蝶とんで、立わたる霧さりとては、我が金なし地にさも似たり、面白し面白し、蛟龍つひに池中の物ならず、湧き來たる雲形のうづに立浪の丸模様、登り龍下り龍龍の丸、蝶の丸花の丸鳳凰の丸、をどり桐くるひ獅子三葉葵源氏車穂

車ぼたん唐草菊がら草、吉野龍田の紅葉に花に、彼れも美なり是れも美なり、お蝶も美なり辰雄も美なり、中に就て我が筆美なり、これを捨て、何處に行かん天下萬人みな明きめくら、見すべき人なし見せて甲斐なし、我が友は汝よ、汝が友は我れよ、いざ共に行かんと抱きあげて、投げ出だす一對庭石の上、憂然のひらき大笑のひらき、夜半の鐘聲とほく引きて、残るものは片々の金光一輪の月。

(廿五年十一月、都の花第九十五、六、七號)





閨 櫻

(上)

隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはず庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅一木に  
 兩家の春を見せて齎りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり園田の主人は一昨年なくなりて相續は  
 其之助廿二の若者何某學校の通學生とかや中村のかたには娘只一人男子もありたれど早世して  
 の一粒ものごとて寵愛はいと手のうちの玉かざしの花に吹かぬ風まついとひて願ふはあし田鶴  
 の齡ながれとにや千代となづけし親心にぞ見ゆらんものよ梅檀の二葉三ツ四ツより行末さぞ  
 と世の人のほめものせし姿の花は雨さそふ彌生の山ほころび初めじつほみに眺めそはりて盛  
 りはいつとまつ葉さしの月のさよふさよふも可愛らしき十六歳の高島田にかくるやさしきな  
 まこ絞りくれなゐは園生に植てもかくれなきもの中村の娘さんとあらぬ人にまでうはさる  
 ん美人もうるさきものぞかしたても習慣こそは可笑しけれ北風の空にいかのぼりうならせて電  
 信の柱邪魔くさかりし昔しは我も昔と思へど其之助も千代に向ふときはありし離遊びの心めら

たまらず改まりし姿かたち氣にとめんとせねばとまりもせず其さん千代ちゃんも他愛もなき  
 談笑に果ては引き出す喧嘩の糸口最早來玉ふな何しに來ん前様こそこのいひにけに見合さぬ  
 顔も僅か二日目昨日は私が悪るかりし此後はあの様な我儘ひませぬ程にゆるじ遊ばしてよ  
 とあどなくも詫びられて流石にをかくし解けではおられぬ春の氷イヤ僕こそが結局なり妹と  
 いふもの味まらぬとあらは斯くまで愛らしきか笑顔ゆたかに袖ひかへて其さん昨夕は嬉しき夢  
 を見たりも前様が學校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ねりの馬車にのり  
 て西洋館へ入り給ふ所をといふ夢は逆夢ぞ馬車にでも曳かれはせぬかと大笑すれば美しき  
 眉ひそめて氣になる事おつちやるよ今日の日曜は最早何處へもお出で遊ばすなど今の世の教育  
 うけた身に似合しからぬ詞も眞實大事に思へばなり此方に隔てなければ彼方に遠慮もなくくれ  
 竹のよのうきと云ふ事三人が中には葉末におく露ほども知らず笑ふて暮らす春の日もまだ風寒  
 き二月半ば梅見て來んと夕暮や摩利支天の縁日に連ぬる袖も温かげに。其さんお約束のもの  
 忘れては否よ。ア、大丈夫忘すれやアしない併しライツと何んだッげねへ。あれだものを出か  
 けにもあの位願つておいたのに。さうくおぼえて居る八百屋お七の機關が見たいと云つたん  
 だッけ。アラ否嘘ばつかり。それぢやア丹波の國から生捕つた荒熊でございの方か。何うでも



ようございますよ妾は最早歸りますから。あやまつたく今のはみんな嘘何うして中村の令嬢千代子君とも云れる人がそんな御注文をなさう筈がない其之助たしかに承はつて参つたものは。ようございます何も入りません。さう怒つてはこまる喧嘩しながら歩行と往來の人が笑ふぢやアないか。だつてあなた彼様なことを許かしあつしやるんだもの。夫だからあやまつたと云ふぢやないかサア多舌で居るうちに小間物屋のまへは通りとして仕舞つた。あらア何しませうねへ未だ先にもありますか知ら。何だかぞんじませんたつた今何も入らないと云つた人は何處に。最早それはいひつこなしといめるも云ふも一ト筋道横町の方に植木は多しこちへと招けば走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露のひねまのあはれく粟の水飴めしませとゆるく甘くいふ隣にあつ焼の鹽せんべいかたきをむねとしたるもどかし。千代ちやん鳥渡見玉へ右から二番目のぞ。ハア彼の紅梅がいに事ねへと餘念なく眺め入りし後より。中村さんと唐突に背中たゝかれてオヤと振り返れば束髪の一群何と見てかあむつましいことゝ無遠慮の一言たれが花の唇をもれし詞か跡は同音の笑ひ聲夜風に残して走り行くを千代ちやん彼は何だ學校の御朋友か随分亂暴な連中だなアとあきれ見送る其之介より低頭くお千代は報然めり

(中)

昨日は何方に宿りつる心とてかはおかなく動き初めては中々にえも止まらずあやしや迷ふれば玉の闇色なき壁さへ身にしみて思ひ出づるに身もふるはれぬ其人戀しくなると共に耻かしくつゝまじく恐ろしくかく云はれ笑はれんかく振舞はれ厭はれんと假初の返答さへはかくしくは云ひも得せずひねる聲の塵よりぞ山ともつる思ひの數々逢ひたし見たしなど陽はに云ひし昨日の心は涙かりける我が心我と答むれば隣とも云はず其様とも云はず云はねばこそくるしけれ涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覺えて夜はすがらに眠られず思ひ疲れとどろくすれば夢にも見ゆる其人の面影優しき手に背を撫でつゝ何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君様ゆゑと口元まで現の折の心ならひにひも出でずしてうつむけば隠し給ふは隔てがまし大方は見て知りぬ離れゆゑの戀ぞうら山じと憎くや知らず顔のかこち言餘の人戀ふるほどならば思ひに身の瘦せもせじ御覽せよやとさし出す手を軽く押へてにこやかにさらは誰ぞと問はるゝに答へんとすれば曉の鐘枕にひびきて覺むる外なき思ひ寐の夢鳥がねつらきはきぬくの空のみかは惜しかりし名残に心地常ならず今朝は何とせしぞ顔色わろしと尋ぬる母はそ



の事さらけ知るべきならぬと面赤むも心苦しきは手ずさびの針仕事にみだれその亂るし心緒  
ひとためて今は何事も思はじ思ひてなるべき戀かあらぬか云ひ出して爪はじきされなん恥かし  
さには再び合す顔もあらじ妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ終のよるべと定めんにい  
かなる人をもどか望み給ふらんとは又道理なり君様が妻と呼ばれん人妾は天が下の美を盡して糸  
竹文藝備はりたるをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は尙なるべし及ぶまじきこと打  
出して年頃の中うとくもならば何とせん夫こそは悲しかるべきを思ふまじく他し心なく兄様  
と親しまんによも憎みはし給はじよそながらも優しきお詞きくばかりがせめてもぞとよさよ  
く断念めながら聞かず顔の涙類につたひて思案のより糸あどに戻とりぬさりとては其のあや  
しきが恨みぞかし一向につらからばさてもやまんを忘れぬは我身の罪か人の咎か思へば憎  
は君様なりと聲聞くもいや御妾見るもいや見れば聞けば増さる思ひによしなき胸をもこがすな  
る勿躰なけれど何事まれと腹立ちて足踏ふつになさらずは我れも更らに参るまじ願ふもつらけ  
れど火水ほど中わるくならばなかく心に心安かるべしよし今日よりはち目にもかいらじものも  
いはじと氣に障らばそれが本望ぞと膝につきつめし曲尺ゆるめると共に隣の聲を其の人と聞  
けば決心ゆら／＼として今までは何を思ひつる身ぞ逢ひたしの心一途になりぬさりながら心は

心の外に友もなくて其之助が目に映るもの何の色もあらず愛らしと思ふ外一點のにどりなけれ  
ば我戀ふ人世にありとも知らず知らねば愛きを分ちもせず面白きこと面白げなる男心の淡泊  
なるにさしむかひては何事のいはるべき後世つれなく我身うちめしく春はいつこそ花も云は  
で垣根の若草もひにもえぬ

(下)

千代ちゃん今日は少し快い方かへと二枚折の屏風押し明けて枕もとへ坐る其之助に亂だせし姿  
耻かしく起きかへらんとつく手もいたく瘦せたり。寝て居なくてはいけないなんの病中に失禮  
も何もあつたものぢやアないそれども少し起きて見る氣なら僕に寄りかゝつて居るがいと抱  
き起せば居直つて。其さん學校が御試験中だと申すではございませんか。ア、左様。それに妾  
の處へはかつし來て居らしやつてよろしいんですか。そんな事まで氣にするには及ばない病氣  
の爲にわるいから。だつて何うもすみませぬもの。すむのすまないのどそんなこと氣にするよ  
り一日も早く癒くなつて呉れるが。御親切に難有うございませぬですが今度は所詮癒るまい  
と思ひます。又馬鹿なことを云ふよそんな弱氣だから病氣がいつまでも癒りやアしない君が

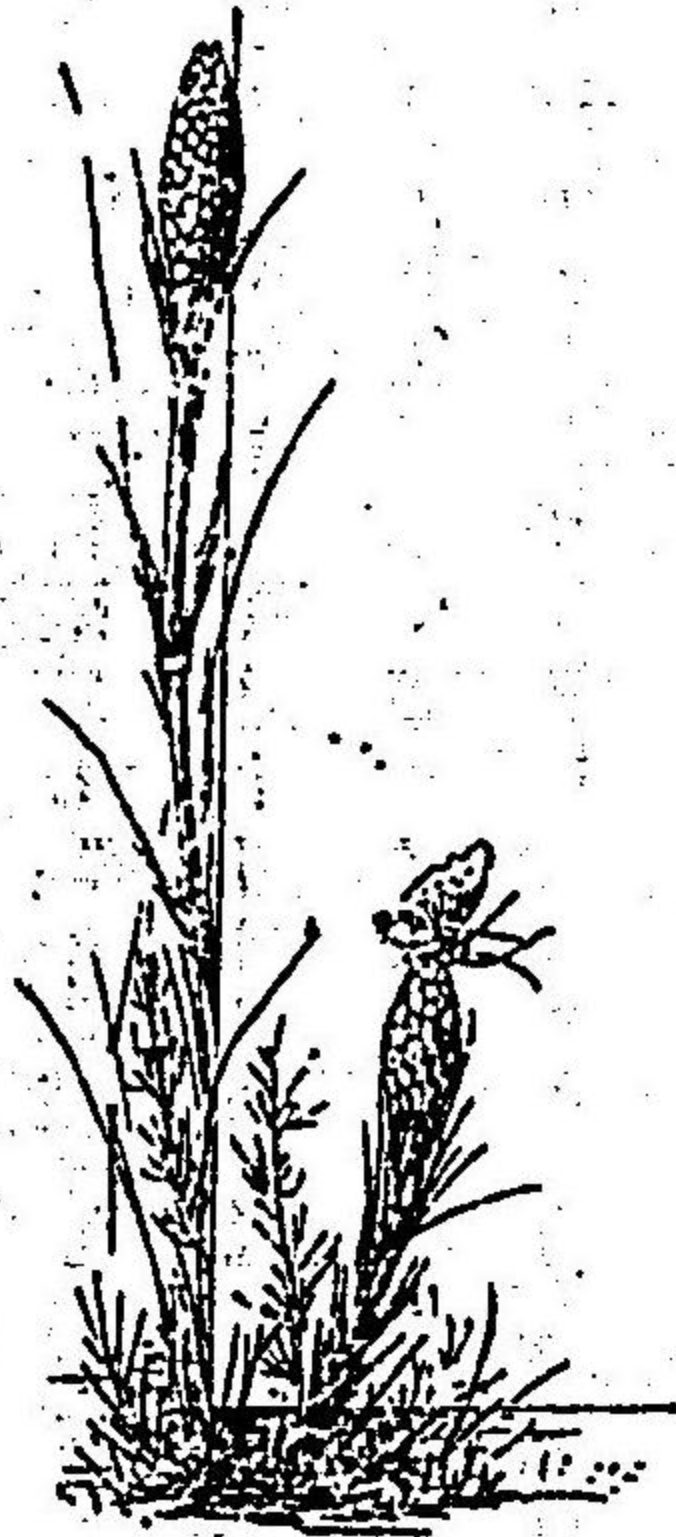






なき軒端の櫻ほろくそこぼれて夕やみの空鐘の音かなし

(廿五年三月、武蔵野第一編)



た ま 禊

上 の 一

をかしかるべき世を空蟬のと捨て物にして此歳十九年、天のなせる麗質、をしや埋木の春またぬ身に、青柳いと子と名のみ聞ても姿しのはるし優しの人品、それも其等昔しをくれば系圖の卷のこと長けれど、徳川の流れ末つかた波まだ立たぬ江戸時代に、御用も側も取次と長銘うつて、席を八萬騎の上座に占めし青柳右京が三世の孫、流轉の世に生れ合はせては、姫と呼ばれしことも無けれど、面影みゆる長襦袢の縫もやう、母が形見か地赤の色、襦袢色で残るも哀いたまし、住む所は何方、むかし思へば忍か岡の名も悲しき上野の背面谷中のさどに形ばかりの枝折門、春は立とまりて御覽せよ、片枝さし出す垣ごしの紅梅の色ゆかしと延ひあかれど、見ゆるは蓋ぶきの軒端ばかり、四邊は廻ぐらす花園に秋は鳴かん虫のいろく、天然の籠中に取めて月に聞く夜の心きいたし、扱もみの虫の父はと問へば、月毎の十二日に供ふる茶湯の主が夫、母も同じく佛壇の上にとかや、孤獨の身は霜よけの無き花壇の菊か、添へ竹の後見とも



いふべきは、大名の家老、職背負てたちし用人の、何之進が形見の息松野雪三とて歳三十五六親ゆづりの忠魂みがきそへて、二代の奉仕たゆみなく、一町餘りなる我が家より、雪にも雨にも朝夕二度の機嫌き、怠らぬ心殊勝なり、妻もたずやと進む人あれど、何の我がこと措き給へ夫よりは娘さまの上氣づかはし、廿歳といふも今の間なるを、盛りすぎては花も甲斐なし、適當の御君おむかへ申し度ものど、一意専心主おもふ外なにも無し、主人大事の心に比らべて世上の人の浮游浮佻、才あるは多し能あるも少なからず、容姿學藝すぐれたればとて、大事の御一生を托すに足る人見渡したる世上に有りや無しや知れたものならず、幸福の生涯を送り給ふ道、そも何とせば宜からんかど、案じにくれては寐すに明す夜半もあり、嫁入時の娘もちし母親の心なんのものは、疵あらせじとの心配大方にはあらざりけり、雪三かくまで熱心の御撰みも、糸子は目の前する雲とも思はず、良人持たんの觀念、何として夢さらくわらんとせず、樂みは春秋の園生の花、ならば蝴蝶になりて遊びたしと、取どめもなきこと言ひて暮しぬ、さるほどに今歳も空しく春くれて衣はすてふ白妙の色に咲垣根の卯の花、こゝにも一ツの玉川がと、遺水の流れ細き所に影をうつして、風なくても涼しき夏の夕暮、いと子湯あがりの散歩に、打水のぬと軽く庭下駄にふんで、装束る片手はすかし骨の塗柄の團扇に蚊

を拂ひつ、流れに臨んで立たる姿に、空の月取らひてか不圖かゝる行く雲の未あたり俄に暗くなる折しも、誰か思ひにか比す笠一ツ風にたゞよひて只眼の前、いと子及ぶまじと知りても只は有られず、ツト團扇を高くあぐればアチヤ笠は空遠く飛んで手元いかゝ緩るびけん、團扇は卯の花垣越えて落ちぬ、是は何とせん困果て、垣根の隙よりさしのぞけば、今しも雲足されて新たに照らし出す月の光りに、目と目見合して立たる人、何時の間此所へは来て、今まで隠れていも居しものか、知らぬこととて取亂せし姿見られしか、見られしに相違なしと面俄にあつくなりて、夢現うつひけば、細く清しき男の聲に、これは其方さまのにや返上せんも受取なされよと、垣ごしにさし出す我が團扇、取んと見あぐれば恥かし、美少年、引かんとする團扇の先一寸と押へて、思ひにもゆるは笠ばかりと思し召すかと怪しの一言、暫時は糸子われか人か、有無の間迷ひし心、本の心に歸りし時は、卯の花垣に照る月高く澄んで流れにうつる影我一人になりぬ、さるにても彼の人誰ならん、隣家は植木屋と聞たるが、思ひの外の人品かなと、其方を眺めて佇立れば、風に傳たはる朗詠の聲いと、床しとの敷を添へぬ糸子世は果敢なきものと思ひ捨て、盛りの身に紅白粉よそははず、金銀絞羅なんの爲の飾り、入らぬことと願みもせず、過ぎし心に恥かしや、我れ迷ひたりと姿今一度見まほしと



延び上がれば、モシと扣へらる、袂の先、誰れぞオ、松野か何として此所へは否や何時の間に  
と詞有哉無哉支離滅裂

上の二

丸窓にうつる松のかけ、幾夜詠めて月も闇になるまゝいと子の心その通り、打あけては問ひ  
もならぬ、隣トモの人の素性聞たしと思ふほど、意地わるく誰れも告げぬのか夫とも知らぬの  
か、よもや植木屋の息子にてはあゝまじく、さりとて誰れ住替りし風説も聞かぬば外に人の有  
る筈なし、不審さよの底の心ろは其人床しければなり、用もなき庭歩行にありし垣根の際、幾  
度びか顧りみて思へば、さてもはした無きことなり、氏も知らず素性も知らず、心情も何も  
知れぬ人に戀ふとは、我れながら浸まじきことなり、定なき世に定めなき人を頼む、婦人の身  
はかなしと思ひ絶えて、松野が忠節の心より、我大事と思ふふあまりに様々の苦勞心痛、大方  
ならぬ志は知るものから、夫すら空ふく風を聞きて、耳にだに止めんとせざりし身が、何ぞ  
や跡もかたも無き戀に破の破の只一人もの思ふとは、心の問はんもうら恥かし、人知らぬ心の  
惱みに、昨日一昨日は雪三が訪問さへ嫌思くて、詞多くも交はさざりしを、如何に聞て如何ば

かり案じやしけん、氣の毒のこととしてけるよ、いで今日の日も暮れんとするを、例の足あとす  
る頃なり、日頃くもりし胸の鏡すしき物語に晴さばやとばかり、垣根の近邊たちはなれて、  
見返りもせず二三歩すゝめば遺水のながれちと清し、心こゝに定まつて思へば昨日の我れ、彷彿  
として何故に物ちもひつる身ぞ、廣き園生は我が爲めに四季の色をたゝかはし、雅やかな  
る居間は我が爲めに起居の自由あり、風に鳴る軒ばの風鈴、露のまたる釣忍則、いづれをか  
しからぬも無きを、何ぞくるしんか、要なき胸は痛めけん、思かしさよと一人笑みして、竹  
椽のはしに足を休めぬ、晚風涼しく袂に通ひて、空に飛かふ蝙蝠のかけ二つ三つ、夫すら漸く  
見えす成ゆく、片折戸を静かに音なふは聞なれし聲音なり、いと子厨のかたに聲をかけて、玉  
よ雪三が参りたりと覺るに、燈火とくと命令ながら、ツト立て門の方うち見やりしが、闇にも  
さるき白き手を舉げて、稚児が母よぶ様に差まねぎつ、座敷にも入らではるかに待てば、松野  
は徐ろに歩みを進めて、早く竹椽のもとに一揖するを、糸子かゝるく受けて莞爾に、花庭の半  
を分けつゝ團扇を取つて風を送れば、恐れ多しと突く手懸敷なり、此ほどは不快と承りし  
が、最早平日に返らせ給ひしか、お年輩には氣鬱の病ひの出るものと聞く、例の讀書は甚だわ  
ろし、大事の御身等閑におぼしめすなど、知らねばこそあれ眞實なる詞にうら耻かしく、面す



とし打ち赤めて、否とよ病氣は最う癒りたり、心配かけしが氣の毒ぞと我れ知らず出る佗の言葉に、何とどの仰せぞ、主従の間に氣の毒などの御懸念ある筈なし、お前さまのおん身に御病氣その外何事ありても、夫はみな小生が罪なり、御両親さまのお位牌さては小生が亡両親に對して雪三何の申譯なければ、假令身にかへ命にかへても盡くし参らす心なるぞ、よしなき御遠慮はお置き下されたしと恨み顔なり、これ程までに思ひくる、其心知らぬにも有らぬを、この頃の不愛想我が心の悶ゆるまゝに、詞交はすが懶くて、病氣など、有らせぬ偽りは何ゆゑに云ひけん、空ちそうしに身も打ふるつて、腹たぢしならば雪三ゆるしてよ、隔つる心は微塵もなければ、主の家來の昔しは兎もあれ、世話にこそなれ恩もなにもなき我が身が、常日ごろ種々の苦勞をかける上にこの間、中よりの病氣、それ程のことでも無かりしを何故か氣が鬱せて、心にも無き所置ありしかもまされず、夫がつら氣の毒にて言ひたるなれど、心に障はらば二度とは言はじ、汝に捨てられて我れ何としてか世には立つべき、心ちぢなければ目におもはることも有らん、腹立しきことも多ならんが、外に寄る邊のなき身なるぞ、妹ども娘ども断念めて、教へ立られなば嬉しきぞと、松野が膝ゆり動かして涙ぐめば、雪三身を退りて頭を下げつゝ、分におまゝりし仰せも答への言葉もなし、お心細き御身なればこそ、小生風

情に御叮嚀のお願ひ、お前さま御存じはあるまじけれど、往昔の御身分もひ出されてお痛はしい、我れ後見おあらす程の器量なけれど、赤心ばかりは誰れ人にまれ劣ることかは、御心やすく思召せよ世にも勝れし銀君迎へ参らせて花々しきおん身にも今なり給はん、嗚呼がましけれと雪三が生涯の企望はお前さま御一身の御幸福ばかりと、言ひさして詞を切りつ糸子が面とつと眺めぬ、糸子何心なく見返して、我は花々しき身にならん願ひもなく、まして銀むかへんの嫁入りせんのだ、世の人めかしき望み少しもなし、只汝さへ見捨ずは、御身さへ厭はせ給はずば、我が生涯の幸福ぞかしてと愕然とばかりうち笑めば、松野じりく膝を進めて、娘さまは夫ほどまゝでに雪三を力と覺しめしてか、それとも一時のお戯れか、御本心仰せ聞けられたしと問ひ詰むるを、糸子ホ、と笑ひて松野が膝に軽く手を置きつ、戯むれかとは問ふ丈も淺し、親ども兄どもなく大切に思ふものを、無心に言へば添なしと一々言語尾ふるつて消えぬ

中の一

洗ひ髪束髪に薔薇の花の飾りもなき湯上りの單衣でたち、素顔うつくし夏富士の額つき



眼に殘りて、世は秋の葉に秋風ふけと盤を招ねし塗扇の團扇、面影はなれぬ貴公子あり、駿河臺の紅梅町にその名も轟はる明治の功臣、竹村子爵との尊稱は千軍万馬のうちに含みし、つばみの花の開けるにや、夫が次男に縁とて才識並らび備はる美少年、今歳のなつの避暑には伊香保に行かんか磯部にせんか、知る人おほからんは佗しかるべし、牛ながら引入れる中川のやどり手近くして心安き所なからずやと、打うめかれし、お出入の豪腕師某なるもの承はりて、拙郎が谷中の茅屋せき入れし水の風流やかなるは無きものから、紅塵千丈の市中ならねば涼しきかけもすこしはあり、足を運び給はれ忍ぶが岡の緑樹の朝つゆ、寐間着のまゝにも踏み給ふべし、盤名所の田畑も近かり、只天王寺の近き爲に、蚊はあまらず少なからぬと、吹き拂ふに足る風十分なり、兎に角思ひ立たせ給へとて、紀の守が迷惑氣にも見えず誘ふにぞ、夫好からんとて夏のさし入りより、別室を假住に三月ばかりの日を消ししが、歸郷の今日の今も猶殘る肥體のもの二ツ、隣家に咲ける暁咲きの卯の花、都めづらしき垣根の雪の、涼しげなりしを思ひ出ると共に、月に見合はせし花の眉はちて背けしえり足の美しくさ、返す團扇に思ひを寄せし時憎くからず打笑みし口元なんと、只眼の先に沸き來たりて、我れ知らず沈思瞑目することもあり、さるにても何人の住家によ、人品の高尙かりしは、無下に賤しき種には有

るまじ、妻か娘か夫すらも聞き知らざりし口惜しさよ、宿の主は隣家のことなり、問はば素性も知るべきものを、空しくはなご過しけん、さりとて今更問はんもうしろめたるべしなんと、迷ひには智恵の鏡も曇りはてしや、五里の夢中に彷徨しが、流石に定むる所ありけん、慈愛二となき母君に、一日まかしくと打明けられぬ、さはいへど人妻ならば及ぶまじきとなり確めて後断念せんのみ、浮たる戀に心を盡くす輕忽しさよとも覺さんなれど、父祖傳來の舊交ありとて、其人の心みゆる物ならず、家格に随ひ門地を尊び、撰りに撰りて取る虫喰栗も世には多かり、藻くづに埋もるゝ美玉又なからずや、哀この願ひ許容ありて、彼女が素性問ひ定め給はりたし、曲りし刀尺に直なる物はかり難く、惑ひし眼に邪正は分け難し、鑑定は二重に御眼鏡に任さんのみと、恥たる色もなく陳べらるゝに、母君一ト度は惘れもしつ驚ろきもせしもの、斯くまで熱心の極まりには、何事引き出られんも知るべからず、打明けられしだけ殊勝なり、萬は母が胸にあり任せたまへと子故の關に、ある夕暮の墓參の戻り、豪腕師許くるまを寄せて、入りもせぬ鉢ものゝ買上げ、切は園内の手入れを賃めなどして、逍遙の端に若し其人見ゆるやと、垣根の隣さしのぞけど、園生廣くして家遠く、萱ぶきの軒は半ば掩ふ大樹の松の滴たる如き緑の色の目に立て見るばかり、聲きくよすがも有らざりければ、別亭に遊茶



すゝりながら夫どなき物語、この四隣はいつれも閑静にて、手廣き園生浦山しきものなり、此隣りは離様の御別荘ぞ、松ばかりにても月惚るゝやうなりとはは、笑めば、否や別荘にはあらず本宅にてあはすなりと答ふ、是を話し糸口として、見惚れ給ふは松ばかりならず、遠くしき御主人公なりといふ、然ればよなど思ひながら、殊更に知らず顔粧ひつゝ、主人は御婦人なるにや、扱は何某殿の未亡人とか、さらすは、妾なんといふ人か、別して與へられたる邸宅かと問へば、否や然からず舊をいはば三千石の未流なりといふ、さらば旗下の娘御にや、親御などもあはさぬか、一人住みとは痛はしきことなりと、早くも其の人不憚になりぬ、此處の主も多辯にや、咳勿肺らしくして長々と物語り出ぬ、祖父なりし人が將、軍家の覺え淺からざりしこと、今一足にて諸侯の列にも加へ給ふべかりしを不幸短命にして病没せしとか、或は其頃の威勢は素晴しきものにて、いまの華族何として足下へも依らるゝ者でなしと、口薄らして遠しく唇かむもをかし、夫に比べて今の活計は、火の消しも同じことなり、彼れほどの地邸に公債も何ほどかは持たまふならんが、夫も娘さまが身じんまゝ文漸々なるべしと、我れ入り立ッて見し様な話しなり、老爺は何として其やうに委しく知るぞと問へば、否や拙郎は皆目知るはずなけれど、一昨年病亡りし娘さまの乳母が、常日頃遊びに來ての話しなりといふ、一歳

は十九なれどまだ十六七としか見えず、夫から思へば松野どのは大層に老けられたりと我一人呑込顔、その松野殿とかは娘御の何ぞと問はれて、成るほどなるほど御存じは無き筈なりとて、更に松野の爲に、願まばらく働かせぬ、さればこそ暮やすき、秋日の短時間に、糸子生従は竹村夫人が胸中の知己とぞなれりける

中の一

心は變化するものなり、雪三が往昔の心裏を覗は、糸子に對する觀念の潔白なること、其名に呼ぶ雪はものかは、主人大事のト筋道、振むくかたも無かりし物の、寄る邊なき御身舞れやとの情、やうく長じては、我れ一人をば天が下の頼もし人にして、一にも松野二にも松野と、隔だてなく遠慮なく甘へもしつ傍強もしつ、睡れよる心愛らしきよと思ひしが、そも流に塵一ツ浮びそめし初めに、此心更に退へとも去らず、澄まさんと思ふほど掻きこりて、真如の月の影は何處、隙々臘々の淵ふかく沈みて、目に遮ざるは月を退ひ日に隨ひて、艶いよく艶ならんとする雨後春山の花の顔、妍ますく妍ならんとする三五夜中の月の眉いと子が容姿ばかりなり、かゝりけれども猶ほ一片誠忠の心は雲ともならず、霞とも消えず、流



石に顔りみるその折々は、慚愧の汗背に流れて後悔の念胸を刺つ、是は魔神にや見入れられけん、有るまじき心なり、我れに邪心なきものと思せばこそ、幼稚の君を托し給て、心やすく眼目し給ひけれ、亡主に何の面目あらん、位牌の手前もさることなり、いでや一對の御君撰み参らせて、今世の主君にも未来の主君にも、忠節のほど願はしたし、然かはあれど氣遣はしきは言葉たくみに賊少なきが今の世の常と聞く、誰人か至信に誠實に、我が敬愛する主君の半身となりて、生涯の保護者とはなるべきにや、思へばいとも覺束なきことなり、我れに主従の關係なくば、我れ松野雪三ならずば、青柳いと子嬢の手を取りて、生涯の保護者とならんもの天が下に又とはあるまじ、さりながら是は叶ふべきことならず、假にもかゝる心を持つたんは、愛するならずして害するなり、いで今よりは虚心平氣の昔しに返りて何ごとをも思ふまじと、断念いさましく胸すくしくなるは、青柳家の門踏まぬ時なり、糸子が愛らしき笑顔に喜こび迎へて、愛らしき言葉かけらるる時は、道に背かば背け世の嗤笑にならばなれ、君故捨つる名異ぞ惜しからず、今日は思ふ心もらん、明日は胸の中うち明けんかと、眞實なる人ほど想は苦し、斯かるもひの幾筋を捻り合はされし身なるものから、糸子が心は春の柳、そむかず靡びかすなよくとして、無邪氣の笑顔いつも愛らしく、雪三よ菊塙の秋草盛りなり

とかきくを、此程すぐさず作ひては給はらずやと掻口説きしに、何の違背のある筈なく、お前さま御都合にて何時にてもお供すべしと、松野は答へぬ、秋雨はれて後一日今日とは俄に思ひ立て、糸子例の飾りなき辨はひに身支度はやく終りて、松野が来る間まち遠しく雪三がもど我れより誘いぬ、と見れば玄關に見馴れぬ沓一足あり、客來にやあらん折わるかりと歩を返せしが、さりとも此處まで來しものを此まゝ歸るも無益しと、庭より廻ぐりて縁に上れば、客間ゆきたる所に話し登す、徐ら次の間にかいひそまりて聞くともなしに耳たつれば、客はそも誰れなるにや、青柳といふこそいと子と呼ぶ聲折々に交りぬ、さても何事を談ずるにや、我れにも關係あり氣なるを、襖に寄りて靜かに聞けば、断續して聞ゆるもの語の意味明亮にあらねども、大方は知れ渡りぬ、聞く人ありとは知らぬもの、詞あまりは高からず、松野に向ひて坐したるは竹村子爵が家従の何がし、生命に依りて糸子縁談の申し込なるべし、其時雪三決然とせし聲音にて、折角の御懇望ながら糸子さま御儀他家へ嫁したまふ御身ならねばお心承るまでもなし、雪三断然と断り申す御歸郎のうへ御前躰よろしく仰せ上げられたしといひ放てば然う仰せあらんとは存せしなり、然らば御君として迎へさせ給はずやといふ、否とよ兎に角に御身分柄つり合はず、末のほど覺束なければと言ひかゝるを打けして、そは御惡念が深すぎ



ずや、釣合ふとつり合ぬは御心の上のことなり、一應いと子さまの御心中も伺ひ下されし、其お答へ承はらずば歸邸いたし難し平に伺ひありたしと押返せば、それ程に仰せらるゝを包むも甲斐なし、誠のこと申上ん、糸子さまには最はや定まる人おはすなりそれ故のお断はりごと楚爾と笑めば、家従は少し身を進ませて、始めて承はりたり何方への御縁組にや苦しからずば仰せきけられたしと雪三の面キツと見れば、糸子も間ひの袂の際にびつたりと身を寄せつわやしのことよと耳そばだつれば、松野例に似ぬ高調子に然らば聞かし参らせん御歸邸のうへ御主君、殊に縁君に御傳へ願ひたし、糸子が契約の良人とは、誰れにもあらず、松野雪三即ち斯くいふ小生

下

戀は一方に強よく一方に弱はきものと聞くは偽はり何方すてられぬ花紅葉の色はなけれど松野の心ろ根おはれなり、然りとて竹村の君が優さしき姿一度は思ひ絶えもたれ、淺からぬ御志の忝なさま、斯く思ふは我れに定操の無ければにや、臆るき情のやる方もなし、扱も松野が今日の詞、あどろきしは我のみならず竹村の御使者もいかにかりなりけん、立歸りて斯

く斯くなりしとも申さんに、何は置きて御さけすみ恥かし、陸まじかりしも道理、主従とは名のみなりしならんなど、彼の君に思はれ奉らん口惜しきよ、是も誰れ故雪三故なり、松野が邪心一ツゆえぞ、然かはわれども御使者歸路につき給ひし後、身を投げ出しての詞今も忘れ難し、御身は竹村を床しと覺すか、縁のどやら慕はしく思ひ給ふか、さらばいか許り雪三憎しと覺するべし、さりながら往日の御詞は偽りなりしか、汝さへに見捨ずば我が生涯の幸福ぞと、忝けなき仰せ承はりてよりいとい狂ふ心止がたく、口にするは今日始めてなれど盡したる心はちのづから御覽じまるべし、委むくつけく器量世にあたりしとて厭とはせ給はれ我れも男のはしなり、聞かれ参らせずとて只やはある、他人の眺めの妬まじきよりはと、花に吹く嵐のちそろしき心ろも我れ知らず起らんや、許るさせたまへとて戀なればこそ忠義に鍛へし、六尺の大男か身をふるはせて打泣し、委ちも一ば扱も罪ふかし、六歳のむかし、我れ兩親に後れし以來、延びし背丈は誰の庇護かは、幼稚の折の心ろならひに、謹みもなく馴れまつはりて、鏡石の心うごかせしは、搦へて松野の咎ならず我心ろのいたらねばなり、今我れ松野を捨て、竹村の君まれ誰れにまれ、寄る邊を開所と定だめなば哀れや雪三は身も狂すべし我幸福を求むるとて可惜忠義の身世の嗤笑にさせらるゝとかは、さりとて是れにも隨がひがた



きを、何として何にせせば松野が心の迷ひも憂め、竹村の君へ我が潔白をも願されん、何方に  
まれ憎くき人一人あらば、斯くまで胸はなやまじを、果敢な身やとうち仰げば空に澄む月影  
きよし、肘が寄せたる丸窓のもとに何んの呷きど風に鳴る萩の友ずり、我が蔭ごとか哀れはづ  
かし、見渡す花園は夜の錦を月にはこりて、轉ぶ白玉の露うるはしく、思へば誰れも消ゆる  
世なるを、我が身一ツなき物にせば、何方に何の障りが有るべき、我れ憂き世の厭はしきは今  
はじめたることならず、捨てんは棄てよりの願ひなり、歎くべきことならずと燭然と笑みて静  
かに取出す料紙硯、墨すり流して筆先あらためつ、書き流がす文誰れへが手に落ちて明日  
は肥念と見ん名残の名筆

五月雨

(二)

池に咲く菖蒲かきつばたの鏡に映る花二本ゆかりの色薄むらさきか濃むらさきならぬ白元結  
きつて放せし文金の高髻も好みは同じ文長の櫻もやう淡泊として色を合む姿に高下なく心に隔  
てなく増たせめく同胞はづかしきまで思へば思はるゝ水と魚の君さま無くは我れ何とせんイヤ  
汝こそは大事なれと頼みにしつ頼まれ一松の梢の藤の花房かゝる主従の中またと有りや梨本何  
某といふ富家の娘に優子と呼べるゝ容貌よし色白の細ちもてにして眉は霞の遠山がた花といは  
いと比喩を引くもこちたけれど二月ばかりの薄紅梅あわ雪といふか何か知らぬど濃からぬほど  
の白粉に玉虫いろの口紅を品よしと喜ぶ人ありけり十九といへど深窓の育ちは室咲きも同じ  
こと世の風知らぬと松風の響きは通ふ瓜翠のしらべに長き春日を短かじと暮す心は如何ばかり  
長閑けかるらん頃は落花の三月盡ちればど勝ふ朝あらしに庭は吹雪の老る妙も流石に袖は寒か  
らで蝶の羽うらの麗朗とせし雨あがり露襟先に飼猫のたま軽く抱きて首玉の絞り放し結び換ゆ



るものは侍女のお八重とて歳は優子に一つ劣れど劣らず負けぬ愛敬の片断誰れゆゑ寄する目元のしほの莞爾として手を放しつ不圖見返りて眉を寄せしが又故にホ、と笑つて嬢さま一寸と御覽遊ばせ此マア様子の可笑しいことよと面白げに誘はれて何ぞとばかり立出る優子お八重は何故に其様なことが可笑しいぞ私には何とも無きと惱ましげにて子猫のチャレるは見もやらで庭を眺めて茫然たり嬢さま今日も不快御坐いますか否や左様も無ければ何うも此處がと押して見する胸の中には何がありや思ふ思ひを知られじとか詞をかへて八重やお前に問ふことがある春につきての花鳥で比べて見て何が好きぞ扱も變つたも尋ね夫は心々でも御坐いませうが歸鴈が憐れに存じられます左りとは異なることぞ都の春を見捨てて行く情なしが前は好きか憐れといへば深山がくれの花の心が嗚かして察しられる世にも知られず人にも知られず咲て散るが本意であらうか同じ嵐に誘はれても思ふ人の宿に咲きて思ふ人に思はれたら散るとも恨みは有るまいもの谷間の水の便りがなくば流れて知られる願みもなしマアどの位悲しからうと入らぬ事ながら苦勞ぞかして流石に笑へばテモ嬢さまは花の心を宜く御存じ私しが歸鴈を好きと云ふは我身ながら何故か知らねど花の山の曉月夜さては春雨の夜半の床に鳴て過ぐる聲の別れがまみくと身にしみて悲しい様な淋しいやうな又來る秋の契りを思へば頼母しいやう

にもあり故郷へ歸るといふからして亡き親の事が思はれますと打まほるれば夫は道理わたしでさへも乳母の事は少しも忘れず今も在世なら甘へるものと何ぞにつけて戀しければ子の身では如何ばかり心ほそくも悲しくも有らうなれど及ばずながら私しは力になる心姉と思ふてよと頼むは可笑しけれど歳上なれば其約束ぞ何時も云ふことながら私しは眞實の同胞と思ひますと思められて嬉しげに御縁あればこそ親ともばかりか私しまでめぐり廻つて又の御恩海も山ども口には如何も申されねども前さまのお優さしは身にしみて忘れませぬ勿体なれども主様といふ遠慮もなく新参の身のはとも忘れて云ひたいまの我儘ばかり兩親の傍なればとて此上は御座いませぬ左りながら悔しきは生來の鈍きゆゑ到底も御相談の相手にはなされて下さる苦もなし刑ものに遊ばすと知りながら恨みも申されぬ身の不束が恨めしう存じますとホロリとこぼす膝の露を優子不審しげに打まもりて八重は何が氣に障つてか思ひもよらぬ怨み言つたりて見よかし何の隔ても隠したてをするものぞ母さまにさへ申さぬことも途ひに話さぬ時はなきを今日に限つて其やうな事いはれる覺えは何もなければマア何と思ふてぞといふ顔さつと打仰ぎて夫々それが矢張りも隔て何故その様にも隠くし遊ばす兄弟と仰しやつたは偽りか、偽りでは無ければ隠くすとは何を、テハ私しから申しませう深山がくれの花のお心を云ひさし



て莞爾とすれば、アハ笑ふては云はぬぞよ

(一一)

思ひ入る路は一筋なれど夏引きの手引きの糸の亂れぐるしきは戀なるかや優子元來才はじけ  
ならず柔和しけれど惻發にて物の道理あきらかに分別ながら聞らきは晴れぬ胸の雲にうつく  
として日を暮らすを八重まかぞと見て取りぬ我れも思ひの無き身ならぬば他人ごとなりとも  
悲しきを假初ならぬ三世の縁もなほ乳房の寄りし身なり山川遠く隔たりし故郷に在りし其の日  
さへ東の方に足な向けぞ受けし御恩は斯々此々母の世にては送りもあえぬに和女わすれてなる  
まいぞと寐もの語に云ひ聞かされ幼な心の最初より胸に刻みし主の事ましてや續く不仕合に  
寄る方もなき浮草の我れ孤子の流浪の身の力と頼むは外になし女子だてらに心太く都會の地へ  
と志ざし其目的には譯もあれと思ひはいすかのはしも無く尋ねる人を引かへて尋ねぬならぬと  
身に恥づれば我れとは訪はれぬ主のもとへ又見出されて二度の恩あるが中にも取分けて嬢さ  
その御慈愛は山の中の峯たかきが上も高く海の中の沖深きが上も深しと可愛や誰れ人を彼のや  
うに思しめして御苦勞なき身の御苦勞やら我身新參の勝手も知らずと手もと用のみ勤めれば出

入のち人多くも見知らず想像には此人かと思ゆるも無けれど好みは人の心々何がお氣に染しや  
ら云はで思ふは山吹の下ゆく水のわき返りて胸ぐるしさも無なるべしと慎み深さはさることな  
れど御病氣にでも萬一ならば取かへしのなるべきならず主は誰人ぞ知らぬと此戀なんとして  
も叶へ参らせたし嬢さまほどの御身ならば世界に苦もなく愛ひもなく御心安くあるべき善をさ  
りては又苦の世の中やと我身に比べて最憐がり心の限り慰められ優子眞實たのもしく深くぞ  
染めし初花ころも色には出じとつゝみしは和女への隔心ならず有様は打明てと幾たびも口元ま  
では出しもの、恥かしさにツイ云ひそくれぬ和女はまだ昨日今日とて見参らせし事も無きな  
らんが婢女どもは蔭口にお名は呼ばずて光氏さまといふとかやと妾は察せよかし夫に引かれて  
やは無けれど彼の人は父さま無二の御恩意とて恥かしき手前に薄茶一服参らせ初しが中々の物  
思ひにて帛紗さばきの静ころなく成りぬるなり扱も妾に似ぬ物がたき御氣象とや今の代の  
若者に珍らしとて父様のお褒め遊ばす毎に我ことならぬと面て赤みて其座にも得堪ぬと暮はし  
この敷は増りぬ左りながら和女にすら云ふは始めて云はぬ心は描かぬ書もあなほ事御覽じ知る  
筈もあらねば萬一やの頼みも無きぞかし笑はるゝか知らぬとも思ひ初し最初より此願ひ叶はず  
は一生一人で過ぐす心憂きに送る月日のほどに思ひこがれて死ねばよし命が若しも無情くて如



何に美るはしき夫人むかへ給ひぬとも愛らしき見生れ給ふとも聞く身のつらさが思ふゝぞとて  
ほろゝと打泣けば八重かなしく身を寄せてお前さまは何故そのやうに御心よわい事仰られ  
るぞ八重は元來愚鈍なり相談してからが甲斐なしと思しめしてか馴れぬ御使ひも一心は一心先  
方さまどの様な御情まらずで有らうとも貫かぬといふ事ある様なし何ともしてお望み屹度叶へ  
させますものを御内端すぎてのお物思ひくゞ計り遊ばせばこそ昨日今日は御顔色もわるし  
御病ひでも遊ばしたら御両親さまは更なる事なり申すも慮外ながら妹と思ごとの御慈愛に身  
は姉上をもうけし心お前さま大切なほどお案じ申さずには居りませぬを思はしや何ごぞ一  
人で世を送るの死んで思ひを遁がれたしのと突きつめた御心に必らず成り遊ばすなど宥め  
る身さへ眼はうるみぬ、堪忍せよかし和女にまで苦をかけてあらぬ思ひに心を盡くすが我が身  
ながら口惜しきなり左りとて彼の人、事断念がたきは何ゆゑぞ云はで止まん、決心なりしが  
親切な詞きくにつけて日頃の憤みも失なりぬと漸々せまりくる娘氣に涙に咽びて良時ありし  
が、八重さぞ打つけなと憫れもせんが一生の願ひぞよ此心傳へては給はるまじや嬉しき御返事  
聞きたしとは努々思はねど離れ故みじかき命ごとも知られで果てなば本望ぞかしと打志ほるれ  
ば、又しても其様なこと御前さま此々とお傳へ申さば好きも返事は知れた事なり最早くよゝ

とは思しめすな、否やゝそれは八重が知らねばぞ杉原さまは其やうな柔弱な放埒な人でも無  
ければ申出してからが心配なり不埒者いたづら者と御怒りにならば何とせん、夫は餘りのお取  
こし苦勞岩木の中にも思ひのなきかは無情き仰せの有る筈なし扱も御戀人は杉原さまとやあ名  
は何とぞ、三郎さまと申すなり此頃來給ひしは和女が丁度不在の時よ一足違ひに御歸宅ゆゑ知  
らぬのは道理と云ひかけても八重の顔さしのぞき此願ひ若し叶はゞ生涯の大恩ぞかし諄うは云  
はぬ心は是よと合はす手に嬉しき色はあらはれたり

(三二)

雲雀のあがる麥生なゝめに見渡しながら岡のすみれを摘あらそひし昔しは何の苦か有りし野河  
の岸に菊の花手折とて流れ一筋から渡りし給ふ時我はるかに歳下の身のコマシヤクンにも君さ  
まの袂ぬれるとて袖襟かけて参らせしを如何に人にも笑はれけん思へば其頃が浦山し君さま東  
京へ歸給ひし後さまゝ續く不仕合に身代は亂離骨廢あるが上に二親引つゞきての病死といひ  
愛きこと重なる神無月袖にもかゝる時雨空に心のしめる我れを取らへて郡長の悴づらが些少の  
恩辱にかけての無理難題やり返して遣りたけれど女子の身は左様もならず柳にうけるを宜きこ

まゝ  
五



とにして金やらん妾になれ行々は妻にもせん口惜しき事の限り聞くにつけても君さまのことが懐かしく或る夜にまされて國を出でつ漸々東京へは着きし物の當處なれば御行衛更に知るよしなく様々の愛き艱難も御目にかゝる折の寝められ種にと且つは心に樂しみつゝ賤しい仕業も身は清し行ひさへ汚がれずばと都乙女の錦の中へ木綿衣類に菅笠脚絆はづかしや女子の身不似合の菓もの賣りも一重に活計の爲のみならず便りもがな尋ねたやの一心なりしが縁しあやし引方ありて不圖呼び入れられし黒塗塙も勝手もとに商ひせし時後にて聞けば御誓古がへりどや嬢さまの乘したる車勢ひよく御門内へ引入るゝとて出でんとする我と行違ひしが何に觸れけん我がさしたる櫛車の前にはたど落しを知らず曳しかばなど堪るべき微塵になりて恨みを地に残しぬ嬢さま御覽じつけて氣の毒がり給ひ此そこねたるは我身に取らせよ代りには新らしきのを取らすべしとの給ひしかど元來落せしは我が粗忽なり曳かれしも道理破損しとて恨みもあらず況てや代りをとの望みもなし是れは亡母が紀念のなれば他人に奉るべき物ならずとて拾ひ納めて懐にせしをいとしく御不慙がり扱は親も無き人か憐れのことや先庭口より我が部屋まで來よ身の上も聞きたしとて連れ給ひぬ今こそ目馴れたる御座敷の結構と庭のたゞずまひ華族さまにやと疑がひしは一に嬢さまの御言語容姿にも依りし物か其も美しくしき嬢さま御親切

にも女子同志は互ひぞとて御優しき御詞我もまきりに嬉しくて尋ぬる人ありとこそ明さしりしが種々との物語に和女の母御は斯々の人ならずやと思ひ寄らぬ御問ひ誠に若かぞ何として御存じと云へば忘れて成るべきか和女と我れとは兄弟ぞかし我れは梨本の優なるをとて手を取りての御喜び扱は母が乳を參らせたる君なりしか御目にかゝりし嬉しさに添へて落ぶれし身はづかしと打泣きしに榮枯は時なるものを歎く事かは萬は我れに委せよかし悪るき様にはなすまじければ今日より此處に身を落つけずや母様には我れ願はんとして放し給はず夫様も又くれぐれの仰せに其まゝの御奉公都會なれぬ身とて何ごとも不束なるを彼は彼此は此と陰になりてのお指圖に古參の婢女も侮どらず明日の我れ忘れし様な樂な身になりたるは嬢さまの御情一つなり此御恩何として送るべき彼の君さまに廻り逢はゞ二人共々心を合せてお話し相手に成るべきを何につけても忍ばるゝは又彼の人の事なりしが思ひきや嬢さま昨日今日のお物思ひ命にかけてお慕ひなさるゝ主はと問へば杉原三郎とのおや三輪の山本まるしは無けれど尋ぬる人ぞと知る悲しき御存じ無ければこそ召使ひの我れふし拜みてのお頼み嬢さま不憫やと思はぬならぬと彼の何として取持たるべき受合ては立ちし物の此文には何の文言どういふ風に書き有るにや表書きの常盤木のきみまゝあるとは無情ひとといふ事か岩間の清水と心細げには書き給へど扱も



扱も御手のうるはしさも姿は申すも更なり御心だてと云ひ御學問と云ひ欠け處なき御方さまに  
 思はれて嫌やとはよもや仰せられまじ我れ深山育ちの身として比べ物になる心はなけれど今日  
 までの憂き苦勞は何ゆゑぞ逢はんと思ふ夫一つに萬の願ひをかけ置きしに今日の前に逢ふ日は  
 來ても逢ふが悲しき事義に成りぬ嬢さまの御恩は泰山の高きも物の數かはよしや蒼海に珠を探  
 れと仰せらるゝとも夫に違背はすまじけれど我が戀人周旋んことどう断念めてもなる事ならず  
 御恩は御恩これは是なり寧ろそと文取次いだる躰にして此まゝになすべきか否や夫にては道  
 がたゝず實は斯々の中なりとて打明けなば嬢さま御得心の行くべきか我こそは夫で宜けれど彼  
 れほどまでに思しめし入れたもの左ればと云ひて断念のつく筈なし我身の願ひが叶へばとて現  
 在にお心知りながら夫もつらし是れも愛しと迷ひに心も夕暮の空も入重つくく詠むれば明日も  
 晴日か西の方のみ紅みの雲たな引きぬ

(四)

男も女も法師も童も容貌よきが好きぞとは誰れ色好みの言の葉なりけん杉原三郎と呼べる人  
 面ざし消らかに舉止優雅たが目に見ても美男ぞと見ゆればこそは罪つくりなれ我ゆゑに人二人

まで同じ思ひにくるしむ共いさやまら極の若葉の露かぜに散る夕ぐれの散歩がてら梨本の娘  
 病氣にて別荘に出養生とや見舞てやらんとて柴の戸をどづれしにち八重はじめて對面したり逢  
 はい云はんの千言百言うさもつらさも胸に呑みて思ふも言はず義理とも言はず涙かへる涙も人  
 事にして御不憫や嬢さま此程よりのお煩ひのものと云はれ何ゆゑならず柔和しき御生質とて  
 口へとては出し給はぬほど懇さらし御いとほしお心は中々我が云ふやうな物にはあらず此お文  
 御覽せばお分りになるべけれど御前さま無情も返事もし遊ばされなば彼のまゝに居給ふまじき  
 御決心ぞと見る目は如何につらからぬ事か久し振にて御目にかゝりし我身の願ひ是れ一つなり  
 叶へさせ給はれ嬉しかるべきをとて取次ぐ文の思ひ切りても涙ほろく膝に落ちぬ義理といふ  
 もの世に無かりせば云ひたきこといと多し別れしよりの辛苦は如何に或る時はあらぬ人に迫ま  
 られて身の通ればの無かりし時操はちもし命は鷲毛の雪の夜に刃手に取りしことも有けり或時  
 はち行衛たづね詫て恨みは長し大河の水に沈む覺悟も極めしかど引れし後髪千筋にはあら  
 で一筋に逢ふといふ日を願ひにして今日までも過せし身なりと云ひければ嬢さまの戀も我が  
 戀にも深さ深さのあるべきにあらず我れまだ其事を口にせねば入譯御存じなきこそよけれ御恩  
 がへしにはち望み叶へさせまして悦び給ふを見るが樂しみぞと我れを捨ての周旋なるを他しで



とは思ふまじ左るにても君さまの心氣づかはしと仰ぎ見れば端なくも男はじつと直視めたり  
 ハツと俯向く楳紅葉のかけ美るはしき秋の山里に葺がりして遊びし昔は蝶々鬘の夢をたちて  
 姿やさしき都風たれに劣らん色なるかは愁ひを合めと愛らしき雨の撫子えはれて床し三郎の心  
 何と知らねと優子の文を手にとりつ淺からぬち心辱けなしとて三郎喜こびしと傳たへ給へ外  
 ならぬ人の取次こと更に嬉しければ此文は賜はりて歸宅すべしとて懷中に押し入れつゝ又こそと  
 坐を立つに扱は娘さまの心汲どり給ひてかど嬉しきにも心ほそく立上る男の顔そと窺ひてホロ  
 リとこぼす涙を藏くし娘さまにも無ぞも喜び我身とても其通りなり御返事屹度まぢますと云へ  
 ば點頭ながら立出る廻り様のまじの橘そでに齎りて何時か月に中垣のほとり吹のぼる若竹の  
 葉風さら／＼として初ほどとさす待べき夜なりとやをら降たつ後 姿見送る物はあ八重のみな  
 らず優子も部屋障子細目に明けて言はれぬ心とを三郎一人すしげに行々吟ずる 詩きいた  
 し

(五)

便りまつ間の一日二日嬉しきやうな氣づかひな八重に遠慮は入らぬものゝ又言ひ出すかと思は

るゝも恥かしくぞつと堪ゆる返事の安否もしやと思へば萬一やになるなり八重は大丈夫と受合  
 へど夫は氣やすめの詞なるべし彼の文とても御受取になりしやならずや其場て其まゝ御突き戻  
 しになりたるを我れに力落させまじとて八重の繕ひて居るにはあらずや否や／＼八重として其  
 様のことある筈なし人を疑がふは罪ふかき事なり一日二日待給へ好き御返事の参るは定ぞと言  
 ひしに違ひは無かるべし若しさうならば何とせん八重は上もなき恩人なれば何ごとなり共氣に  
 入ることとして悦ばせたり歳は下なれど分別ある人として言少なれば願ひは有や望みはなしや知  
 れ難きを何とせん扱も人妻となりての心得は娘の時とは異なる物どか御氣に入らば宜けれど若  
 し飽かれなば悲しき事よ先それよりも覺束なきは彼の文の御返事なり御覽にはなりたり共其ま  
 ゝ押まろめ給ひしやら却りて御機嫌をそこねもして愛想づかしの種にもならば云はぬに増る愁  
 らさぞかし君さまこそ無情とも思ふ心に二つは無し不幸か知らねど父様母さま何と仰せらるゝ  
 とも他處ほかの誰れ其人に持べき八重は一生其人は持たずと云ふものから我が身とは自ら異  
 りて關係はることなく心安かるべし浦山しやと浦山るゝ我をば知らで吐息をもらしぬあ八重は  
 つく／＼有し日の事を思ふに男心の頼みがたさよ我れ周旋する身として事整ふは嬉しけれど  
 優子どのゝ心宜く見えたり三郎喜こびしと傳へ給へとは餘りといへど昔しを忘れ給ひしと詞な



りトもふは我が身の妬みにやち主様ゆゑには身を殺して忠義を盡くす人さへ有るを我一人にて愛きを志のば何處も事なく納まるべきなり何氣なき娘さまが八重や八重やと相談相手に遊ばすを御恨み申は罪のほども恐ろし何ごとも殘さず忘れても主さまこそ二代の御恩なれ杉原三郎といふも人元來のお知人にもおらず況てや契りし事も何もなし昨日今日逢しばかり若かもお主さまの戀人に未練のつながらる筈はなし御縁首尾よく整のへて陸まじく暮し給ふを見るが切めての樂しみなり我れは望みとて無き身なれば生涯この家に御奉公して御二た方さま朝夕の御世話さては嬰子さま生まれ給ひての御抱き守り何にもあれ心を賣めて仕へんか夫は何としてもなる事ならず兎ても角ても愛き世なれば人訪はぬ深山の奥にかき籠りて松風に耳を澄まされ宜かるべけれど夫すら彼の人の見捨ては入り難かるべしとてつくつくと打歎けど人に見すべき涙ならぬば作り笑顔の片頬さびしく物案じの主慰めながら我れ先づ亂るゝ蕪の戀はくるしき物なるにや成るとは見え覺束なき人の便りをまつとは云はず杉原さまは廿四とや歳よりは老けて見え給ふなり和女は何と思ふぞとて臆氣なこと云て見る心や流石に通じけんも八重一日莞爾やかに娘さま喜び遊ばす事あり當て御覽じろと久し振りの戯れ言さりとはい餘りに廣くさて取り處が分らぬなりと微笑ば左らば端を少し聞かし參らせんお前さま何より何よりお嬉し

と思しめす事が有べし夫なりとて容易は言ひもせず夫ぞとは知れど猶も知らぬ顔に八重が例に似ぬことよ先づ云ふて聞かしても宜さそうなど打怨ずれば其やうに御いそぎなされますなど打笑ひながら彼の君より御返事が参りしなり是がお嬉しからぬ事かと叫かれて耳の根くわつと熱くなり胸どろろかかれて噛む袖の下に密と置く藻しほぐさ俄には手にも取らぬを八重察して進めつゝ取まかなひて封を切らすに多にはあらで一枚の短冊なりけり兩女ひとしく見る雲形

茂りあふわか葉にくらき迷ひかな

みるべきものを空の月かけ

意味の存する處何方ぞや花として開きわか葉のかけいと迷ひは茂り合ふばかり晴るよし無き空の月の心々に判じて見れど何れ真意を得ぞわき難く喜ぶべきか歎くべきかお八重はお八重優子は優子斯く云はれなば斯くせんを決心互に堅けれと思ひの外なる返しには何と定めて何とせん未練は流石ありそ海のおきて見つ又取りて見つながらめに飽かねど吐息されて八重はマア何と思ふぞと人の詞を待てるあな覺束なの三十一文字や



怪しや三郎の便りふつと聞えず成りぬ待つには一日も説しきを不審しかりし返事の後今日や來給ふ明日こそはと空だのめなる日を重ねて十日半月さては廿日憂き身につらき卯月も過たり五月雨ごろのまめり勝に軒の忍脚は我が類ひの引きては言かねど池のあやめの根ながき思ひにかき暮らされて袖にも水かさの増さりやすらん此處は別荘の人無も少くなく氣に入りの八重を置ては別荘守りの夫婦のみなれど最愛の娘病氣との事なり本宅よりの使ひ絶え無ければ事によそへて杉原のこと問はするに本宅にも此頃さらけに参り給はずといふ左るにても何とし給ひしにや我心をさなくて卒爾に文など参らせたるを如何に厭はしと思しなから返しせざらんも情なしとて彼れよりは夫となく御出のなきか此頃のお歌の心は如何に茂るわか葉の今こそは聞らけれど時節を待たば空の月の逢みるべきぞとならば嬉しけれと若しやの願ひに左様見ゆるにや寧ろ慰らからば一筋ならで頼みのある丈まどはるゝなり扱も便りの聞えぬは何故我れ厭はせ給ひなば此處へこそ御入來なく共本宅へまで御疎遠とは不審し、夫ほどまでには御嫌ひになるほどなら優しげな御詞なせ仰せおかれけん八重が思ふも恥かしきまで彼の時は嬉しかりしを此まゝに見

返りもし給はずば今さら面ても向けがたし悲しき事よと娘氣に頼みぞかけて見つ又ときつ思案にもつるゝ燃糸の八重が歎きは又異なり茂る若葉の妨げと仰せられしは我が事ならずや聞き迷ひと歎じ給へど夫れ悟りたればこそこの御取持ちなれ思ひ合ふ中のお兩方に我が生涯の望みも願みも御譲り申して思ひ置くこと些少なきを何はかりての御遠慮ぞや身を觀ずれば御恨みも未練も何にもあらずと二方さま首尾と一のひし曉には潔よく斯くして流石は貞操を立るとだけ君さまに知られなば夫を思での我れなるに此身ある故に娘さまの戀叶はずとせば何とせん身退ぞくは知らぬならぬと義理ゆゑ斯くと御存じにならば御情ぶかき御心として人は兎もあれ我よくばと仰せらるゝ物でなし左らでも御弱きお生質なるに如何つきつめた御覺悟をも遊ばすまじき物ならず御最愛のお一人娘とて八重や何分たのむぞと嚴格い大旦那さまへ我身風情に仰せらるゝは御大事さのあまりなるべし彼につけ是につけ氣づかはしきは彼の人の事よ有りし日の對面の時此處に居給ふとは思ひがけず郷里のことは我れ聞きたり辛苦さこそなるべけれど奉公大切に勉め給へと仰せられしが耳に残りて忘れぬなり彼れほどにお優しからずば是れほどまでにも歎かじと断ち難き絆つらして人見ぬ暇には部屋のうち伏し沈づみぬ何れ劣らぬ双美人に暮はるゝ身嬉しかるべきを何を厭ふてか三郎かき絶て影も見せず疑念は重なる五月雨のく



も、薄らぐべき由もなく、世をうみ梅實の落る音もそらろ淋しき日を幾日、をぐらき窓のひ  
けくれに、をち返りなく山時島の。から紅ぬにはふり出でぬど、涙に袖の色かはるまで同じ歎  
きを別に知る主従の思ひさても果敢なし優子はいと世を知らぬ身のち八重が素振り得も察せ  
ず氣の毒や我身大事にかけるとて瘦せ見ゆるほど心配させし和女の情は忘れぬなり左りながら  
如何ほど盡くしてくる、共なるまじき願ひぞは漸々に断念たり夫につきて又別に父様母さま  
への御願ひあれど御二方なり和女なりに歎きをかくるが愁らきぞとしてみみく物語りつち八  
重の膝に身をなげ伏して隠くしもやらぬ口説ごとには八重われを忘れて抱き合ひ詞もなくよ  
と泣きしが前さまに其やうな御覺悟させますほどなら此苦勞はいたしませぬ御入來の無きは  
不審しけれど無情き御返事といふにもあらぬを早まつての御考へは御前さまの様にも無し今迄  
はしの御辛抱ぞ其うちには何ともして屹度喜こばせ申べし八重が一心を憐れども思しめして  
其やうな悲しいことと聞かせ遊ばすなとて力を添へぬ優子嬉しく手に手を取りて前の世では何  
でありしやら兄弟にもなき親切この後とも頼むぞや是よりは別しての事何とも汝の異見に隨  
がはん最早今のやうな事云ふまじければ免してよと詫らるゝも勿躰なく待てば甘露と申すぞ  
やと輕るげに云へど義理は重し袖に晴れ間は見えぬ物の限りあればにや今日珍づらしく驚なき

て雨の餘波に軒ばの露に照る日わたらしく玉をみがきて庭の木かげも心地よげなるを籠居ての  
み居給ふは御躰にも毒なる物をどお入重さまくんに誘ひて邊りちかき野の景色田面の庵の詫た  
るも又をかしかるべし御覽せすやとわりなくすゝめて柴の戸めづらしく伴ひ出でぬ人の心のう  
やむやは知らずや茂る木立すしく袖に吹く風むねに欲し、植はたす小田の早苗青々として處  
々に鳴き立つ蛙の聲さまくくなる彼れも歌かや可笑しとてホ、笑む主に我も嬉しく彼方の葦ぶ  
き此の垣根と庭の中に欲しきやうなり彼の花は何ならんと小走りして進み寄りつ一枝手折りて  
一輪は主一輪は我れかざして見るも機嫌取りなり互の心は得ぞしらす咩道づたひ行返りて遊ぶ  
共なく暮す日の鳥も寐に歸る夕べの空に行く雲水の僧一人たたく月下の門は何方ぞ蒲山しの身  
の上やと見送れば見かへる笠のはづれ兩女ひとしくヲ、と叫びぬ



# 曉月夜

## 第一回

櫻の花に梅が香とめて柳の枝にさく姿と、聞くばかりも床しきを心にき獨りずみの囁、たつ名みやび男の心を動かして、山の井のみづに浮岩るゝ戀もありけり、花櫻香山家ときこえしは門表の従三位よひまでもなく、同族中に其人ありと知られて、行く水のながれ清き江戸川の西べりに、和洋の家づくり美は極めねど、行く人の足を止むる庭木のさまざま、翠色したる松にまじりて紅葉のある邸と問へば、中の橋のはし板とくばかり、扱も人の知るは夫のみならず、一重と呼はるゝ令嬢の美色、姉に妹に數多き同胞をこして肩ぬひ揚げの幼なだちよりいで若紫ゆく未はと寄する心の人々も多かりしが、空しく二八の春も過ぎて今歳廿のいたづら臥、何ごとぞ飽くまで優しき孝行のころに似ず、父君母君が苦勞の種の嫁いりの相談かけ給ふごとに、我まゝながら私し一生ひとり住みの願ひあり、仰せに背くは罪ふかけれど、是ればかりはと子細もなく、千篇一律のやゝを徹して、はては世上に思はしき名を謠はれながら、

狭き乙女の氣にもかけず、更けゆく歳を惜しみるせず、靜かに月花をたのしんで、態どにあらねど浮世の風に近づかねば、慈善會に袖ひかれたき願ひも叶はず、園遊會に物いひなれん頼みもなく、いと高嶺の花ごころに苦るしむ人多しと聞きしが、牛込ぢかくに下宿住居する森野敏とよぶ文學書生、いかなる風や誘ひけん、果放なき便りに令嬢のうはさ耳にして、可笑しき奴と笑つて聞きしが、その獨栖の理由、我れ人どもに分らぬ處何ゆゑか探りたく、何ともして其女一見見たし、否見たしでは無く見てくれん、世は冠せ物の滅金をも、秘佛と唱へて御戸帳の奥ぶかに信を増さするならひ、朝日かげ玉だれの小籠の外には耻かゝやかしく、娘とも言はれぬ恩物などにて、慈悲ぶかき親の勿躰をつけたる拵へ言かも知れず、夫れに乗りて床じがるは、雪の後朝の未つむ花に見參まへの心なるべし、扱も笑止とけなしながら心にかゝれば、何時も門前を通る時は夫れとなく見かへりて、見ることも有れかしと待ちしが、時はあるもの飯田町の學校より歸りがけ、日暮れ前の川岸づたひを淋しく來れば、うしろより、掛け聲いさましく駆け抜けし車のぬしは令嬢なりけり、何處の歸りか高齡とどなしやかた、白粉にはあるまじき色の白さ、衣類は何か見とむる間もなけれど、黒ちりめん羽織にさらさらとせし高尙き姿、もしやと敏われ知らず馳せ出せば、扱こそ引こむ彼の門内、車の輪の何にふれてか、がた



りと音して一ゆり揺れば、するり落ちる後ろさしの金簪を、令嬢は機手に受けとり給ふ途端、夕風さつと其袂を吹きあぐれば、簪がへる八つ口ひらひらと洩れて散る物ありけり、夫れと知らねば車は其のまゝ空關にいそぐを、敏何ものとも知らず逃しく拾ひて、懐中におし入れしまし跡も見ずに歸りぬ。

乗り入れし車は確かに香山家の物なりとは、車夫が被布の縫にも知れたり、十七八と見えしは美しくしさの故ならんが、彼の年齢の娘はかに有りとも聞かず、噂さの令嬢は彼れならん彼れなるべし、さらば噂さも嘘にはあらず、嘘どころか聞きしよりは十倍も二十倍も美し、さても、其色の尋常を越えなば、土に根生ひのばらの花さつ、絹帽に挟まれたしと願ふならひを、彼の美色にて何故ならん、怪しきよと計り敏は燈下に腕を組みしが、拾ひきしは白絹の手巾にて、西行が富士の烟りの歌を繕うはねども筆のあと美ごに書きたり、いよいよ悟めかしき女、不思議と思へば不思議さ限りなく、あの愛らしき眼に世の中を何と見てか、人じらしの振舞ひ理由は有るべし、我れ夢さら戀などし厭やらしき心みぢんも無けれど、此理由こそ知りたけれ、若き女の定まらぬ心に何物か觸るゝ事ありて、夫れより起りし生道心などならば、かへすがへす淺ましき事なり、第一は不憫のことなり、中々に高尙き心を持そこねて、魔道に落入るは我

々書生の上にもあるを、何ごとにも一筋なる乙女氣には無理ならねど、さりとて敷かはしき迷ひなり、兎も角も親しく逢ひて親しく語りて、諫むべきは諫め、慰むべきは慰めてやりたし、さは言へど知りたきが世の中なれば令嬢にも悪き出などありて、其身も行きたく親も遣りたけれと嫁入りの席に落花の狼藉を萬一と氣づかへば、娘の耻も我が耻も流石に子爵との宜く隠くして、一生を箱入りらしく暮らせんとにや、さすれば此歌は無心に書きたるものにて半文の價値もあらず、否この優美の筆のあとは何としても破廉耻の人にはあらず、必らず深き子細ありて尋常ならぬ思ひを振袖に包む人なるべし、扱もゆかしや其ねば玉の夜半の夢。

はじめは好奇の心に誘はれて、空しく想像をいろいろに描きしが、又折もがな今一度度みたしと願へど、夫よりは如何に行違ひてか後ろかげだに見ることあらねば、水を求めて得ぬ時の渴きに同じく、一念此處に集まりては今更に紛らはすべき手段もなく、朝も晝も燭をとりても、はては學校へ行きても書を開らきても、西行の歌と令嬢の姿と入り亂だれて眼の前を離れぬに敏われながら呆れる計り、天晴れ未來の文學者が此様のことにて如何なる物ぞと、叱りつける後より我が心ふらふらと成るに、是非もなし是上はと下宿の世帯一切たゞみて、此家にも學校にも腦病の療養に歸國といひ立て、立いでしまし一月ばかりを何處に潜みしか、戀の奴のさて



も可笑しや、香山家の庭男に住み込みしとは。

第二回

敏あさなきより楠木のあつかひを好きて、小器用に鉄も使へば、竹箒にきつて庭男ぐらゐ何でもなきこと、但し身の素性を知られじと計り、誠に只今の山田したて、土をなめても是れを立身の手始めにしたき願ひと、我れながら宜ぐも言へたる嘘にかためて、名前をも其通り、當座にこしらへて吾助とか言ひけり、さても氣の利かぬとて、是れほどの役廻りあるべきや、浮世の勤めを一巡終りて、さても猶かゝるべき子の怠惰にてもあらば、如來様も出迎ひまで此口つるしても置かれず、草むしりに庭掃除ぐらゐはとて、六十男のする仕事ぞかし、勿躰なや古事肥番事記を朝夕に開らきて、万葉集に不審紙をしたる手を、泥鉢のあつかひに汚がす事と人は知らねど、埒もなく万年青の葉あらひ、さては芝生を道つて木の葉を拾ふ姿、我ながら見られ九躰でなく、これを萬一も學友などに見つけられなばと、心笹原をはしりて、門外の用事を兎角に厭へば、勝手はたらきの女子ども可笑しがりて、東京は鬼の住む處でもなきを、土地なれば彼のやうに怕きものかと、美事田舎ものにしてのけられぬ。

君ゆゑこそ可惜青年一人、此處にかく淺ましき躰たらくと、窓の小笹を吹く風そよとも告げぬば、知らぬ令嬢は大方部屋に籠りて、琴の音などにいよいよ心を馳まさせけるが、折ふしの庭あるきに徹座きずなき美しくさを認め、我れならぬ召使ひに優しき詞をかけ給ふにても情ふかき程は知られぬ、最初の想像には子細らしく珠數などを振袖の中に引きかくし、經文の讀誦に抹香くさくなりて、娘らしき匂ひは遠かるべしと思ひしに、其やうの氣ぶりもなく、柳髪いつも高島田に結び上げて、後れ毛一と筋えりに亂ださぬ嗜みのよさ、さても好みの斯くまで上手なるか、但しは此人の身に添ひし果報か、銀の平打一つに黒色ぶさの根掛むすびしを、優にうつくしく似合ひ給へりと思れば、束髪さしの花一輪も中々に愛らしく、此處一つに美人の價値定まるるといふ天然の衣襟つき、襦袢の襟の紫なる時は顔色こそ更に白くみえ、態ど質素なる黒ちりめん赤糸のこぼれ梅など品二層も二層もよし、あるが中にも漸色綸子の被布すがたを小波の池にうつして、排鯉に餌をやる弟君と共に、餘念もなく駄をむしりて、自然の笑みに陸まじき唄きの浦山しさ、敏もどより築山ごしに拜むばかりの願ひならず、あはれ此君が肺腑に入りて秘密の鍵を我が手にしたく、時機あれかしと待つま待遠や、一月ばかりを仇に暮して近づく便りの無きこそは道理なれ、令嬢は高嶺の花これは麓の塵、なれども鼠は平等に吹く物ぞ



かし。

甚之助とて香山家の次男、すゑなりに咲く花いと大輪にて、九つなれども權勢一家を凌ぎ、腕白さ限りなく、分別顔の家扶にさへ手に合はず、佛國に留學の兄上御歸朝までは、此君にあたる人あるまじと見えけるが、娘とは随一の中よしにて、何ごとにも中姉様と慕ひ寄れば、もとより物やさしき質の、これは又一段に可愛がりて、物さびしき雨の夜など、燈火の下に書物を開らき、膝に抱きて書を見せ、これは何時何時の昔し何處の國に、甚様のやうな剛き人ありて、其時代の帝に背きし賊を討ち、大功をなして此書は引上の處、この馬に乗りしが大將と説明せば、雀躍して喜び、僕も生長ならば素晴らしき大將に成り、賊などは何でもなく討ち、それは此様に書物に記かれる人に成りて、父様や母様に御褒美を頂くべしと威張るに、令嬢は微笑みながら勇ましきを賞めて、その様な大將に成り給ひても、私しとは今に替らず中よくして下されや、大姉様も其外のお人も夫々に片付て、人の與様に成り給ふ身、私しにはお兄様とお前様ばかりが便りなれど、誰れよりも私しはお前様が好きにて、何卒いつまでも今の通り御一處に居りたければ、成長くなりてお邸の出來し時、かならず伴なひてお茶の間の御用にてお爲せ給へ、お分りに成りしかど煩ずりして言へば、おだらも無く抱かれながら口ばかりは大人ら

しく、それは僕が大將に成りて、そしてお邸が出來さへすれば、其處に姉様を連れて行きて、いろいろの御馳走をなし、いろいろの面白きことをして遊ぶべし、大姉様や小姉様は僕を少しも可愛がりて呉れねば、彼んな奴には御馳走もせず、門を走めて内へ入れずに泣かしてやらんと言ふを止めて、其様な意地わるは仰しやるな、母様がお聞にならば悪るし、夫れでも姉様たちは自分ばかり演藝會や花見に行きて、中姉様は何時も留守居のみし給へば、僕が成長ならば中姉様ばかり方々に連れて行きて、ばのらまや何か見せたまなり、夫れは色々の書が活たる様に描きてありて、鐵砲や何かも本當の様に、火事の處もあり軍の處もあり、僕は大概に好きならば、姉様も御覽にならば屹度お好きならん、大姉様は上野の淺草の方も方々のを幾度も見しに、中姉様を一度も連れて行かぬは意地わるでは無きか、僕は夫れが憎くらしければと思ふまゝを遠慮もなく言ふ可愛さ、左様おもつて下なるは嬉しいけれど、其様のこと他人に言ふて給はるなよ、芝居も花見も行かぬのは私しの好きにて、姉様たちの御存じはなき事なり、もう此話しは廢しまするほどに、何ぞお前様が今日おそびて、面白く思ひし話しがあらば聞かして下され、今日は吾助がどの様なお話しをいたしました。この大將の若様難なく敏が擔になりけり、令嬢の中の睦ましきを見るより、奇貨おくべしと

五



竹馬の製造を手はじめに、楠木の講釋、いくさ物語、田舎の爺婆は如何にかしき事を言ひて、何處の野山は如何にひろく、某の海には名のつけ様もなき大魚ありて、鱈を助かせば波のあがること幾千丈、夫れが又鳥に化して、珍らしきことを怪しきこと取らぬか詰らなきことを、可笑しらしく話して機嫌を取れば、幼な心に十倍も百倍も面しろく、吾助々々付きまどひて離れず、我が心に面白しと聞けば夫れを其まゝ令嬢に語りて、吾助が話しは何とぞも嘘ならぬ顔つき、眞面目らしく取りつぐを聞けば、時鳥と鴈の前世は同郷人にて、吾助と時鳥の來る時其時に吾を買ひて價をやらざりしかば、夫れが借金になりて鴈は頭が上ならず、時鳥の來る時分に餌をさがして蛙などを道の草にさし、夫れを食はせてお詫をするとか、是れは本當の本當の話しにて和歌にさへ詠めば、姉様に聞きても分ること、吾助が言ひたり、吾助は大層な學者にて何とぞも知らぬ事なく、西洋だの支那だの天竺や何かのことも宜く知りて、其話しが面白ければ姉様にも是非聞かせ申たし、從來の爺と違ひ僕を可愛がりて姉様を賞めて、本當に好い奴なれば、今度候の吾したを編みてたまはる時彼れにも何か製らへて給はれ、宜しきか姉様、屹度ぞかし姉様、と熱心にたのみて、覺束なき承諾の詞を其通り敏に傳ふれば、此消息は人目の關の傳りもなく、玉露やすやす越えて、見るは邂逅なる令嬢の便りを敏は日毎に手に取るば

かり、事故ありげなる心の底も、此處にはじめて腫々わかれば、可憐の念むらむらと堪へがた  
く、君ゆゑにこそ斯くまでに身を盡くす我、木石ならぬ令嬢に憎くかるべき筈なし、此荆棘の  
中すくひ出して、影も未だなる戀に竹の柱の詫住居を思ひぬ。

第三回

關を常なる人の親とて、子故の道に迷はぬは無きものをと致此處に眼を止むれば、香山家三  
人の女子の中、上は氣むづかしく未は活潑にて、容貌大底なれども何として彼の君に及ぶ者な  
く、是れにても同胞かと思ふばかりの相違なるに、怪しきは母君の仕向にて、流石かるがるし  
き下々の目に立し分け隔ては無けれども、同じ物言ひの何處やら苦なく、愁らかるべしと思ふ  
こと折々に見えけり。

子爵の君最愛のおもひ者など、桐壺の更衣めかしき優さ形なるが、此奥方の妬みつよさに、可  
惜花さかり肺病にでもなりて、形見の止めし令嬢ならんには、父君の愛いばかり深かるべき  
を、いよいよ胸わるく憎くらしく思ひ、然るべき縁にもつけず生殺しにして、他處目ばかりは  
何處までも我儘らしき氣隨ものに言ひ立て、其長き舌に父君をも巻き込みしか、この一家に令



嬢ありと見て心を盡くす者なく、有るは甚之助殿と我れ計なる不憫しさよ、いさや此心筆に言はして、時機よくは何處へなりとも暫時伴なひ、其上にての策は又如何様にもあるべく、よし一時は陸奥の名取川、滑からぬ名を流しても宜し、憚かりの世の中打割りて見れば、天縁我れに有つて此處に運びしかも知れず、今こそ一寒書生の名もなければ、やがては令嬢をも幸福の位置に据えて、不名譽の取り返しは譯もなきことなり、扱も濱千鳥ふみ通ふ道はと夜もすがら筆を握りしが、もとより遺棄ならぬ令嬢の、殊に我れ庭男などに目の付く筈なければ、最初より飽書と知りては、手に觸れ給ふか否や其處まことに危ふし、如何にせんと思案に苦みしが、夫れよ、人目にふるゝは何の道なむこと、何も度胸と半紙四五枚二つ折にして、墨つぎ濃く淡く文か有らぬか書き紛らはし、態と綴じて表紙にも字を書き、此趣向うまくゆけかしと明るを待ちけるが、人しらぬこそ是非なけれ、此處は隣りさかひの藪際にて、用心の爲にと茅葺の設けに住まはする庭男、扱も扱も此曲物とは。

かと突然に問ふ可笑しさ。書もかきまする歌も詠みまする騎射でも打毬でもお好み次第と笑へば、夫ならば書を描きて呉れよ、夕へ姉様と賭をして、これが負ければ僕の小刀を取られる約束、夫れは吾助のことからにて、僕は吾助に書を描けると言ひしを、姉様はかけまじと言ひたり、負けては口惜しければ姉様が驚ろくほど上手に、後と言はずに今直に書きて呉れよ、掃除などは爲すとも宜しとて帚木を奪へば、吾助少し困りて、描きてはあげまするが今は少し、後に吾助の部屋へお出なされ騎馬武者をかきて参らせん、夫れとも山水の景色にせんかと紛らせば、嫌、嫌、嫌、今でなくては何でも嫌なり、後になぞと言はし其うちに僕は負けて、小刀を取られるから嫌、どうぞ是非今直に描て呉れよ、紙や筆は姉様のを借りて来べし、と帚木を捨て、駆け出すに、先づお待ちなされと遠たいしく止め直ぐと仰しやれば是非なけれど、下手に出て来なば却りて姉様に笑はれ、若様の負と言ふ物なり、斯うなされ、書はゆるゆると後日の事になし、吾助は番よりも歌の名人にて、田舎に居りし時は先生なりし故、其和歌を姉様にお目にかけて驚かし給へ、夫こそ必らず若様の勝に成るべしと言へば、早く其歌を詠めとせがむに懐中より彼の綴ぢ文を出し、是れは極大切の歌にて人に見すべきでは無けれど、若様をお勝たせ申たく、他の人に内證にて姉様ばかりに御覽に入れ給へ、早く、内證にて姉様にお上なされ、



と三つ四つに折りて甚之助の懐中に押し入れしが、無心の處何とも氣づかはしく、落さぬやうに人に見せぬ様にと呉々をしへ、早くも出でなされと言へば、兩手に胸を抱きて一心に駆け出す甚之助、お落しなされるな、と呼びもならず、俄かに心付て四邊を見れば、花に吹く風我れを笑ふか、人目はなけれど何處までも恐ろしく、庭掃除そこそこ唯人に逢はじと計り、敏これほどの小膽とも思はざりしを。

我が思ふ人ほど耻かしく恐ろしき物はなし、女同志の親しきにては此人こそと敬ふ友に、さし向ひては何とも言はれず、其人の一言二言に、耻かしきは飽くまで耻かしく、恐ろしきは飽くまで恐ろしく、塵ほどの事身にしみぬべし、男女の中もかゝる物にや、甚之助の吾助を慕ふは夫れとも異なりて淡き物なれど、我が好む人の一言重く、久を懐にして令嬢の部屋に來し時は、末の姉君此處にありて、お細工物の最中なるに、今見せては悪るかるべしと、情實は素より知る筈なけれど、吾助とも言はで遊び居けるが、甚様私しの部屋へもお出なされ、玉突して遊びますほどにと、面白げに誘ひて座を立つ姉君、早く去ねがしにはたはたと障子を立て、姉様これ、と懐中より半ば見せ、吾助は畫も上手なれど歌の方が猶名人ゆゑ、これを御覽に入れば、僕が勝つと吾助が言ひたり、勝てば僕の小刀は僕のにて、姉様のむむ人形はあ

約束ゆゑ頂くのなり、さあ賜はれと手を重ねれば、令嬢は微笑みながら、嫌、嫌、お約束は盡なるに歌にては嫌よ、むむ人形は上げまじと頭をふるに、夫れでも姉様この歌は極大切のにて人にも見せず落さぬ様に御覽に入れろと吾助の言ひしは、畫よりも良きに相違はなし、是非人形を賜はれとて手渡しするに、何心なく開らきて一二行よむとせしが、物言はず疊みて手文庫に納むれば、其顔を不審げに仰ぎて、姉様人形は下さるか、進げますと僅かに諾く令嬢、甚之助は嬉しく立あがつて、勝つた勝つた。

第四回

此思ひ通じさへせば此心安かるべしと願ふは淺し、入立つまゝに愁は増さりて、はてなき物は戀なりぞかや、敏はじめての飽書に心をいたりて、萬一落ち散りもせば罪は我れのみならず、知らじとて令嬢も死なされまじ、さらでもの繼母御前如何にたけりて、どの様の事にまで立いたるべきか、思へば我が思慮あさはかにて、甚之助殿に頼みしは萬々の不覺なりし、とも思ひ又自から願ましては、何の譯もなきこと、大英断の庭男とさへ成りし我、此上の出來と覺悟の前なり、只あやふきは令嬢が心にて、首尾よく文は届きたりとも、つれなく返へされなば甲



變もなきこと、兎角に甚之助殿の便り聞きたしと待けるが、其日の夕方彼の人形を持ちて例日より嬉しげに、お前の歌ゆゑ首尾よく我が勝に成り、此様な人形を取りしと誇り顔に来て見すれば、姉様は彼の歌を御覽なされしや、して何と仰しやりしと問へば、何とも言はずに文庫に入てお仕舞なされしが、今度も又あの様な歌を詠みて、姉様の御覽に入れよかし、お前が褒められなば我れとても嬉しき物をと可愛く言ふに、思ひある身一層たのもしく様々に機嫌を取りて、姉様も定めし和歌は上手ならん、是非吾助も拜見が仕たければ、此頃姉様に願ひなされ、お書き捨てを頂きて給はれ、必らず、乾度と返事の通路を此處にをしへ、一日を待ち二日を待ち、三日に成りても音沙汰の無きに敏こゝろ悶え、甚之助を見ることに夫れとなく促がせば、僕も貰つて遣りたけれど姉様が下さらねばと、哀れ板ばさみに成りて困り入りし躰、子心にも義理に引かれてか中に立ちと胡亂胡亂するを、敏いろくに頼みて此度は封じ文に、おらん限りの言葉如何に書きけん、文章の艶麗は評判の男なりしが。

さへ、垣根の櫻折れかし吾助、いさゝかの用事にて大層らしく、御褒美に賜はる菓子の花紅葉お手づからなる名譽はあれど、戀に本尊あれば傍だちに觸れる眼なく、一心おもひ込みては有し昔しの敏ならで、可惜廿四の勉強さかりを此躰たらく残念とも思はねばこそ、甚之助に追従しあるきて、本心には成るまじき文の趣向、案外のことにて拍子よく行き、文庫に納め給ひしとは最う我がものと、一度は勇みけるが、夫より後の幾度幾通かき送りし文に一度の返事もなく、さりとて無情は投かへしもせねど、披らきて讀みしや否や甚之助が答へぶりの果敢なきに此度こそと奮たるは、長々尋におまり思ひ筆にあふれて、我れながら斯くまでも迷ふ物かと、文を投出して嘆息しけるが、甚之助に向ひては猶さら悲しげに、姉様はあくまで吾助を憎くみて、われほど御覽に入れし歌に一度のお返歌もなく、あまつさへ貴君にまで、この様の取次するなどさへ仰しやりし無情さ、これ程の耻を見て我れ男の身の、をめをめお邸に居られねば、眼を明はりて歸國すべけれど、聞き給へ我れ田舎には両親もなく、只一人ありし妹の我れと非常に中よかりしが、今は亡せて何もなき身、その妹が姉様に正寫にて、今も在世はと戀しと堪へがたく、お前様に姉様なれば我れには妹の様に思はれて、其お書き捨ての反古にても身に添へて持たば本望なるべき、切めて一筆の拜見が願ひたきなり、されども斯く下賤の我れ、いか



様に思ふとも及びなき事にて、無禮ものとお叱りを受ければ夫まで、なれども願ならはば願にて、寧ろ断然、目通りも厭やなれば疾く此處を去ぬかし、とでも發言て、いよく成るまじき事と知らば其上に覺悟もあり、斯くまでの思ひ何として消ゆる筈なけれど、覺悟次第に断念もつくべし、今一度此文を進めて、明らかのお答へ聞いて給はれ、夫れ次第にて若様にも別れに成るべければと虚實をませて、子心に哀れと聞くやう願みければ、甚之助もどより吾助最賃にて、此男のこと一も十も成就させたく、喜ぶ顔見たさの一心に、これまでの文の幾通も人目に觸れぬ様といこほり無く届け、令嬢の心も知らず返事をと責めしが、此迫りたる詞に我れまづ悲しく、今日こそは必らず返事を取り、其方の喜ぶ様にすれば、田舎へ行くことは廢めになし何時までも此處に居て呉れよ、突然に田舎へ行きては嫌やぞと泣き、其涙を敏に拭はれて猶かなしく、手にすがりて何時までも泣きしが、三蔵子の魂のつはりには有らで、此こと心根にしみて悲しければこそ、其夜閑燈のもとに令嬢を拜がみて、吾助は斯く思ひて斯く言ふを、後生、姉様返事を賜はれ、決して此後我れも言はず惡戯もなすまじければ、吾助の田舎へ歸らぬやう、今まで通り一處に遊ばれるやう返事を賜はれ、只一寸で宜し吾助は二筆にてと言ひたれば、此巻紙へ何か書て僕に賜はれ、吾助は田舎へ歸りて行く處の無き身なれば、

大方は乞食に成るべきにや、夫では僕どうしても嫌やなり、是非此文を御覽なされて、一寸伺とか言ふて下され、よう姉様、よう姉様、お願ひ、此拜とて、紅葉の手を合はす可憐しき、情ふかき女性の身の、此事のみにも涙の價值はたしかなるに、よし山賊にせよ庭男にせよ、我れを戀ふ人世に憎くかるべきか、令嬢の情緒いかに鈍れけん、甚之助母君のもとに呼ばれ、此返事を聞く間なく、残り惜しげに出行たるあどにて、玉の腕に此文を抱き、胸に當て、夜もすがら泣きけり。

第五回

二十の春を夢と暮らして、落花の夕べに何ごとを思ひつきてか、令嬢は別荘住居したき願ひ、鎌倉の何處とやらに、眺望を撰んで去年買はれしが、話しのみにて未だ見ぬも床加しく、別亭の洒落たるがありて、名物の松がありてと父君の自慢にすがり、私し年來我が儘に暮して、此上のお願ひは申がたけれど、とても世を其處に送らしては給はらぬか、甚之助様成長ならば、遣はさるべきお約束とや、夫までのお留守居、又は父様折ふしのお出遊に、人任せ成らずは御不自由も少なかるべく、何卒其處に住まはせて、世を白波に浦風ももしろく、梅の花貝でも



拾はせて給はれとの願ひ、不憚や如何様な子細なればとて、月花をかしき盛りの歳に、千人萬人すぐれし美色を、鏡は無きか知らぬかの様な身の上、他人ごとにして嬉しとは聞かれぬを、親といふ名のまして如何ならん、さりとて隠居様じみし願ひも、令嬢が心には無理ならぬこと生中都に置きて同胞どもが、浮世めかすを見するも愁らし、何ごとも望みに任かせて、住みたしとならば彼地に住まはせ好きな琴でも松風に弾き合はし、氣儘に暮させるが切めても、父君此處にお許るしの出でければ、あまりとても可愛想のこと、よし其身の願ひとて彼の様な遠くに、路は夫れほどで無けれど行き限りにては我れも心配なり子供たちも淋しかるべし、甚之助は其うちにも慕ひて、中姉様ならでは夜の明けぬに、朝夕の駄々いかに増さりて、姉たちの難儀が見ゆる様なれば、今しばらく止まりてと、母君は物やはらかに曰ひたれど、お許しの出しに甲斐なく、夫々に支度して老實の侍女を撰らみ、出立は何日々々と内々に取きめけるを、甚之助かぎりなく口惜しがり、先づ父君に歎き母君を責め、長幼の令嬢に當りあるきて、中姉様を窘め出すこと、恨らみ、僕をも一處にやれと迫まり、令嬢に對へば譯もなく甘へて、取りつきしまし、泣きて離れず、姉様何ごを腹たちて鎌倉などへ出なさるぞ、夫れも一月や半月ならば宜けれど、お歸郷は何時とも知れずと衆人が言ひたり、その様に仰しやる共それは嘘

にて、鎌倉へ行かばお歸りの無きに極まりたれば、残りて淋しからんより我れも一處にゆき、我れも此邸に歸るまじ、父様も嫌や母様も嫌や、誰れを捨てとも諸共に行かんと計り、令嬢は静かに諭して、其身もほろりとし、可愛き事いふて泣かし給ふな、鎌倉へ行きて歸らぬとは誰れが言ひしか、夫こそは嘘にて、遂ひ一寸おそびに行き、其うちに歸つて來ます程に、おとなしう待ちて給はれ、よし歸らずとて彼地はお前様のお邸ゆゑ、成長なり給ふまでのお留守居、今もお連れ申たけれど夫こそ淋しく、直ぐ嫌やに成りて母様こひしかるべし、何も柔順しう成長なり給へど、詫るやうに慰められて、夫でもと腕白も言へず、しくしく泣きに平常の元氣なくなりて、悄然とせし姿可憐し。

令嬢が鎌倉ごもりの際、聞く胸どいろきて敏きはしは呆れしが、猶其之助に委しく問へば、相違なき物語半は泣きながらにて、何卒お廢めに成る様な工風は無きかと頼まれて、扱も何とせん、粗む腕の思案にも能はず、凋れかへる甚之助が人目に遠慮なきを浦やみて、心空になれど土を掃く身に簾木の而倒さ、此身に成りしも離れ故かは、つれなき令嬢が振舞其理由も探ぐれず、此處に捨てられて取のこされん我、いでや出立前の一目をと心に願ひしが、空しく影も見ず、明日の早朝と恨めしき便り、今は何も捨て、一日病氣と伏しけるが、懺に亂るゝ心あはれ



悲しくも、令嬢が部屋の一枚を隔てに、今宵かぎりの名残を惜しまんとて、心も空も宵闇の春の夜、落花の庭に踏む足の音なきこそよけれ、切めては夢に入れかしと忍びぬ。

更けて軒ばに風鈴の音と淋しや、明日は此音いかに戀しく、此軒ばのこと部屋のこと、取分けては甚様のこと、父君のこと母君のこと、平常は左までならぬ姉妹のこと、戀しかるべき物をも今も戀しく寐ぬ夜の床に物おもふ令嬢、甚之助の暫時も傍はなれず、今宵も此處に寐んと言ひしを、明日の朝の邪魔なればと母君遠慮して、連れ行かれしあとの猶さら淋しく、思へば明日よりの閑居いかならん、甚様はまばしこそ我れを慕ひて泣きもし給はめ、程へなば自づと忘れて、姉妹たちに馴れ給はんは必定、我れは紛さること無き身の戀しき日毎に増さりて、彼の笑顔みたしとても及ぶ事にあらず、父君とても左なりかし、遠く離れて面影をしのび、近きには十倍まして、深かりし慈愛の聲この耳を離れざるべし、是れによりてこそ此處をも捨ていと申しき思ひに身を苦るしむれど、吾助のことも忘れがたし、免るせよ吾助、夢さらさら憎くからねばこそ、戀すまじとて退く身ぞかし、うつせみの世に斯かる身の例し又ありや、知らぬ心に恨みもせん憎くもせん、其憎くまるゝを本望にての處爲、貰ひし文は何處までも惜しまに、封こそ切られ手文庫に秘めて、一生の際までは友とせん心、さりとては我れ生先のある

身、憂きに月日の長からん事愁らや、何事もさらさらと捨て、憂からず面白からず暮したき願ひなるに、春風ふけば花めかしき、枯木ならぬ心のくるしきよ、哀れ月は無きか此胸はるけなきにど、押す手にいよいよ動悸たかく、噛みしめる袖に涙こぼれて、令嬢は暫時うち伏して泣きけるが、吹入る夜風たが魂か、あくがるゝ心此處に堪がたく、静かに立つて妻戸を押せば、今ぞ廿日の月面かけ霞んで、さし昇る庭に木立のちぼろちぼろと暗く、似たりや弘徽殿の細殿口敷が爲には若くものもなき時ぞかし。

第六回

言はぬ浮世の機々には如何なることや潜むらん、今は昔しの涙の種、我が戀ならぬ懺悔物がたり聞くも悲しき身の上あり、春の夜ふけて身にしむ風に、寐屋の燈火またしく影もあはれ淋しや丁子頭の、花と呼ばれし香山家の姫、今の子爵と同じ腹に、双玉の稱へは美色に勝を占めしが、さりとて兄君に席を越えず、物静かにつゝましく諸藝名譽のあるが中に、琴のほまれは八方の空にも響きて、月の前に柱を直す時雲はれて影そでに落ち、花に向つて玉音を弄へば、ねを止めて節をや學びけん、子爵の寵愛子よりも深く、両親なき妹の大切に限りなければ、其



きが上にも其きを探らみて、何某家の奥方とも未だ名をつけぬ十六の春風、無惨や玉露なき通  
 じて此初櫻ちりかへりし袖、馬廻りに美男の聞えは有れど、月の雲井に塵の身の六三、何とし  
 て此戀なり立けん、夢ばかりなる契り兄君の眼にかゝりて、或る日遠乗の歸路、野末の茶店に  
 女を拂ひて、因果を合めし情の詞さても六三櫻頭の曉は、願さし延べて合掌の覺悟なりしを、  
 物やはらかに若かも御主君が、手を下げるぞ六三郎を立退いて呉れ、我れも飽まで可愛き其方  
 に、遣はさるべくは遣はしたけれど、七萬石の先祖が勤功に對し、皇室の藩屏といふ名に對し、  
 此こと許はなし難きに表立ちては姫も郎に置がたけれど、我れには一人の妹、ことに兩親老後  
 の子にて、形見と思へば不憫さ限りのなきに、其方が心一つにて我れも安堵姫に疵もつかず、  
 此處をよく了簡なし断念と退て呉れかし、さりながら此後の身の有つきにと包物を賜はりて、  
 言はねど手切れの、端金にはあらざりけんを、六三此金に眼も止めず、重々の大罪額と仰せら  
 るゝとも恨らみは無きを、情のお詞身に徹しぬとて男一匹美事なりしが、さても下腹に根を持  
 てば、戀を金ゆゑするどや思す、是より以後の一生五十年姫様には指もさすまじく、况て口外  
 夢さら致すまじけれど、金ゆゑ閉ぢる口には非ず、此金ばかりはと恐れげもなく、突もどして  
 切つくづくと詫ひけるが、歸郎その儘の眼を、惜しき名残を姫とも言はず、生れかはらば華族

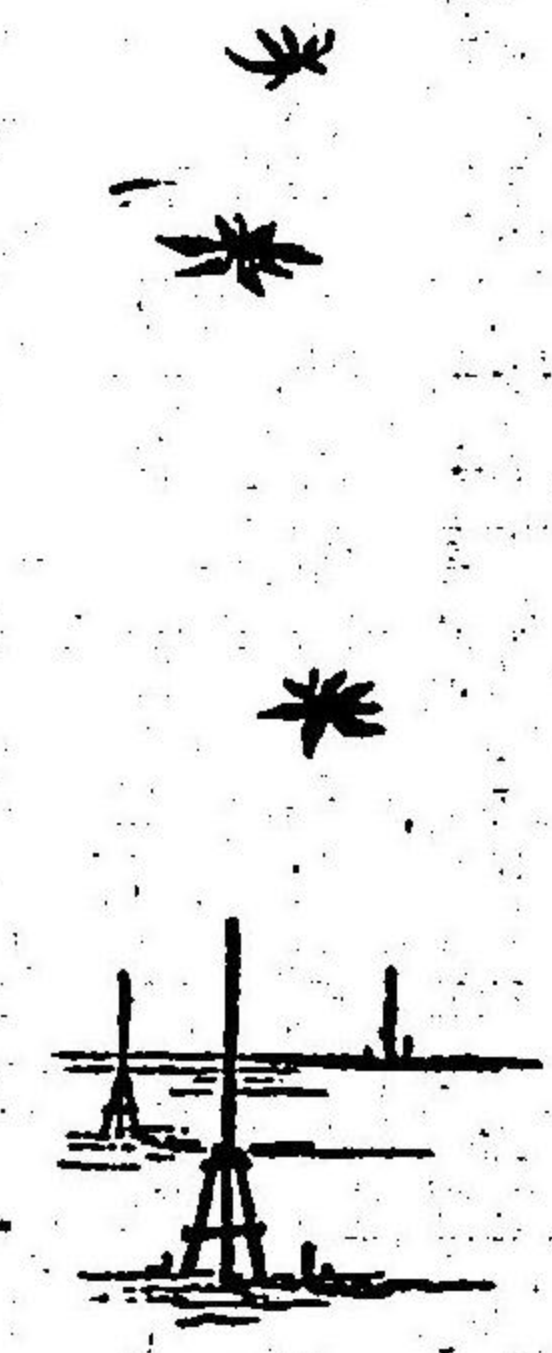
にと計り、此處を出で、何處へ行けん、忘れぬ姫のこと忘れぬはこそ、義理といふ字に涙を吞  
 んで、心は郎を離れざりしが、帳袋ふかくに物ももふ姫、六三眼を傳へ聞くより、心むすばは  
 れて解くこと無く、扱も慈愛ふかき兄君が罪とも言はで、さし惜給ふ勿跡なき、身は七万石  
 の末に生れて親は五とも愛給ひしに、瓦にあたる淫奔耻かしく、猶其人の戀しきも怒らく、涙  
 に沈んで送る月日に、知らざりしこそ幼なけれ、憂き身の上にあまきを重ねて、宿りし臘の五月  
 とは、扱もど計り身を投ふして泣けるが、今は人にも逢はじ物も思はじ、唯死ねかして身を捨  
 ものにして、部屋より外に足も出さず、一心悔み初めては何方に訴ふべき、先祖の耻辱家系の  
 汚れ、兄君に面目なく人目はづかしく、我心我れを賣りて夜も寐す盡も寐す、一身つかれて瘦  
 せに瘦せし姿、見る兄君の心やみに成りて、醫藥の手當に手づからの奔走いよいよ悲しく、果  
 は物言はず涙のみ成りしが、八月の壽命此子にあれば、月足らずの、聲いさましく揚げて、玉  
 の姫様御出生と聞きも敢へず、散るや櫻の我が名空しく成ぬるを、何處に知りてか六三天地に  
 哭きて、姫が命は我れ故と計、短かき契りに淺ましき宿世を思へば、一人残りて我れ何とせん、  
 待給へ諸共の心なりけん、見し忍び寐に賜はりし姫がまどきの緋輪轡を、最期の胸に幾重ま  
 きて、大川の波かへらず成りし。



不幸の由來に悟り初めて、父戀し母戀しの夜半の夢にも、咲かぬ櫻に風は恨まぬ獨りすみの願ひ固くなり、包むに洩れ身の素性、人老らねばこそ様々の傳手を求めて、香山の令嬢と立つ名くるしく、一切衆生すて物に、我まゝらしき境界ころには涙を呑みて、愛しや廿歳のいたづら臥、一念かたまりて動かざりけるが、岩をも徹す情の矢の根に敏がこと身にしみ初て、其人床しからねど其心にくからず、文を抱きて幾夜わびしが、我れながら弱き心の淺ましさに呆きれ、見ればこそは聞けばこそは思ひも増すなれ、いと鎌倉に身を遁がれて此人のことも忘れ、世に引かるゝ心も断ちたきものと、快心此處に成りし今宵、切めては妻戸としのち聲きたく、見とがめられん罪も忘れて此處に斯く忍ぶ身と袖にすがりて敏なげしは、これを拂ふ勇氣今は無く、よし人目には戀とも見よ我が心狂はねばと燈下に對坐て、成るまじき戀に思ひを聞く苦るしさ、敏はじめよりの一念を語り、切めてはあはれと曰へと恨むに、勿躰なきこととて令嬢も泣き、志しの文封は切らねど御覽せよ此通りと、手文庫に紙を見せしが、扱も我故と聞けば嬉しきか悲しきか、行末いかに御立身なされて如何様な人物に成り給ふ身にや、思へば母とき御勉強ごかりを我れなどの爲めとは何事ぞや、いよいよ戀は淺ましきもの果敢なきもの憎くきもの、我が生涯の此様に悲しく、人に言はれぬ物を思ふも、淺ましき戀ゆゑぞかし、我

れには有らぬ親の昔し、語るまじき事と我れも秘め、父君は更なり母君にも家の耻とて世に包むを聞かせ参らするではなけれど、一生に一度の打明け物がたり、聞て給はれ愛き身の素性と、此處に涙を盡くして語り明せば、夢とや言はん春の夜わけ方ちかく、鳥がね空に聞えて扱も忙しなし、君は都に我れは鎌倉に、引はなれて又何時かは逢ふべき、定離の例しを此處に見れば、戀は一人ぞ安かりける、何事も言はじ思はじ、仰せられても給はるなとて、曉の月に影を別ちしが、これより姫は如何に成りけん、扱も敏は如何に成りけん、つれなく見えし有明の月の形見を空に眺めて、(曉ばかり)と叫きけんか知らず。

(二十六年二月都の花第百壹號)





# 別れ霜

## 第一回

莊子が蝶の夢といふ世に義理や誠は邪魔くさし覺め際まではと引しむる利慾の心の斗量には黄金といふ字に重りつきて増す寶なき子寶のうへも忘るゝ小利大損いまに初めぬ覆車のそしりも我が梶棒には心もつかず握て放さぬ熊だか主義に理屈はいつも筋違なる内神田連雀町とかや、友崎りの喧しきならで客足まげき呉服店あり、賣れ口よければ仕入あたらしく新田と呼ぶ苗子そのまゝ暖簾にそめて帳場格子にやに下るあるじの運平不惑といふ四十男赤ら顔にして骨たくまじきは海苔油のきす鯉に育ちて世のせち辛さなめ試みぬ付け渡りの旦那様とは覺えざりけり妻はいつ頃なくなりけん、形見に娘只一人親に似ぬを鬼子とよべど産んだるよたかどて今年二八のつぼみの花色ゆたかにして匂濃やかに天晴れ當代の小町衣通ひめと世間に出さぬも道理か荒き風に當りもせばあの柳腰なにとせんと仇口にさへ噂し連れて五十稻荷の縁日に後姿のみも舞し得たる若ものは榮譽傍伴上やあらん卒業試験の優等證はなんのものは國會議員の格

子にならべて生涯の企望の一ツに敷へいるゝ學生も有りけり、さればこそ一度見たるは先づ驚かれ二々度見たるは頭疼しく駿河堂の香雲堂に其頃腦病患者の多かりしこと二ツに此娘が原因とは商人のする掛直なるべけれど兎に角その美は誠の美なり、姿形のうるはしきのみならで心さまのやさしさ情の深かき糸竹の道に長けたる上に手は瀧本の流れを汲みてはしり書うるはしく四書五經の角々しきは能とさけて伊勢源氏のなつかしきやまと文明暮文机のほどりを放さず、さればとて香爐室の雪に簾をまくの才女めきたる行ひはいさゝかも無く深窓の春深くこもりて針仕事に女性の本分を盡す心懸け誠に殊勝なりき、家に居て孝順なるは出て必らず貞節なりとか、これが所夫と仰がれぬべく定まりたるは天下の果報の一人じめ前生の功德いか許り積みたるにかと世にも人にも羨まるゝはさしなみの隣町に同商中の老舗と知られし松澤儀右衛門が一人息子に芳之助と呼はるゝ優男、契りは深き祖先の縁に引れて橙のみの一人子同志、いひなづけの約成立しは高がみどりの振分髪をお烟草盆にゆひ初むる頃なりしとか、さりとては長かりし年月、ことしは芳之助もはや廿歳今一兩年経たる上は公に夫とよび妻と呼はるゝ身ぞと思へば嬉しさに胸をどりて友達の賜ごとも恥かしくわざと知らず顔つくりながらも眼さる紅の潮ととり取す我しらす捲ふ袖屏風にいと心のうちあらはれて今更泣きたき事もあり人



みぬひまの手習に松澤たかどかいて見て又ぬりかくすあどけなき利發に見えても未通女氣なり  
同じ心の芳之助も射る矢の如しと口にはいへど待つ歳月はわが爲に弓づるためみしやうに覺え  
て明しくらず程のまどろかしさよ、高殿に見る月の夕影を分つはいつぞとのび花の下ふむ露  
のあした双ぶる翅の胡蝶うらやましく用事に藉言て折々の訪ちとづれ、餘所ながら見る花の面  
わが物ながら許されぬ一重垣にしみくどは物いひ交すひまもなく兎角うらめしきは月日なり  
ひま行く駒に形もあらば我れ手綱を取り鞭を揚ていそがさばやとまで思ひ渡りぬ、まかれども  
天公の美人を生んで美人を恵まず多くは良配を得ざらしむどかいへり、彌生の花は風必ずさそ  
ひ十五夜の月雲かゝらぬはまことに稀なり、覺束なしや才子佳人かゝらなべて待つ合歡の日はい  
つか來べき、あし分船のさはり多き世なればこそわれ親にゆるされ世にゆるされ彼は願ひ是は  
請ひよしや魔神のうかへばとてねば玉の髪一筋さしはさむべき間も見えぬをもし此縁結ばれ  
ずとせばそは天災か將た地變か

第二一回

隙を得て倒を望むは夫れ人情の常なるかも、百に至れば千を願ひ千にいたれば又万を諸願

休む時なければ心常に安からず、つらく思へば無一物ほど氣樂なるはあらざるべし、大勢が  
五十年と定まつた命の相埒黄金を以て狂はせる譯には行かず、往かずといふ共花降り樂きこえ  
て紫雲の來迎する曉には代人料にて事調はずとは誰もかねて知れたるはなし、鶴千年龜万年人  
間常住いづも月夜に米の飯ならんを願ひ假にも無常を觀するなかれとは大福長者と成るべき人  
の肝心肝要かなめ石の堅く取つて助かすべからざる法則なりとか、閑話休題そも松澤新田らが祖  
先と聞えしは神風の伊勢の人にて夙に大江戸に志を立て、競賣呉服の見るかげもなかりしよ  
り六間間口に黒ぬり土蔵時のまにたち上りし身代なりしが男の子供二人の内兄は無論家の相續  
弟には母方の絶えたる姓を起させ、新田とは名告らすれど諸事は別家の格に準じて子々孫々の  
未迄も同心協力事を處し相隔離すべからずといふ遺言かたく奉戴して代々親睦をかさね來しが  
當代の新田のあるじは家につきての血統ならず一人娘に入夫の身なりしかば相思ふの心も深か  
らず且は利にのみ走る痴漢なればかねては松澤が隆盛をたのみてあやにかけたる許嫁の縁し親  
なり子なり同門同士なり不足の品あらば持ち給へと彼方に斗り親切を盡さして引入し利も少な  
からず世は塞翁がうまさ事して幾歳すぎし朝日のかげ昇るが如き今の榮は皆松澤が庇護なるも  
のから咽元すくれば忘るゝ熱さかく對等の地位に至れば目の上の瘤うるさく成りて綱りつくづ



く案ずるやう方十町を隔てぬ所に同商業を営むが上に彼れは本家として世の用ひも重かるべく我  
とて信用薄きならねど彼方に七分の益ある時こゝには僅かに三分の利のみ我が家繁榮長久の策  
は彼れ松澤の無きにしかず且つは娘の容色世に勝れたれば是とも又一トツの金庫芳之助との  
えにし絶えなば通り町の角地面持參の聲もなきにはあらじ一舉兩得とはこれなんめりと思ふ心  
は娘にも秘め同氣求むる番頭の勘藏にのみ割て明かせば横手を拍つて賛成を表し主従日夜額を  
あつめて其方法を請じ居たりき、時なる設松澤はさる歳商法上の都合に依り新田より一時借り  
入し二千三百の金としは既に期限ながら一兩年引ついでての不景氣に流石の老舗も手元豊か  
ならず殊に織元その外にも仕拂ふ可き金いと多ければ新田は親族の間柄なりかつは是迄我が方  
より立かへし分も少なからねばよもや事情打あけて延期を乞はゆるさじといひもすまじ他人  
に内兜を見すかされ機械仕掛のあやつり身上松澤も最早下り坂よと囁かれんは口惜しく存なる  
新田は後廻し腹の織元其の外へ有金大方取あつめて仕拂ひたる風説こそ耳よりのことなれど平  
生ねらひすませしと彼方より延期をいひ出さぬ間に、切て放して急催促に言障すべき程もな  
く忽ち表向きの新田沙汰とは成れりける素松澤は數代の家柄世の信用も厚ければ僅々千や二千  
の金何方にても調達は出来得べしと世人の思ふは反對にて玉子の四角また萬國博覽會にも陳列

の風説をきかねど卅日に月の出る世の中十五夜の闇もなくてやは暗々の内臟々の奥いかなる手  
段か方法か新田が手配極めて妙にしていさゝかの融通も成ることかは示談を請はしやと奔走せ  
しかど夫すらも事調はず新田は首尾よく勝を制して凱歌の聲いささしく引上しには引かはりて  
松澤が周章狼狽と兼耳に出水の騒動さどろくといふ暇もなく巧みに巧みし計畧に争ふかひな  
く敗訴となり家藏のみか數代積きし腰籠までも昔かれが手に歸したれば木より落たる山猿同様  
たのみ木蔭の雨森新七といふ番頭の白鼠去年生國へ歸りし後は十露盤玉と筆先に帳尻つくらふ  
滑鼠のみ成りけん主家一大事の今日も申合せたる様に富士見西行きめ込み見返るものさへあら  
ざれば無念の涙を手荷物にして名のみ床しき妻戀坂下同朋町といふ所に親子三人雨露を凌ぐ計  
りの家を借りて辛く膝をば入たりけり、海ならず山ならぬ人世の行路難今始めて思ひ當り淵激  
ことなる飛鳥川の明日よりは何とせん、もと富家に人となりて柔弱にのみ育ちし身は是と覺え  
し藪もなく手に十露盤は取りならへど物に當りし事なれば時の用にはたちもせず坐して喰へ  
ば空しくなる山高帽子半靴と昨日かさりし身の廻りも一ツ賣り二ツ賣りはては卅日の勘定さへ  
胸につかゆる程にも成りぬ、



第三回

一人並みの男に成りながら何んの肺甲斐ない車夫風情にまで落魄すともこの外に仕やうの有らう物をと大言吐きし昔しの心の恥かしさ離れが好んで牛馬の代りに油汗ながし塵埃の中馳せめぐるものぞ仕様様様の盡きはてればこそ取外聞もないませにからめて捨てた身のつまり無念も残念も饅頭笠のうちに一つみて参りませうと涙びくに進める心いらぬと斗もさどうに過ぎ行く人それはまだしもなりうるさいはと叱りつけられて我知らずおとじさりする意久地なさまだ霜こぼる夜嵐に辻待の提燈の火の消えかへる迄案じらるゝは二ッ親のことなり馴れぬ貧苦に賣めらるゝと懐舊の情のやる方なさとが老躰の毒になりてや涙がちに同じやうな煩ひかた夫も御尤もなり我さへ遺憾で残念だ 鴈の煮え納まらぬものを胸さける程にも覺し召すなるべし憎くきは新田なり恨めしきは運平なりよしや血をすゝり 穴を露すとも憐るべき奴ならずと冷え氷る拳握りつめて當所もなしに白腕もしつ思ひ返せば夫も愚痴なり恨みは人の上ならず我れに男らしき器量あらば是れ程までには窮しすまじアと歎すれば吐息しろく見えて身を切る夜嵐に破れ屏風の内心配になりて絞つて踊るから車財布のものゝ少なき程苦勞のためか

多くなりてまた我が家の闕の高さ、チ、お歸りかと起き返る母、お父さんは御寝なッてござかさと御不自由で御座いましてらう何もお變りは御座いませんかと裏問ふ心は疵もつ足、チ、お前の留守に差配どのが見えられてさひさしておはたしく睡の露白岡鬼平といふ有名の無慈悲もの悪鬼よ羅刹よと隘口するは漉團扇の縁はなれぬ店子共が得手勝手家賃奇麗に拂ひて盆暮の砂糖袋甘き汁さへ吸はし置かば下ぐる目尻と諸共に眉毛の名によぶ地蔵顔にも見ゆべけれど今の身の上には憎くし剛愎もの事情あくまで知りぬきながら知らず顔の烟草ふか／＼身に誤りあればこそ疊に額ほり埋めての歎願も吹出だす烟の輪と消して、言譯きく耳はなし家賃をさめるか店を明けるか道は二ッぞどちらにでもしなされとぼんとはたく其煙管で打わつてやりたい面がまち目的なしに今日までと日の延べしは重々此方が悪るけれど母上とらへて何いひ居たかお耳に入れないと思へばこそ様々の苦勞もするなれさらでもの御病氣にいと重もさを添へた様なものにて困つたといひはせで低頭く心思案にくれぬ、差配どのが見えられても母は詞をくり返して何か譯は知らねと今直ぐに此家を立て一寸の猶豫もならぬと夫れは／＼番にも書かれぬ談じやうお前にも了簡あることゝやう／＼に言ひ延べて歸ります途と頼んでは置いたれどマアどうしたら宜からうか思案して見てくだされと小聲ながらもあろ／＼涙、お案じなされませ



などうにか成ります今夜は大分更けましたから明日早々出向きまして談合をつけませうナニ少  
しの行違ひで夫ほどの事では御座いませんと我が親にまで偽るとはさても後のよ恐ろし、寝  
ぬに明くる夜明け鳥もこうと鳴きて反哺のをしへとなる物を生甲斐なや五尺の身に父母の恩荷  
ひ切れずましてや暖簾の色むかしに染めかへさんはさて置きて朝四暮三のやうくしにたつく  
づく憂世いやになりて我が身捨てたき折々もあれど痛み疲れしニ親の寝顔さし覗くことに我  
なくば何とし給はん勿体なしと思ひ返せど沸くは涕か薬なべのした炭火とろくくと消え勝の活  
計とて眞醫の手にもかゝられねば見すく重り行く心ぐるしと思へば天も地も神も佛も我が  
ためにはみな仇か今この場合を見すくしたるには何の事ぞ新田こそ運平こそ大悪人の骨頂な  
れ娘計はよもやと思へど夫れも是も心の迷ひか姿こそ詞こそやさしけれ瓜の臺に生らぬ崩子  
父親と同じ心成つて今の我が身に愛想が盡きてか人傳ての文一通夫すらもよこさぬとは外面  
女菩薩の内心女夜叉め、

第四回

他人はとまれお前さまは高が心御存じと思つたは空だのためか情ないさ詞お前さまと縁きれて

存命る私しと覺しめすか恨みを申さば其のち心が恨みなり父様が悪計夫れも責め遊ばすにお答  
への詞もなければ其のくやしきも悲しきもお前さまに劣ることかは人知らぬ夜の夜具の襟何故  
にぬるゝ物ぞ涙に色のもしわらば此袖ひとつに疑ひは晴れやうもの同一穴の隙とは餘りの仰  
せ推量ても御覽せよ繋がれねど身は籠の鳥も同じこと風呂屋に行くも替古ごとも一人あるきゆ  
るされねば御目にかゝる時機もなく文あげたけれど御住所離れに問ひもならず心に斗り泣て泣  
て居りましたを辨情もの義理しらずと押くるめてのお詞も道理なれど御無理なり此身一ツに咎  
があらば打たれもせん突かれもせん膝ともといふ談合相手に遊ばしてよと涙ながら控へる袂を  
鋭く拂つてお高どの詞ばかりは嬉しけれど眞實やら何やら心まで見る目は芳之助あいたく持た  
ず父御の心も大方は知れてあり甲斐性なしの我れ嫌やになりて縁の断ちどが無さに計略三昧か  
かりし我等は畏のうちの隙ぞ手を打つて笑はるゝ筈を何の涕も化粧がはげては氣の毒なり牛に  
のりかへるうまき話しも内々は有ることならんを家藏持參の業平をとこに見せ給ふ顔われ等づ  
れに勿体なしお退きなされよ見たくもなしと無情や後ろむき悪くらしき事の限り並らべられて  
も口惜しきは夫ならず解けぬ心に表はれぬ胸うらめしく君様こそは何とも思召すまじけれど物  
ごころ知る其頃よりさまぐること苦勞にして身だしなみ物學び彼れか是れかお氣に入りたや



飽かれまじと心のたけは君様故に使はれて片時安き思ひもせず友達遊びも芝居行きも難ひ  
と知れば大方は断りうて頑物と笑はれしは誰れの爲をさな遊びの昔しは知らず睡じき中にも  
恥かしさが柄に成りて思ふこと思ふまゝにも得いけざりしを涙き心と思召か假令どのやうな事  
あればとて仇し人に何のその笑顔みせてならうことかは山ほどの恨みも受くる筋あれば詮方  
なし君様に愛想つきての計畧かとは詞ながら餘りなり親につながるゝ子罪は同じと覺悟なが  
ら其名斗はゆるし給へよしや父様にどのやうな憎しみあればと替らぬ心の私しこそ君様の  
妻なるものを何とげくしい他人あしらしひ聞えぬ心やといひたさを押ゆる涙袖に置きてモ  
と止めれば振拂ふ羽織のすそを、何さるゝ邪魔くさし我は前さまの弄品ならずお伽ぎになる  
は嬉しからず其方は大家の娘御暇もあるべしその日暮しの身は時間をもしく離れど相手を探  
しなされと振はらへば又すがり芳さまそれは御眞實かと見上る面白眼かへして嘘いつわりは  
お前さまなどのなさること義理人情のある世ならよもやと思ふ生正直から伺ひ大同様な人でな  
しに手をかまれて暖簾に見る羞は誰れゆゑぞ素を正せば根分けの菊親子の中に知らぬといふ道  
理はなしよし知らぬにせよ知るにせよ夫れは其方の御勝手なり仇敵の子を妻にもせられず嫁に  
もすまじいふこともなし聞くことも無し恨みつらみを並らべ立てなば力車に牛の汗何の積み

のせ切れる者かは言はぬが花ぞお前さまは盛り身の春めき給ふは今の間なるべし蕪かぶりなが  
ら見送らんと詞町噂に氣込あらく齒の根きりくと喰ひしばりて釣り上ぐる眉根おそろしく散  
髪斜めに拂ひあげて白き面にて紅の色さしも優しき平常には似ず止めれば振る袖袂まづ今  
まばしと詫びつ恨みつ取りつく手先うるさしと立隙にはたと蹴倒されはつと泣く聲我れどわが  
耳に入りて起き返るは何處、平常の部屋に倚りかゝる文机の湖月抄てふの巻の取果なく覺め  
て又思ひそふ一睡の夢夕日かたぶく窓の簾風におはれる音も淋し。

第五回

お珍らしや高さま今日の御入來は如何いふ風の吹まはしか一昨日のお替古にも其前もお顔つ  
ひにお見せなさらずお師匠さまも皆さまも大底でないお案じ日一日お風説して居りましたと嬉  
しげに出向ふ替古朋輩錦野は女子と呼ばれて醫學士の妹博愛仁慈の聞えたかき兄を見真似か温  
厚しつくり何某學校通學生中に萬緑嶽中一點の紅と稱へられて根あがりの高髻に被布扮粗甘  
歳を越しての肩紐あげ可愛らしき人品なりお高さまを覽なされ老人なき家の婿のなさ兄は兄と  
て男の事家内のことは頼とすて物妾一人が拍つも舞ふも眞實に埃だらけで御座いますと笑ひて



誘なふ座蒲團の上も掃遊ばすなど沈み度にお高うやむやの胸の開所たれに打明ん相手もなし明友の離れ彼れ睦まじきもあれど夫は春秋の花紅葉對にして挿す簪の遺物ならぬと當座の交際委こそは幼げなれ智恵廣大と聞くは此人すがりて見ばやと是も小女氣さりながら妾に知れぬは人の心笑ひものにされなば夫も耻し何とせんと思ふほど兄弟ある人浦山しくなりてお兄様はちやさしいとかち前さま浦山しと口を濡るれば花子少し笑みを合んでこれ斗は私しの幸福さりとて喧嘩する時もあり無理な小言いはれまして腹立ち合ふこともあれど跡も無し先もなし生海鼠のやうなと笑はれます此頃は施療に暇がなうて芝居も寄席も順と御無沙汰その内にお誘ひ申します兄はお前さまをといひかけて笑ひ消す詞何としらぬとと施しとはお情深いとさぞかし可愛想のも御座いませうと思ふことあれば察しも深し花子煙草は嫌いと聞しが傍の煙管とりわけ一服あわたいしく押やりつ夫は最うさまくツイ二日斗前のこと極貧の裏屋の者が難産に苦しみまして兄の手術に母子とも安全ではありましたれと嬰子に着せる物がないとか聞かませば平常の心に承知がならず其の夜通して針仕事着るものニッ遣はしましたと得意顔の物語り徳は勝なるこそよけれとか聞しが怪しのことよと疑ふ胸に相談せばやの心は消えぬ花子さまくの患者の話して昨日往診し同朋町とやら若しやと聞けば露違はぬ様子なり夫ほどまでには不可

有と思へど正しくならば何とせん實否くはしく聞たしと思へど答むる心に詞つまりて答へ何やら字漏く成りぬお高さま御ゆるりなされ今兄も戻ります先それよりは目に懸けたきもの往日お話し申せし兄が秘蔵の荷帖イニお前さまに御覽に入るゝに賞られこそすれ何として小言聞くことではなしと待遊ばせよと響應ぶり詞滑の人とて中々に歸しもせず枝に枝そぶ物たり花子いとし眞面目になりて斯う申してはをかしけれどお前さまは一人子私しとても兄斗女の同胞もたませれば淋しは同じこと何かにつけて心細し御不足かは知らぬと妹と思召してよと底にもある詞遣ひ夫は私しより願ふことと言ふ詞聞きも終らず夫ならばお話しありお聞き下さりますかと怪しの根問ひお高さまお前さまの胸一ツ伺へば譯のすむ事外でもなし眞實の姉さまにちなり下さらぬかと決然いはれて御申談私しこそ眞實の妹と思し召てと言ふを過り夫では未だ御存じの無きならん父御さまと兄との中にお話し成立てお前さまさへ御承知ならば明日にも眞實の姉様お嫌やかへお嫌やならばお嫌でよしと薄氣味わるき優しげの聲賑か眞實か餘りといへば餘りのこと、亂るゝ心を流石に靜めて花子さま仰せまだ私しには吞込ませぬお答へも何も追日のこと今日は先づお暇と立んとするを強ても止めず然らばお歸りか好きお返事お待申しますと送り出すを關先左様ならばを跡になして乗り出す車の途端車夫が掛け聲に馳



第六回

せ返ける一人の男彼れは何方の藝取辨れの姿やと見返へれば彼方よりも見返る顔ヲ、芳さま詞のいまだ轉び出ぬまに車轉々として轍のあと遠く地に印されぬ。

中筋子の障子ごしに中庭の松の姿をかしと見し絹布の四布蒲團すつぱりと炬燵の内あたゝかに、美人の酌の舌鼓うつゝなく、門を走る構ひるひ彼れは何方の小僧どん雪中の一ツ景物もしろし、進も積らば五尺六尺雨戸明けられぬ程に降らして常闇の長夜の宴、張りて見たと鈍れ舌に謔わ言の給ふちろく目にも六花の眺望に別は無けれど身にしむ寒さは降かゝりての後ならで知れぬ事なり、うそ寒しと云ひしも二日三日朝来もよほす薄墨色の空模様は頭痛もちの天氣豫報相違なく西北の風ゆふ暮かけて鷲毛か柳絮かはやちらく〜と降り出でぬ、入相の鐘聲陰に響きて暗にいそぐ友鳥今宵の宿りの詔しげなるに誰が空せみの夢の見初じめ、待合の奥二階に爪弾きの三下り籠を洩るゝ笑ひ聲低く、聞えて思はず止まる行人の足元、狂ふ煩惱の犬の尻尾、ままつたりと飛び退きて畜生めとは賊と踏みつけの詞なり、我が物なれば重もからぬ傘の白ゆき往來も多くはあらぬ片側町の薄ぐらきに悄然とせし提燈の影かぜに明滅くも心細げな

る一輛の車あり、齒代の安さ願はれて脱げたる塗り破れし母衣、夜目なればこそ未だしもなれ晝はつかしき古毛布に乗り客の品も無ぞと知られて多くは取れぬ瘦せ田作り米の代はど有や無や九尺二間の煙りの網あはれ手の中にかゝる此人腕力もばつかなき細作り車夫めかぬ人柄花奢というて賞めもせられぬ力役社會に生ひ立た身とは請取れず履歴は如何に聞きたしと問ふ人なれば我れと唇開らきもならず、ア、と出る溜息を噛しめる齒の根寒さにふるひて打仰ぐ面を見れば扱も美男子色こそは黒みたれ眉目やさしく口元柔和に歳は漸く廿か一か繼ぎ繼ぎの筒袖着物糸織ぞろへに改ためて帯に巻く金鎖りきらびやかなの姿させて見たし流行の花形俳優なんとして及びもないこと大家の若旦那夫れ至當の役なるべし、さりとは是れ程の人品備へながら身に覺えた藝は無きか取上げて用ひる人は無きか憐れのことやと目の前の感じなり心緒さらさら知れた物ならず美しくしき花に刺もあり柔和の面に案外の所爲なきにもあらじ恐ろしと思へばそんなもの、最負目には雪中の梅春待つまの身過ぎ世過ぎ小節に關はらぬが大勇也辻待ちの眼に原書描いて居さうな物と色眼鏡かけて見る世上の物映るは自己が眼鏡がらなり、夜はまだ更けぬと降りしきる雪に人足大方絶々になりて戸を下ろす商家こゝかして、遠く引く按摩の聲に近く交る犬の子の叫びそれすらも淋しきを道傍の柳にさつと吹く風になよ〜と靡いて散る



第七回

は粉雪、物思ひ顔の若物が襟のあたり冷いやりとしてハツと振拂へば半面を射る瓦斯燈の光り  
 青白し、行く人はなし乗る人は猶更なからんを何を待とか馬鹿らしさよと他目には見ゆる物か  
 ら未だ立去りもせず前後に目を配るは人待つ心の絶えぬなるべし、氷る手先を提燈の火に暖た  
 めてハツと一息力なく四邊を見廻して又一息深く憂慮の淵に沈むか瞑目の額を思案に組む  
 腕にのせて二三秒時此處に車を下ろしてより三度目に聞く時の鐘、今はと決心の臍固まりけん  
 ヲト立上がりしが又懷中に手をさし入れて一息案ア、困つたと我知らず歎息の詞唇をもれ  
 て其の儘に身は舊の通り舌打の音續けて聞えぬ、雪はいよ／＼降り積るとも止むべき氣色少し  
 も見えず往來は到底なきことかと落膽の耳に嬉しや足音辱しと返り見れば角燈の光り雪に映  
 じ巡廻の查公怪しげに目をそ／＼いで行き過ぎられし後に又人音この度こそはと見れば情なし  
 三軒前手前なる家に入りぬ、流石に氣根も盡きはてけん茫然として立つくす折しも最少し參る  
 と御座いませうと話し履して黒き影目に映りぬ、天の興へ人こそ來つれ外づすまじと勇み立て  
 進み寄ればはて何とせん、過たるは及ばざる二人連とは生憎や、車は一人乗りなるを

心苛られのさるゝ物は散會過ぎて來ぬ迎ひの車と數へ入れたし、待たせて置ても宜かりしを供  
 待ちの雜沓遠慮して時間早めに吩咐して返せしもの何としての相違ぞやよもや忘れて來ぬにはあ  
 らじ家にても其通り何時まで迎ひ出さずには置れまじ、例の酒癖何處の店にか酔ひ倒れて寝入  
 りても仕舞しものか夫なればいよ／＼困りしことなり家にても嘸お案じ此家へも亦氣の毒なり  
 何とせんと思ふ程より積る雪いと心細く燭淚ながるゝ表二階に一人取殘されし新田の高、  
 げにも愛世か音曲の師匠の許に然るべき會の催し断りいはれぬ筋ならねどつらき物は義理の柵  
 らみ是非と待たれて此日の午後より、飾ざる錦の裏はと問はれ涙斗ぞ薄化粧に深き苦勞の色  
 を隠して朋輩が無邪氣の物語りを笑うて聞く胸ぐるしき思ひに瘦し手首に取りすがりてお浦山  
 しや高さまのお手の細さよお酢めし上りしか御傳授聞きたしと眞面目に問ふ人可笑しくはな  
 くて其心相羨ましく成りぬ其の人々歸り果てより一時間待つには長き時間ながら車の音門に  
 も聞えず捨置かれなば未だしもなれどお茶參らせよお菓子あがれ夜はまだ夫ほど深くもなしお  
 迎ひも今參らんがゆるりなされと懸應さるゝ程猶更氣の毒さ堪へ難くなりて何時まで待ちても  
 果て見えませぬば憚りながら車一ツ願ひたしと婢女に周旋のほど頼み入れば夫はなんの造作も  
 なきことなれど遂ひ行き違ひにお迎ひの參るまじとも申されず今少しお待たされてはと遊々に



いふは車もどめに行くがづらさになるべし、夫も道理雪の夜道をしてとは言ひかね、心ならぬ  
 又暫時二度目に入れし茶の香り薄らぐ頃になりても音もなければ今は来ぬものか来るものか  
 當てにもならず當てにして何時といふ際限もなし行き違ひになるとも夫はよし兎に角車願ひだ  
 しと押かへして頼み入るゝに師匠實にも氣の毒がりて然れば止め申すまじとて申すも歸りな  
 さるゝに夜が更けてはよろしからず車大急ぎに申して来よと主の命令には詮方なくてや恨めし  
 げながら了承りて階段あわたくしく馳せ下りしが水口を出る大黒傘の上に雪つもるといふ間も  
 なき斗速かに立歸りて出入の車宿名残なく出拂ひて挽子一人も居りませぬば氣の毒さまな  
 がらと女房が口上其まゝの返り事に然らば何にとせんとてもの事にお泊りなさらば宜けれど  
 宅にお染じはあるまじきにお宅のお染じさへなくば明早朝の御館となされよなど心切に止め  
 らるれど然らぬならず、雪こそふれ夜はまだ夫ほどにも御座りませぬばと歸り支度と一のへる  
 に夫ならば誰ぞ供にお連なされ歩行御迷惑ながら此邊には車馬渡六つかしからむ大通り近  
 までは御難澁なるべし家内にてすら火桶少しも放されぬに夜氣に當つては風めすな失禮も何  
 なしこゝより直にお頭巾召せ誰れぞ肩掛お着せ申せと總掛りに支度手傳はれて憚りさまとい  
 ひも取へず更けぬ内にお急ぎなされ生中お止り申すずば是れ程に積るまいものゝ氣の毒のこと

いたしたりも説は執れと送り出す門口犬の子の聲恐ろしけれど送りの女中が骨たぐまじきに心  
 強くて軒下傳ひ三町斗り御覽なされませぬの提灯は急度車今少しの御辛棒と引く手も引かるゝ  
 手も氷りつく様なり嬉しやと近付いて見ればさても破れ車モシと聲はかけしが後退さりする送  
 りの女中ソツと高の袖引きて最少し参りませう除きまといへばと跡は小聲なり折しも降し  
 きる雪にお高洋傘を傾ぶけて見返へるともなく見返る途端目に映るは何物遠頭蓋襦の青年車  
 夫なりお高夜風の身にしみてかふるゝと震へて立止まりつゝ、此雪にては先へ行きても有るか  
 無きか知れませぬば何にてもよし此の車も頼みなされてよと俄に足元重げになりぬ、此様な  
 車にお乗しなるとかアノ此様な車にと二度三度も高軽く點頭て詞なし我れも雪中の随行難義  
 の折とて求むるまゝに命令くる件の車さりとては不似合なり錦の上着につくれの袴つぎ合した  
 様など心をかしく挽出すを見送つて御機嫌よう車夫さん好くも氣をつけ申して。

第八回

馳せ出す車一散、さりながら降り積る雪車輪にねばりてか車上の動揺する割に合せて道のはか  
 は行かず萬世橋に来し頃には鐵道馬車の喇叭の聲はやく絶て京屋が時計の十時を報ずる響き空



に高し、萬世橋へ参りましたが宅は何方と梶を控へて佇立む車夫、車上の人は壁ひく、鍋町までと只一言、車夫は聞きも敢へず力を籠めて今一勢と挽き出しぬ、露々として降り置々として積る雪夜の景に替りは無けれど大通りは流石に人足絶えず雪に照り合ふ瓦斯燈の光り亮々として、肌をさす寒氣の堪へがたければにや車上の人は肩掛深く引わけて人目に見ゆるは頭巾の色と肩掛の派手模様のみ、車は如法の破れ車なり母衣は雪を凌ぐに足らねば、洋傘に辛く前面を掩ひて行くこと幾町、鍋町は裏の方で御座いますかと見返ればイヤ鍋町ではなし本銀町なりといふ、然らばと斗り馳せ出す又一町、曲りませうかと問へば、直線にと答へて此處にも車を止めんとはせず日本橋まで行きたしといふに何かは知らねと詞の通り、河岸に付きて曲りてくれよ、とは何方右か左か、左へいや右の方へと又一ト横町、ち氣の毒なれど此處を曲れて一直線に行て欲しと小路に入りぬ、何のことも此道は突當り、外に曲らん道も見えねば、モツ宅はこの邊でと覺束なげに問はんとする時、何とせん道を間違へたり引返してと又跡戻り、大路に出れば小路に入らせ小路を縫ひては大路に出で走幾走、轉幾轉、蹴たつる雪に轍のあと長く引きて廻ぐり出づれば又以前の道なり、薄暗き町の片角に車夫は茫然と車をひかへて、仰の通りに参りましたら又以前の道に出ましたが高一やと間違ひでは御座いますまいか此角を曲

ると先程の糸屋の前直線に行けば大通りへ出て仕舞ひますたしか裏通りと仰で御座いましたか町名は何と申しますか夫次第大底は分りませうと問ひ掛けたり、車上の人は言葉少く女に兎に角曲つて見て下され、たしか此道と思ふやうなりとて梶棒を向きかへさせぬ、御覽なされまし矢張りこゝは舊の道これで宜しう御座いますかと不審しみて問ふ車夫の言葉にはんにこれは違ひたり最う一ツ跡の横町が夫なりしかも知れずと曖昧の答へ方、さればというて挽き返す一ト横町こゝにもあらず今少し先へといふ提燈の火幾度ひ揺り消して商家に火を借りしも二度三度車夫又道に委しからずやあらん未だ此職に馴れざるにや有らん同じ道行返りて困も果てもしたらん強くいひても辭しませず示すが儘の道を取りぬ、夜は漸々に深くならんとす人影ちらちらと稀になるを雪は此時一段と勢をまして降りに降り隠れぬ物は鍋焼温餅の細く哀れなる聲戸を下ろす商家の荒らく高き音、さては按摩の笛犬の聲小路一ツ隔て、遠く聞ゆるが猶更に淋し、さては怪しや車上の人萬世橋にもあらず鍋町にもあらず本銀町も過ぎたり日本橋にも止まらず大路小路幾筋幾通りとも何方に行かんとするにか洋行して歸朝の後に妻を忘るゝ人ありとか聞しがこれは又いかにか歸るべき家を忘れたるか歳もまだ若かるを笑止といは、笑止思へば扱も不審しきとなり、今度は京橋へといそがせぬ、裏道傳ひ二町三町町名は何と知れぬと



少し引き入りし二階立てに掛行燈の光り融々として主はありやなしや入口に並らべし下駄二三  
 足料理番が欠伸催はすべき見世がりの割烹店あり、車上の人は目早く見とめて、チ、此所な  
 り此家へ一寸と俄の指圖に一發いさましく引入れる車門口に下ろす梶棒と共にホットト息  
 内には女共が口々に入らつしやいまし。

第九回

勢ひよく引入れしが客を下ろして扱おもへば取かし、肥臆に殘る店がまへ今の我が身には往  
 昔ながら世の人は未だ昨日といふ去年一昨年、同商中の組合會議或は何某の懇親會に登りなれ  
 し階段なり、夫ど知れば俄かに肩すぼめられて見る人なけれど、遠しく片蔭のある薄暗がり  
 車も我も寄せて休息つ、靜かに願見れば是れも笹原はしる類ひ、誰が目に見えて知るものぞ松  
 澤の若大將と稱揚られて席を上座に設けられし身が我れすら、みすぼらしき此形姿よしや面  
 に見えが有ればとも他人の空似、夫もあるならひなり増してや替りも替りたる雪と墨ちろかな  
 こと雲と泥ほど懸隔のあびたらしさ如何に有爲轉變の世とはいへ是れほどの相違誰れが何とし  
 て氣のつくべき心の鬼に見知り越しの人目厭はしく態と横町に道を選けて見られじとする氣お

づかひも他人は何の感じもなく摺れ違つて見合はす眼の電光、ハツと思ふは我れ手り、態どつ  
 くるか賊と見忘れてか知らず顔に過ぎ行かれて、撫で下ろす胸にむらむらと感じるはさても人  
 情こそ薄きものなれ紙といはれ吉野紙見をすいた様な世の中なり、知り顔して欲しきにも有ら  
 ず詞かけられては身の置場も無けれど夫にも何か色のあるもの、物いはれ振切らん袖がまへ  
 嘲ける様な尻目遣ひ口惜しと見るも心の僻みか召使ひの者出入のもの指折れば少なからぬ人  
 ながら誰れ一人として我れ相談の相手にと名告いづるものもなし、富貴には寄る親類顔代先  
 きの誰れ様何の縁故ありとかなしとか猫の子の貰ひ主までが實家あしらひの似非追従、つち  
 で掃く庭石の周旋を手はじめに引き入れる工夫算段はじいて見ねば知れぬもの、割りにも合は  
 ぬ品いくら冠ぶせて上種は自己が内懐中ぬくくせし絹布ぞろひは誰れ故に着し物とも思は  
 ず此庇護に建ちましたと空拜みせし新築の二階作り其の詞は三年先の安房鳥か、今の零落を高  
 見に見下して全肺意久地が無さずと云ひしとか酷と思ふは心からなり他人が聞けば適當の  
 評といはれやせん別家も同じく新田にまで計らるゝ程の油断のありしは家の運の傾く時かさる  
 にても憎くきは新田の娘なり、うつくしき顔に似合ぬは心小學校通ひに紫帛紗對にせし頃年  
 上の生徒に喧嘩まけて無念の拳を我れ握る時同じやうに涙を目に持ちて、口惜し氣に相手を睨



みしことも有しが夫は無心の昔しなり我れ生來の弱質とて假初の風邪にも十日廿日新田の訪問  
 怠たれば彼方にも亦一人の病人心配に食事も進まず稽古ごとに行きもせぬとか、お前さまも一  
 人のお煩ひはち兩人のお腦みと婢女共に笑はれて嬉しと聞しが今更にも一は故意に言はせしか  
 知れた物ならず此頃見しは錦野の玄關先うつくしく粧うた身に比べて見て我れより詞は掛けら  
 れねど無言に行過るとは不埒ならずや身こそ零落たれ許嫁の縁きれしならず誠と其心なら美く  
 しく立派に切れてやりたし切れるといへば貧乏世帯のカンテラの油、今宵點燈す程有りしか如  
 何に、さらでも御不自由のお兩親が燈火なくば無お困り早く歸りて様子知りたきもの、今の客  
 人の氣の長さ未だ車代くれんどもせず何時まで待たする心にやさりとて正可に催促もされまじ  
 何とした物ぞとさし覗く奥の方廊下を歩む足音にも面て赫と熱くなりて我知らず又蔭に入る  
 思へば待たるゝ様な待たれぬ様な萬一車代を渡す人知りし顔の女中ならば何にとせん詞かけら  
 れなば何といはん恥の上塗りは要なきことなり車代といふも知れたもの受けず共よし此まゝに  
 歸らんか否な是れ欲しければこそ雪の夜を二時三時恥も外聞も親には換へられた物ならず、は  
 て離れでも出て来よ此姿に何として見覺えが有る物かと自問自答折しも樓婢のかなきり聲に、  
 池の端から来た車夫さんはお前さんですか。

第十回

夫は何ぞのお間違ひなるべし私しお客様に近付はなし池之端よりお供せしに相違は無けれど  
 車代賜はるより外に御用ありとは覺えず其際仰せられて車代の頂戴願ひ下されたしと一歩も  
 動かんとせぬ芳之助を誘ふ樓婢は笑みを含み、お間違ひやら何やら私し等の知る事ならねど只  
 お客さまの仰せには今の車夫に用事がある足を洗らはせて此室へ呼びたしと仰せられたに相違  
 はなし兎に角お上りなされよと洗足の湯まで汲んでくるはよも申談にはあらざるべし偽りな  
 らずとせば眞以て奇怪、何人が何用ありて逢ひたしといふにや親戚朋友の間柄にてさへ面て背  
 ひくる我に對して一面の謙なく一語の交りなき若かも婦人が所用とは何事逢たしとは何故人違  
 ひと思へば釋もなければ彼方といひ此方といひ乗り廻りし方角の不審しさ夫すら事の不思議な  
 るに頼みたきことあり足を洗ひて上りくれよとは扱も意外わからぬといへば是れ程わからぬ話  
 しはなし何とせば宜からんかと佇立たるまゝ隣らへば樓婢はもどかしげに急がしたて、お客  
 さまも無お待ちかねお逢にならば、譯はどの道知れる筈なり先づお出なさいよと手をとらへて  
 引立るに然らば參るべしと手お放しなされ大方は人違ひと思へどお目にかゝりし上ならではお



疑ひ晴れ難からん御案内願ひ申すと明亮に答へながら心の内は依然として朦々朦々、静かに足を清め終りていざと斗りに誘はれぬ、流石なり商賣がら燦として家内を照らす電燈の光りに襦袢の針の目いちじるく見えて時は今極寒の夜ともいはず背に汗の流るぞ苦るしき、お客さまは二階なりといふ伴なはるゝ階段の一段又一段憂き世の憂きといふ事知らず登り降りせしことも有し其時の酌取り女我が前放れず喋々しく響應したるが彼の女もし居らば彌々面目なき限りなり其頃の朋友今も遊びに来んは定の物何ぞのはしに我がこと引き出して如斯く如此くとも物語りなば何處まで知るゝ恥ならん思へば何故に登樓たるか今更に詮なき事してけりと思ふほど胸さわがれて足ふるひぬ、案内はかねて知る階段を登り果てゝ右手の小室、お客さまは此處にと示したるまゝ、櫻婢は急ぎ下り行きたり障子の外に暫時たゆたひしが果つべきとならずと決定なせば身を低くして静かに明くる座敷の内これは如何に頭巾に見えざりし面肩掛につみし身今ぞ明らかに頭はれぬ、寢寐にも離れず起居にも忘れぬ我が後來の半身二世の妻新田が娘のお高なり、芳之助は夫と見るより何思ひけん前後無差別、踵を返してツト馳せ出ればお高走り寄つて無言に引止むる帯の端振拂へば取すがり突き放せば纏ひつき芳さまも腹だちは御尤もなれども暫時、お高がうとは申しませぬ申しあげたきこと一ト通りと詞きれくゝに涕張る

りて引止むる腕はそけれど懸命の心は蜘蛛の圓の千筋百筋力なき力拂ひかねて五尺の身なよよととなれど態と荒々しく突き退けてお人違ひならん其の様な仰せ承まはる私しにはあらず池の端よりお供せし車夫の耳には何のこともやら理由すこしも分りませぬ車代賜はる外御用はなき筈御申談はお措き下されと言ひ拂つて直然と立てば、餘りなり芳さま其お心なら夫でよし私しにも覺悟ありと涕を拂つてきつとなるお高、チ、おもしろし覺悟とは何の覺悟許嫁の約束解いて欲しゝとのお望みか夫は此方よりも願ふ事なり何の廻りくとい申上ることの候の一ト通りも二々通りも入ることならず後とはいはず目の前にて切れて遣るべし切れて遣らん他人になるは造作もなしと嘲笑ふ胸の内に沸くは何物、お高涕の顔恨めしげに、お情なしまだ其様なこと自由にならば此胸の中断ちわつて御覽に入れたし。

第十一回

又逢ふ場所某の辻某の所に待給へ必らずよと契りて別れし其夜のこと誰れ知るべきならねば心安ければ心安からぬは松澤が今の境界あらまはしは察しても居たものゝ夫程までとは思ひも寄らざりしが其御難儀も誰れがせし業ならず勿跡なけれど我が親うらみなり聞かれぬまでも諒め



て見んか否な父はともあれ勘蔵といふものある以上生中のこと言ひ出して疑ひの種になるまじとも云ひ難しむ爲にならぬ斗かは彼の人との逢瀬のはしあやなく絶もせば何んかせん然べき方法のなからずやと惑ふは心づゝむ色目に何ごとも願はれぬと出嫌ひと聞えしお高昨日は池之端の師匠のもとへ今日は駿河臺の錦野へと駒下駄直さする日の多かるを不審といはい不審もたつべきながら子故にくらきは親の眼鏡運平が邪智ふかき心にも娘は何時無邪氣の子供延しは脊丈斗りと思ふが若しやの掛念少しもなくハテ中の好かりしは昔しのことなり今の芳之助に何として愛想の盡ぬものが有らうか娘はまして孝心ふかし親の命令ること背く筈なし心配無用と勘蔵が注意をさへ取りあげもせず錦野が懇望恰もよし彼れは有徳の醫師なりといふ故郷何某の地には少なからぬ地所をさへ持てりと聞くに娘の爲にも我が爲にも行末わろき縁組ならずとよりの相談を洩れきく身の腹だゝしと假令身分は昔しの通りならずとも現在ゆるせし良人ある身に思はしき嫁入沙汰きくも嫌なり表にかざる仁者顔は必竟何事かの手段かも知れたことならず優しげな妹御も當てにならぬよし折々見たこともあり毒蛇の様な人々信用なさるふ心には何ごも申すとも甲斐はあるまじさりとて此儘に日を送らば悲しきことの來むは目の前なり聞かせて心配するも憂けれと願むは彼の人の力のみ男の智慧には好き考へも無からずやと思ひた

ては心は矢竹、はやるほど猶落付てお友達の誰さま御病氣とまき格別に中の好き人ではあり是非も見舞申したく存じますと許容を請へば平常の氣だてに有るべき願ひとて疑ひもなく運平點頭きて然らば疾く行てとくかへれ病人の所に長居はせぬもの供には鍋なりと伴れて行きなされと氣をつくれはニイ夫には及びませぬ裏通りを行けばつい开所なり鍋も家のことが忙がしう御座いますツイ行てツイ歸るに供などは大層すぎます支度も何も入りませぬば此儘すくにとそこへ身仕紐して庭口出んとする途端嫌さき今日も出かけか何方へぞと勘蔵がさろく目恐ろしけれと憶してなるまじと態どつくる笑顔愛らしく今日もとは勘蔵酷いぞや今日はいはねばてにをは違ふ所ぞとほく笑みて何氣もなしに家を出ぬ約束の辻行つ返りつ待てどもまてども今日はいかにしけん影も見えず離れに聞かんもうしろめたし何とせん必らず訪給ふな我家知られんは恥かしとて町所つげ給はねと往日錦野にて夫となく聞しはうる覺えながら覺えありよしと怒りにふれれば夫まで、空しく物をもふよりは寧ろ目にかゝりしうへにて兎も角もせんと心に答へて妻戀下と斗り當所なしにこの裏屋かしの裏屋さりとては雲握むやうな尋ねものも思ふ心がしるべにや松澤といふか何か知らぬと老人の病人二人ありて年若き車夫の家ならば此裏の突當りから三軒目溝板の外れし所が夫なりとまで教へられぬ時は夕暮の薄くら



第十一回

きに迷ふ心もかき暮されて何といひ入れん戸のすき間よりさし覗く家内のいたまじさよ頭巾肩掛に身はつゝめと目をもる物は紅の涙。

さらでも老ては僻むものどか况や貧にやつれ苦にやつれ人恨らめしく世の中つらく明ては歎き暮ては怒り心晴間なければ左までには無き病氣ながら何時全快るべき景色もなく哀れ枯木に似たる備右衛門夫婦待ちわびしきは春ならで芳之助の歸宅の遅さよ好き客ありて遠くまで行きたるにや夫にしても最う歸宅さうなもので日没まへに一度づゝ様子見よ戻るが常なるを何として今日ほど頭を延ばす心は同じ外面のさ高も露路口顧みつ家内を覗きつ芳さまはどうでも留守らしく御相談すること山ほどあるをま目に懸らでは戻らるゝ事かはさるにても此病人のうへに此お生計右も左も身一ツに降りかゝる芳さまが御心配は無なるべし尋常ならばお兩親の見取り看護もすべき身が餘所に見聞く苦るしよと沸き返る涕胸に吞みて羞のぞかんとする二枚戸を内より明けて面てを出すは見違へねども昔しは残らぬ芳之助の母が姿なり待つ人ならで待たぬ人の思ひも寄らず佇立むかけに驚かされて物をいはず見つむる目元も疎くなりてや不審げに睡

君さまで問はるゝもつらし高頭巾を手ばやく取りてお忘れ遊ばしたかと取すがりて鳴く音に知るゝ焼野の雉子我が子ならぬと驚がる縁とて母は女の心も弱くすゝも高か否や高どのか何として此様な所へ如何尋ねて知れましたとあろゝ涙の聲きく付けてや膝行出る備右衛門はくぼみし眼にキツと白眼みてコン何を云て居るぞ夕方は別して風が寒し其うへに風でも引かば芳之助に對しても濟むまいぞやといふ詞の尾に付ても高おとるゝ顔をあげ御病氣といふことを人傳てに聞きましたお怒りにふれるとはしるも御様子は何ひたさに出にくい所を繕つて漸々の思ひで参りましたお父様にもお取なしをとまほゝとして言ひ出るを取次ぐ母が詞も待たず備右衛門冷笑つて聞かんとせざるは口賢しこくさまゝの事がいへたものかな父親に發育れては其はづの事ながら最う其手に乗りはせぬぞよ餘計な口に風引かさんより早く歸宅さるるが好さゝうなもの賊と思ひて聞くものは此家の内に一人もなし老婆さまも眉毛よまれるなど悪々しく言ひ放つて見返りもせず夫は御尤の御立腹ながら是れまでのこと露手も私し知りてのことばなしお憎しみはさることなれど申譯の一ト通りお聞あそばして昔しの通りに覺しめしてよと跪入る詞聞きも敢へず何といふぞ父親の罪は我れは知らぬ今まで通り嫁身になりたしとか聞て憫れるなり考へても見よ人非人の運平の娘を妻に持つ芳之助と思ふかよしや芳之助が持つ



といふとも我れある以上は嫁にすること毛頭ならぬ汚らはしし運平の名思ひ出して胸が沸く  
なり況してや夫れが娘を嫁になんと思ひも寄らぬことなり詞かはすも思はしきに疾く歸ら  
ずやも歸りなされニ、何をうぢく老婆さま开所を閉めなさいと詞づかひもあらくしく怒り  
の面色すさまじきを母は見かねて夫はあまりに短氣なり彼の子の詞も一ト通りは開ても遣りな  
されませぬかと取なすをハッとお眼んで汝までが同じ様になんの臆言もはや何事聞く耳もなし  
汝が追ひ出さずば我れ自身にと止むる妻を突のけつ病みつかれても老の一徹上りがまちに泣  
きくづはれし高が細腕むづと取りつ力を極めて押出す門口も慈悲に一ト言も聞き入れを罷  
るも泣も何んの用捨あらくれし詞に怒りを籠めて嫁でなし異でなし阿伽の他人の來る家でなし  
何といふとも最う逢はぬぞ、ハタとたて切る雨戸の闕くちしは溝か立端もなくわつと泣く空に  
闇を纏ひ行く鳥の兩三聲。

第十三回

覺悟の身に今更の涙見苦るしと願はずは詞ばかり我れまづ拂ふ暉の露の消えんとする命か扱  
もはかなし此所松澤新田が先祖累代の墓所盡なほ聞き樹木の茂みを吹拂ふ夜風闇に悲哀の聲を

そへて鳥の叫び一段と物すごし高決心の眼ぞし動がずお心後れかさりとては御未練なり高  
が心は先ほども申す通り定めし覺悟の道は一ツ二人の身の犠牲にしてと前さまのお心伺ふ  
先に生て歸る念はなし父御さまの今日の仰せ人非人の運平が娘を嫁になどと思ひも寄らぬこ  
となり芳之助は兎もあれ我れ許るさずと御立腹の數々夫いさゝかも御無理ならぬと前さまと  
縁きれて此世何の樂しからず怒らき錦野がこともあり所詮は此命一ツと覺悟の道も同じやう  
に行逢つて前さまのお心伺へばその通りとか今更御違背のある筈なし私しは嬉しう存じます  
をと美事に云ひ放つて噛む襦袢の袖、未練などがあることかは我れ男の一疋ながら虚弱の身の  
力及ばず只にもあらで病ひに臥す兩親にさへ孝養、抱持の不十分さ甲斐なき身恨めしくなりて  
捨てしと思ひしは昨日今日ならず我々二人斯くと聞かば流石運平が邪慳の角も折れる心になる  
は定なり我が親とても其の通り一徹の心相和らき寄らば兩家の幸福の上やある我々二人世にあ  
りては如何に千辛万苦するとも運平に後悔の念も出まじく況してや手を下げての詫ごと何とし  
てするべきならずよしや膝を屈げればとて我が親決して聞き入れはなすまじく乞食非人と落魄  
るとも新田如きに此口腐れても助けを求むることはせずと夫平常の詞なるもの盡未來この不和  
の中とける筈なし數代續きし兩家のよしみ一朝にして絶やさんことを先祖の遺旨にも違ふことな



り世の人は愚ども笑はん痴ども見んさりながら先祖に對し家に對す孝は二人が命なり捨て、榮えある身ぞと思へば何方に残る未練もなしと身支度をと最期の用意あはれ短かき契りなるかな井筒にかけし丈くらへ振わけ髪のかみならねば期くとも如何しら紙にあね様作へて遊びしころ是は君さま是は我今日は芝居へ行くのなり否や花見の方が我れは好しと戯れ交はせし夫一ツも願ひの叶ひしことはなくて待にまちし長日月の廻り來て見れば果敢なしや世は桑田の海ともならねど變るは現在親の心、ましてや他人に底ふかき計畧の淵知るべきならねば陥いれられて後の一悔恨空しく香む涕の晴れ間は無くて降りかゝる憂苦と繋がる、情緒に思慮分別も鳥羽玉の闇くらき中にも星明りに目と目見合せて莞爾と計り名残の笑顔うら淋しくいと促がせばいと答へて流石にたゆたはる、幾分時思ひ定めてツト立よりつ用意の短刀とり直せば後ろの敷に何やら物と人も來つると耳を澄せば吹き渡る風定かに聞えぬ扱は追手にもあらざりけりも高支度は關ひしか取亂さんは亡き後までの恥なるべし心静かに心静かど賊める身も詞ふるひぬ慘まし、可惜青年の身花といはば苦みの枝に今や吹き起らん夜半の狂風、も高が胸先くつろげんとする此時はやし間一髪、まち給へと計り後ろの敷垣まろび出て利腕走つかと取る男力離れぞ放して死なしてと脆弱き身にも一心に振切らんとするをいつか放さず、否や放しませぬ放されませぬ前さま殺しては旦那さまへ濟ませぬといふは正しく勘藏か、とも高の詞の終らぬ内聞にきらめく白刃の電光アツと一ト聲一刹那はかなく枯れぬ連理の片枝は。

第十四回

せぬ放されませぬ前さま殺しては旦那さまへ濟ませぬといふは正しく勘藏か、とも高の詞の終らぬ内聞にきらめく白刃の電光アツと一ト聲一刹那はかなく枯れぬ連理の片枝は。

こぼれ松葉の土になるまで二人ともにと契りし物を我ばかり何として後るべきと足ずりして敷きしが命果敢なく止められて再び見んとも思はざりし六疊敷の我が部屋をその儘の座敷半縁の障子の開閉にも乳母が見張りの目は離れず況してや勘藏が注意周到つばさあらば知らぬこと飛鳥ならぬ身に何方ぬけ出ん隙もなし哀れ又一ツ手に入れたや所は替れど同じ道に後れはせむの娘の色目見てとる運平が氣遣はしと錦野との縁談も今が今と運びし中に此こと知られれば皆書餅なるべし包まる、だけはと秘しかくして宥めてみつすかしてみつ異見に手をかへ品をかゆれど袖の涕はれんともせず兎もすれば我も共にと決死の素振に油断ならず何はしかれ命ありての物だねなり娘の心落付かすに若くはなしと強しては婚儀をすゝめもなさず去るものは日々に疎しの骸骨もあり日をだに経れば芳之助を追慕の念も薄らぐは必定なるべし心ながく時を待つて春の氷に朝日かけちのづから解けわたる折ならでは何ごとの甲斐ありとも覺えず誰れもく



異見は云ふな心の浮く話しに氣をなぐさめて面白き世をもしろしと思はすのが肝要ぞと我  
 先立ちて機嫌を取りつ慰めつ片方は心を浮かせんと勉め片方は見張りを嚴にして細いも一筋小  
 刀一ツ挺お高が眼に觸れさせるな夜は別して氣をつけよと氣配り眼配り大方ならねば召使ひの  
 者も心を得て風の音をも只には聞かず鼠の荒れにも耳そばだてつ疑心は暗鬼を生ずる奥の間に  
 其人現在座すを見ながら娘さまは何方へぞと姿が見えぬ様なりと人騒がせするもあり乳母は夜  
 の目ろくく合さずお高が傍に寝床を並らべて浮世雜談に諷諷の意をこめつ可笑しく面白く  
 物がたりながら沈みがちなる主の心根いぢらしくも氣遣はしく離れぬ守りに是も一ツの關所な  
 り如何にしてか越えらるべき如何にしてか通がるべきも高終日涙に暗し終夜涙の床に明して髪  
 どりあげず化粧もせず粧ひし昔の紅白粉は離れぬ色ならず君におくれて鏡の影に合す面無  
 情なしとて伽羅の油の香りも止めず亂れ次第の花の姿やつれる身を我と頼母しくならば此儘に  
 死にたしと願へど命は心の自由ならず病むともなく煩ふともなくつくづくと詠めてつくづくと  
 泣く涙と空とを意中の友として送らねど迎へねど来るものは月改たまるは歳ちりて返らぬ君を  
 思へは何ぞ櫻の春しり顔に今歳も咲ける面にくさよ又しても聞く堀切りの宮浦だより車をつら  
 ねて見に行しはそもいつの世の夢になりて精靈棚の眞ももの上にも表だちては祭られずさり

とては世の中うらめし照る月の秋の夜草葉に踏き白玉の露と答へて消えかぬる身を何とぞ覽  
 じて何とぞ恨みなさるべきにや過ぎし雪の夜の邂逅の折ニツなき真心嬉しきぞとてホロリとし  
 給ひし涕の顔いまも眼の先に残るやうなりながら思ふ心は幽冥の境にまでは通ずまじきに  
 や無情なく悲しく引止められし命を未練にをしてみても思し召さん苦るしさよと思ひやりては  
 伏し沈み思ひ出してはむせ返り笑みとは何ぞ夢にも忘れて知るものは人世の憂といふ憂きの數  
 々來るものは無意無心の春夏秋冬落花流水ちりて流れて寄せ返る波の年又一年今日は心のど  
 けやする明日は思ひの離るべきやは榮花の身にまたし娘にも綺麗かざらせて我れも安心の樂隠  
 居願はくは家運長久なれ子孫繁昌なれ兎角は身の上に凶事あらせじとの親心に引かへし願ひも  
 さか様ながら今日身をすてんか明日こそはと親ふ心に怠りなければ人目の關守何として隙ある  
 べき此所に七年身はまだ籠中の鳥。

第十五回

お父様にも勘藏にも乳母には別してのこといろくど苦勞をかけまして今更おもへば恥かしい  
 やらお氣の毒やら幼な心のおと先見ずに程のない無分別さりながら盡ぬ命かやことも無く助か



りしを嬉しいとは思ひもせよしなき義理だてに心ぐるしく芳さまのおもと追うても思ひしは  
幾たびかさりとては命二ツあるかのやうに軽々しい思案なりしと後悔して見れば今までのこと  
口惜しく是からの身が大切にになりました阿房らしい死んだ人への操だて何に成ることもなき  
を何時まで獨身で居る心か敷へる歳の心細さは是れほどならばなせ昔しと詞をむいて厭ひしか我  
れと我が身知れませぬ母さまなしのお手一ツに御苦勞澤山かけまして上の上にも又幾年も心休  
めぬ不了簡不孝のお詫は向後さつぱり芳さまのこと思ひ切つて何方への縁組なれ仰せに違背は  
いたしませぬ樹蔭も乳母も長の間心づかひ無かしと氣の毒な私しの心は今もいふ通り晴てみ  
れば迷ひは雲霧これまでの氣は少しもなし必らず必らず心配して下さるなよと流石に心の弱  
ればにや後悔の涙を目にたへて高かくとは云ひ出しぬ歲月心を配りし甲斐に漸くの此詞  
まづ安心とは思ふものゝ運平なほば油断をなさず起居につけて目をそ〜ぐに高は詞に違ひも  
なく愁ひの眉いつしかとけて昨日にかはる眞實〜し父のもの我がもの云へば更に手代小僧  
の衣類の世話縫ひほどきにまで氣を用ひて浮々とし様子にぞ扱は誠に悔悟して其心にもなり  
ぬるかど落付くは運平のみならず内外のものも同じこと少し枕を安んじけりさるにても不審は  
松澤夫婦がうへにこそ芳之助在世の時だに引窓の烟たそ〜なりしを今はたいかに其日を送る

や惜可若木の花におくれて死ぬべき病ひは癒たるものゝ僅か手内職の五錢六錢露命をつなぐ術  
はあらじを怪しのことよと尋ぬるに薄幸の世とは聞くものゝ猶陰徳者なきならで此薄命を憐み  
てや恵むともなき恵みに浴して薪炭の苦を知らずといふなるそは又何方の誰れなるにや現在庇  
護に寄る夫婦すら其姓氏を知らずといふにそも又誰れの知る由あるべき扱も怪しむべく會とむ  
べき此慈善家の姓氏といはず心情といはず義理の柵みさこそ知るは一人お高の乳母あるのみ  
忍び〜の買のもの夫からそれと人手を換へて誰れと知らさぬ用心は昔し氣質の一語を立て通  
さする遠慮心痛おいたはしや右に左に御苦勞ばかり代が代ならばお嫁さまなり眞御なり御孝行  
に御遠慮は入らぬ筈をど或時泣きしにお高同じく涙になりて私しの心知るものは和女ばかり芳  
さまのことは思ひ切りても御兩親の行末が心配なり明日が日我が身縁に付きなば兎に角自由は  
叶ふまじ其時たのむは和女ぞかし父さまの心よく取りて松澤さまの中昔しの通りにして欲  
し、是れ一ツが頼みぞとて兩手を合せて伏し拜みぬ失せし芳之助を憐まぬならぬと主の身の  
上猶さらに氣づかはしく蔭になり日向になり意見の數々貫きてや今日此頃の袖のけしき涙も心  
も晴ゆきてや縁にもつくべし嫁にも行かんといひ出し詞に心うれしく七年越しの苦も消えて夢  
安らかに寝る夜幾夜ある明方の風あらく枕ひいやりとして眼覺れば縁側の雨戸一枚はづれて並



べし床はぬけの売なりアナヤと計り蹴かへして起つ枕元の行燈有明のかけふつと消えて乳母  
が涕の聲おわたしく嬢さまが嬢さまが。  
替らぬ契りの誰れなれや千年の松風颯々として血汐は残らぬ草葉の緑と枯れわたる霜の色か  
なく照らし出だす月一片何の恨みや吊らふらん此處鶯燕の塚の上だ。

花ごもり

其一

本郷の何處とやら、丸山か片町か、柳さくら榎根ついきの物まづかなる處に廣からねども清け  
に住なしたる宿あり、當主は瀬川與之助とて、こそ秋山の手の去る法學校を卒業して、今は  
其處の出版部とやら編輯局とやらに、月給なほど成るらん、静かに青雲の曉をまつらしき身  
の上、五十を過ぎし母のお近と、お新と呼ぶ従妹の與之助には六歳おとりにて十八ばかりにや  
をさなきに二々親なくなりて哀れの身一つを此處にやしなはるゝ、此三人ぐらし成けり、筒井  
づいの昔しもふるけれど、振わけ髪のをさなだちより馴れて、共に同胞なき身の睦まじさ一ト  
しほなるに、お新はまして女子の身の浮世に交はる友も少なければ、與之助を兄の様に思ひて、  
心やすく嬉しき後ろだてと頼み、よし風ふかば吹け波たゞはたて與之助を兄の様に思ひて、  
りかゝれる心の憐れに可愛く、此罪なく美つくしき人をあきて、いさゝかも他處に移る心のあ  
らんば我れながら宜からぬ業と、與之助が胸に思ふことあり、八歳の年より手鹽にかけたれば、



我が親族にはあらねども近とても憎くはあらで、同じくは願ひのまゝに取むすびて、二人が嬉しき笑顔を見、二人が嬉しき素振を眺め、我れも嬉しき一人に成りて、すべての願ひ、望み、年來むねに描きし影を夢なりけりと断念、幾ほどもなき老らくの末を、斯て此まゝやさしき婆々様に成りて送らばや、さらばお新が喜びは如何ばかりぞ、與之助とても我れをつらしと思ふまじけれど、あはれ今一方の人の涙の床に起臥して、悲しき闇にさまよふべきを思へば、いづれ恨みの懸かるべきは我れなり、天より降り來たりし如き幸福の眼のまへに湧き出でたるを取らで、はかなき一筋の情に引かるれば、恨みは我れに残りて、得がたき幸福は天の何處にか行きさるべし、與之助の女々しく未練なるは弱年のならひ、見る目の花に迷ひて行末の慮なければなるを、これと同心に成りて我れさへに心よわくば、辛き浮世に在りのぼる瀬なくして、をかしからぬ一生を塵の中にくぐりかんのみ、親子夫婦むつまじきを人間上乘の樂しみと言ふは、外に求むることなく我れに足りたる人の言の葉ぞかし、心は彼の岸を願ひて中流に棹さす舟の、寄る邊なくして彼にたゞよふ苦るしさは如何ばかりぞ、我れかして定めて人を願まぬ心だかさは、ふと聞きたるにこそ尊くもわれ、遂に何ごとを爲すべき堪處も無くして、玉か瓦か人見わけねば、うちみを骨に残して其の下に泣きたぐひもあり、今の心はいさゝか屑

ぎよからずとも、小を捨て、大につくは恥とすべきにも非ず、此ごろ名高き誰れ彼れの與方の縁にすがりて、今の位置をば得たりと聞ゆるも多きに、これを卑劣しきことと誹るは誹るもの心淺きにて、男一疋なほどの疵かはつかん、草がくれ拳をにぎる意氣地なまよりも、ふむべき爲のかけはしに便りて、をしく、たけく、榮えある勳を浮世の舞臺にあらはすこそ面白けれ、お新がことは瑣細なり、與之助が立身の機は一ト度うしなひて又の日の量り難きに、我れはいさゝかも優しく脆ろく通常一とほりの婦女氣を出だすべからず、年來馴れたる中のたがひに思ふ事も同じく、瑕なき玉のいづれ不足もなき二人を、鬼ども成りて引分る心は、何ぞして嬉しがるべきぞ、我れに在しても思ひしる、お新が乙女心に何ごとの思ひもなくて、はるか嬉しき夢を見つゝ、與之助をば更らなり、我が内心に何者の住めりとも知らず、母が懐中に乳房をさぐるが如き風情の、たちまちにして驚き覺めたらん時は、恨みに詞の極まりて、泣くに涙も出でざるべし、さても浮世は罪の世の中よな、汲むにあまれる哀れの我が心一つよりこそ、愁ひの眉を笑みにかへて和風こゝに通ふの春色をも見らるべけれど、我が瀬川の家爲に、與之助が將來の爲に、時の運の我が親子を迎ふるを見て、知りつゝ我れは仇になりて、可愛き人々涙の淵に落すぞかし、されどもお新はお新の運ありて、與之助に連れ添ふ一生の嬉しき願



ひはこゝに絶ゆるとも、さるべき縁にまたがひて、さるべき幸福の廻ぐりも来たりぬべきに、  
我れはと新がこゝを思ふべきに非ず、可愛しども、いぢらしども、振かへりて抱きあぐる  
は只暫時の心やりにて、遂ひに右左り分つ袂の宿世なりけるを、我が一日の情は與之助に一日  
の未練をまさせて、今一方の人に物思ひの敷を添へつゝ、其二ノ親が闇に迷へる悲しみを増さ  
するより外に、功は露ほどもあることならねば、よし鬼ともなり蛇ともなり、つれなく憎くき  
伯母になりて、與之助が心の彼方に向ふべき様あつかふは我が役なり、嬉しき迎ひは我が足も  
とまで来りけるものと、と近は瑞雲の我が家の棟に柵引ける如き想像にかられて、八字の髻  
に威嚴そなはる與之助が、黒ぬり馬車に榮華をほこる面かけまで、ありく胸のうちに描か  
れぬ。

其 一

世の人よりは柔らかに穏かすきたる良人を持ちて、萬事にもどかしく齒がゆかりし年月も、流  
石女子の我が一存をふるひ難くて、空しく胸のうちに納めたりし思ひは、中々に消えんとせ  
ず、ともすれば燃え出で、押へ難き炎に身をも焼くめり、と近が願ひは不二の嶺の上もなく立

のぼれるに、身は籠の裡に交れる如く、我れ同列の人々より見れば、やさしく温順に勉強家の  
聞えさへ有る子を持ちたるが上に、姪とはいへどこれも子にひとしきと新が、朝夕をいたはり  
仕へて、行々付樂隠居さまの浦山しき身の上ながら、思ひあがれる心には、此樂しみの如何は  
かり小さく、とるに足らぬ事に覺えて、我が胸より出でたる様にもなく、與之助が世間一ト通  
りの働きをなしつゝ、世に抜けいでたる考へのあらぬさへ恨めしく、望みは高くせよ、願ひは  
大きくせよ、落ちて流れて行水の泡となるとも、天命なれば是非もなし、垣の歌のぶらりと  
して卵の毛の先きの疵もつかで五十年の生涯を送りたりとて、何ごとのをかしさか有るべき。  
一人の知らるべき事は百人に、百人に知らるべき事は萬人の目の前に願はして、不出來も失敗  
も功名も手柄も、對手を多數に取りて晴れの場所にて爲すぞよき、衆人の讀むべき書物をよみ、  
衆人のいふべき事をいひ、衆人の行ひたるあつたを踏んで、糸もて繰らるゝ木偶のやうに、我が  
心といふものなく、意氣地なくつまらなく、過失もなく誹りもなきは男の身として本意にては  
有るまじ、事に臨みては母ありとも思ふべからず、家ありとも思ふべからず、取るべき道の重  
大なるに寄りて進み給へど、これは平常の詞なりけり。  
花にうく露の戀とは何ぞ、をかしやと言ひ消すべきと近が、與之助故に命とこがるゝ人の、哀



れ玉緒のたえだえになど、取次ぎが言葉のかなしげなるを受けて、此頃の明け暮れ思ひを碎くに理由あり、花ちらす吹雪の風は此處に愛からぬと、嬉しき使ひは此戀にのりて來にけり、父は有名の某省次官どの、家は内福の聞え高き、田原何某が愛女と傳へたるにこそ。移りゆく人の心に傲らはぬ花の、今の春べと時しり顔には、笑みそめし垣根の梅のひと枝を折りて、お新はむつまじき手ならひの師のもとへ清書直しを請はんとて、伯母にも與之助にも挨拶とやかに出で行し後、輪にゆく煙草のむすばれたる思ひに近は茶の間の火鉢をはなれて、三疊の小座敷に何の書物なるらん文机の上にくりひろげしまし、梅が香薫る窓の外をながめて讀むとも見えぬ與之助が傍に、灰がちの火のうそ寒き火鉢をかき起しつゝ、自から持ち來し座蒲團に悠然と坐をかまへて、物いひたき景色は、例の夫れなるべしと、聞かぬほどより五月蠅しの素振あらはるれば、與之助、汝はまだ子供のようとし笑ひて身を進ませ、思案はまだまどまらぬかの、言ふは汝が胸一つにして、詞に否と應との二つなるのみなるを、何れにも定めて、母が胸をも安めては呉れぬか、親とても差圖はなすまじき縁のことなれば無理にも、とではなし、否ならば否にて、誰れに遠慮の入るでもなければ、決然というて宜さそうなもの、母は何れに好惡の念もなく、お新は稚きより手元には置きたれど、末の松山何とちかひの有る

でも無ければ、これを取分けて可愛しども非ず、まして田原の娘は逢しこともなく見し覺えも無きに、これに加擔人して是非にも嫁にと願ふ道理はなし、唯可愛く大事に行末までを案じて、明け暮れ胸を痛み思ひになやむは汝が其身一つぞや、父様はやく亡なり給ひしより、知れるが如く親族とても惡真に寄る青蠅の様に、追ふがうるさきほどの人々なれば力になる者どもなく、おはれ思ひは雲井にまで昇れど、甲斐なき女の手に學士の稱號をも取らせかねて、猶すくなからぬ借財さへ身にまつはれる苦しき、かくて汝の行末をおもへば、嬉しき夢は見る夜すくなくして、睡りがたき宵々の老ては殊につらき物ぞよ、されば田原がことの果敢なき筋より出で、煤の女も我が身には嬉しからぬと、運は目に見えぬ處にありて、天の機は我々が心に置り難きに、年來ねがひたる念慮の叶ふべき祥かど、母が拙なき胸に感じたればこそ言ふなれ、無理とは覺すな、もとより汝がためをおもひてなれば嫌といはれ夫れまで、人々の心々一つならぬば、浮かべる雲の危ふきにのぼらんより、八重葎にさし入る月を肘まくらに眺め、我れ一人たのしくは夫れにて事の足りぬべしとならば、母もこれより其心に成りて、高きと願ひし今までを夢とあきらめ、二々間三間の借家を天地と定めて、洗ひすしぎに、襦袢つくり、に、老いの眼かすむ六七十を、孫の守りして暮らさん宜し、いかにや與之助、汝が胸はど靜



かなれども底に物ある母が詞の、ちりく〜と肝にもさはれば、をかしき仰せ、とんと私しには  
吞こめませぬ、ち手一つにて育だちたる厚恩のなみならぬをすれば、及ばぬ心に鞭てもど、  
これは朝夕の願ひ、さりながら、内縁にすがりて舅の袖の下にかくれ、これを立身のかけはし  
になどは懸けても思ひ寄りませぬこと、未熟なれども我がことは我れでなすべく、此綱なけれ  
ば世に立たぬかの様な、心配は御無用に御坐りますと決然こたふれば、母は其顔をじつと眺  
めて、さればよなど歎息の聲をもらしぬ。

其三

それは眞實か、さても若き丁簡よな、さればこそ母が行末を案じて、亡き後までを氣遣ふは夫  
ゆゑ、うき世を机の上の夢に見て、重き物は六寸の筆より外もたず、書物によまれて我が心な  
き人は夫れも道理か、其心にて押ゆかば、事成就の曉は幾つまつきの後なるべき、東照宮様御  
遺訓に重荷を負ひて遠路を行くが如しと有りけれど、恐らくは半道も三分一もえ行かぬほどに  
投げ出して閉口せねば成るまじ、我れは我れによりて事を爲すとは、さても立派の言の葉なが  
ら聞けよ與之助、汝ほどの學識は廣き東京に掃くほどにて、座塚の隅にもころころと有るへし、

いつれも立身出世の望みを持たぬはなく、各自ことは易りて、出世の向きも種々なるべけれど、  
名を揚げ家をおこしてなど、これを離れも基本なり、汝の思ふ如く一筋細に此望みの叶ふも  
のとせば、世はえら者の巢に成りて、闇夜のはち合せ危ふかるべきを、十分が九分は屑にして、  
心寛くも手段の上手なる人が其一分の利は占むるぞかし、小と大との差別を知りたらば、田原  
が望となるを恥とは言ふまじき筈、其袖の下にかくれて、これに操らるると思へば口をしくも  
あれ、我が爲の道具につかひて、これを足代にと爲れば何の恥かしきことか、却りて心をかし  
かるべし、誹はほまれの裏なれば、群雀の囀りかしましとて、垣のよとの諸聲は天まで届か  
ず、雲をけり風にのる大鵬の、嬉しきは此姿ならずや、近うた〜を我か女同志にても見よ、  
彼の田原殿が奥方は京の祇園の舞妓とかや、氏ははるかに劣りし人とか、通常普通の娘にて過  
ぎなば、前垂れ襟の縁をはなれず、井戸端に米やかしくらん、勝手元に菜切庖丁や握るらん、  
さるを卑賤しき營業より昇りて、あの髭どのを少なき手の内に丸め奥方とさへ成り澄ませば、  
そしりは物のかけに隠れて名は公の席にも高く、田原夫人と並らへ書けるが、公侯伯子の離  
夫人にも劣る事か、慈善會、音樂會、名は聞きながら見ることの難き人さへ有るに幹事とかや  
何とかや、それは未だ少し、事ある時はちほけなき御前にも出るとぞ、これを我等が上に比



らぶれば、空に流るゝ銀川と、いつちに埋るゝ溝川との違ひあり、少なき貞婦孝女は遂ひに顯はるゝ事なくして、うき世の卍利は此たぐひの人なるぞや、なき人の上に批點もいかになれど、汝が心根に似たりける父様の、我れが我れがと思しめしは奇麗なりしが、人をも世をも一包する量なければ少なき節につながれて、我れと我が身を愚になしつゝ、夫れはまだしも、先にも我が身が言ふ如く、遇はぬ浮世に何事の望みも捨て、若に雨きくたのしみを、茅が軒ばに味ひたらば、別に長閑けき月日ありて、夫れは又其筋に面白かるべけれど、かなしきは生にその人の事ぞかし、すき間も風霜夜さむけく、薄き衣に妻子の可愛さまみんと身にしみれば、一日半夜やすらげき思ひはなく、身はけがれざる積りにて汚なき人の下に使はれ、僅かの月給に日雇にひとしき働きをして、長からぬ生涯を月もなく花もなく終り給ひしは汝とても知れるが如し、されば汝が心根の清く尊く美しく立派には聞えたれど、仕種は父様の二の舞にて、笑止や少なき結構人にて終りやせん、と言はれ堪へぬ心に腹もたつべし、母は汝が爲をおもへば、怒る、はらたつ、何の憚りはせぬぞや、よしや汝が望みの判事試験に、首尾よく及第して奏任のはしに列らなりたり共、田舎まはりに幾年を渡り、猶その上に種々の規則にまばらるれば、花の都に名を擧げて世間の耳目を集むるほどの事は、保證の印のまかどおして、無しと言

ふとも誤りは有るまじ、一生を斗量にかけ尺度にはかり、これほど限りある圖の中に、身は目に見えぬ細につながれ、人の言葉を守り人の命令に働き、功は後の世に残る事もなく、死しては知己に吊はれ子孫に祭らるゝ夫れ文を差別にして、さのみ犬猫と變りもなく、夢と暮し烟りと消え、夫れにて汝は満足なか、夢ならば彌勒の世までを夢につゝんで、嘘も眞實も偽りも、美しきも醜きも一呑みに呑みつくして、此世の中に高く飛ぶ心は無きか、いかにぞや與之助、返事のなきは不承知か、口をしや我れ思ふ半をも解し得ず、汝はまだいさゝかの情に引かるゝと見えたり、其愚かしき性根とは知らず思ひを碎きしは我があやまりよ、今は何とぞも口入れなすまじければ萬づ汝の勝手たるべし、否、新故のめしならずとは言譯、これに引かるゝ心ならずば、何時か一度は持つべき妻の、口約束ばかり何の大事かは、田原に不足は言ふまじき咎と責められて與之助、我れを白痴にしたりける母が詞と滑稽のむら／＼と加へて、嫌で御座ります、田原もいやも新もいや、諸事萬事氣に入りませぬと、有りし昔の悪あがきた、剛情はりける時の面かけを其まゝ、折角のち近が談義は揉みくちやにしてのけられたり。

其 四



これは瀬川さま、ようこそと玄關に高き婢女が聲を、耳とく聞きて、膝にぬふれる小猫をふるし、よみさしの繪入新聞その茶だんすの上のせて、お珍らしや何風に吹かれ給ひてぞ、谷中の道はお忘れなされしかと存じましたに、と障子の内より美しくしき聲をもらせば、西北か、但し南か、天氣豫報にも見えざりし曇りの何處やらに出来て、瘡癩にもやもやの雲が沸きたれば、お辰様が扇の風にでも拂ひてはしく、お宿もとまで罷り出たる次第と例に似ぬ與之助がをかしき詞に、お辰座をたちて迎へながら、大分御機げんで御座んすの、梅見のお歸途か、橋本あたりのお名残と見えまする、さりとては土産もなしに御不心中やと笑へば、それ處の勢ひかと、與之助も笑ひて、さし出す友仙のふとんの素人めかぬを引寄せ火ばちの向ひ合せに坐をしめれば、ほんにお顔色もよからず、御不快か、但しは例のぬい様が我まゝからの肝癩に、母様したゝか困らせ給ひて、お足の向くまゝ此方角へお越しなされしが、どの道うれしからぬお顔色と、圖ぼしをさゝれて其通りとも言ひかねけり。

むかし覺ゆる姫櫻の色はなけれど蔭ゆかしき美人の末の四十女、切髪姿に被布の好みも何處やら洒落て、眞人なき後の世渡りは昔し覺えの三味も流石とはいかりて、月琴の師と聞くぞをかしき、お辰は長羅宇に一服すひて與之助に手渡ししつ瀬川さま私しの言ふは當りましたる、

よい加減になされませや、さもなくしてさへ母様の御苦勞は山ほどなるに、よい年しての大供様が、髭くひ反らして甘ゆるは可愛けれど、すねるられる、何で御坐ります、お腹が立たば寝かして置きなされと片頬に笑みてたしなめれば、異見は眞平、よう／＼逃げのびて、此處で二の矢は御免禁むりたし、理屈は捨て、陽氣におもしろく、我が平常は知り抜き給ふお辰様が比加減に、嬉しくをかしと思ふ話を聞かせ給へといへば、夫れは造作もなきこと、春さく堤の花よりも美しく、秋てる中洲の月よりも清く歌舞の菩薩が手を盡くす物の音も及ばねば、お前様がお好きの雷や歌や何の何の、見れば嬉しく、聞けば床しく、おれも肝も悉皆をさまりて、思ひ出してさへ魂のふらつく様な事が御座んす、とは又何ぞと問へば、身邊の新聞をつきつけて、夫れ此處に、と指さすは新の字、これは解からぬこと禪僧が問答でもあるまじと笑へば、お辰眞面目に、眞言の秘密で御坐んすぞえ、其字を一目御覽じるよりお胸に現はれる影は可愛らしき島田鬚にじやばらの結び下げ、兄様此字は何と讀みますると御本を前にかしこまりしお姿が見えます等、何と無類にお嬉しかると、言ひ終りておほいと笑へば、馬鹿など一言くるしげに笑ふ。

戯言は戯言、御新様といふ稚な馴染の可愛らしき方があれば他處にお心の散らぬは無理ならぬ



ど、全躰あのお嬢をどうなさる覺しめしぞや、初春の三日の歌がるたに、其うつくしきも顔を  
 見せましたは私しの谷なれど、賊の罪は何處やらのお人と田原がことに話しの移れば、其話を  
 今日ば抜きにして貰ひたし、氣色のすぐれず頭のいたきに、ぶらりと家を出でたれど、さして  
 面白き處もなければ、常に憂きことを知らず顔の、此宿には定めし胸のすぐ様な事もとて來た  
 りける物を、いぢめられては何の甲斐もなしと迷惑がれば、どうでも嬰兒様は猿蟹のはなしで  
 なくばお氣に入るまじ、胸のすぐ様なことも氣の利たもので一ッ口といふ宿がらで無ければ、  
 ね、様相應これで我まんなされませと、甘味にそへてさし出す茶の淨かすはち手のものを知る  
 や知らずや。

其五

我れながら解しがたき心のいづ方に向ひてす、むらん、あとも先にも今日までに逢ひみしは  
 初春の三日、年始まはりの屠蘇の酔ひ、目もとにあらはれて心は夢どころげこみし谷中のやど  
 に、うつくし人の寄り合ひて今宵は歌留多の催し、お迎ひの使ひをもあけたかりしに、ようこ  
 その御入來と喜こばれて、若きものならひ與之助いやならぬ心地のして、逢ひそのまゝにち

中間入りの源平合戦、組わけの三たびが三たび連れになりしはち辰が門下に隨一のお家がら、  
 例の田原どのが愛子にお廣さまとて、父さま似の色は白からぬと、娘さかりは山茶も出ばなの  
 色ふかく、派手すぎの母様が好みとありて、模様も花やきたる薄藤の中振袖、もれてぞには  
 ふ八ッ口の緋ぢりめん、人目をうばふ織ものに、帯は縹珍か夏雄の彫りのばちんの金具は瀧に  
 鯉、はつきりとせし氣象はとりなり活潑とちもしろく、勝ちての喜び、まけての腹たち、我ま  
 まなほど憎くからぬお人なりける、されば與之助とて其おもかげの空にうかべば、母が前に  
 断りたるほど眞實いやといふには有らぬと、男の身として少しうれしからぬ筋もあり、かつは  
 お新がうらみの心にかければ、いづれにせよ胸のうちには断然とせし決定もなく、何が何やら  
 五里の霧中にさまよふやうにて、月も花もはるかの彼方におぼめきながら、ならべ得がたき處  
 に悶はちこりて人しれぬ苦勞この間にあり、されば眞向よりの母が異見に瘡癩の火の手つり  
 て、よしさらば立派に我が戀を通して見すべし、馬鹿なことをと奮ひたしは一時、今朝の勢  
 ひにては谷中に足のむくもあらず、もとより此處は由縁のかげ、むらさきの一もと根ざし  
 はほかならぬに、行かばかならず彼のことを言ひ出すべし、さては五月蠅しとて行かねば夫れ  
 にても事のすむべきを、むしやくしやとせし思ひの晴るゝ處なければ、暫時にても此苦のあす



らるやう、その一條は面倒なれども辰が話しのをかきしは聞きたくなきにもあらで、よし何の話しのでたらば、あたまから亂離骨髄にこなし、言葉のたくみをどれほどに并らぶるも、知らぬ知らぬと亂暴に狼藉にのけたらば、いかなる辰も閉口して二の句は出まじ、と心がまへをせしやらせぬやら、我れもわからぬ了簡にて谷中の扉をたゝきぬ。

行末は八重の汐路に大船うかべて、空や波なる青海原とても、源は山路の苔のつゆ、さてもわけなしのお弱年さまとにらむ目もとに何見えざらん、問はねどえるき與之助が心の宙宇に迷ふ有さまとて夫れと呑みこめば、思ひしにはかはりてお辰さのみ田原がことも語らず、案じたるよりは産むの安きもてなしに、恐れてよりつかざりし日ごろの馬鹿らしき我れと笑はれて、母が前におこりたる瘡癩の雲もやうやう散じれば、おのづから詞に花も咲きて聲だかに笑ふやうにもなれば、時分をはかりてお辰、のう瀬川さま、人は何時どのやうな事で苦勞するやら知れませぬ物、うき世を切り髪の今日この頃、我が身にかゝる浮雲さへ大方は拂ひつくして、心の月のたかく澄むやうにと願ひながら、さて左様もならぬもの、見きくにつけて人の哀れとぞ知らぬ顔して過ぐされれば、醉狂らしき心配に身さへやせて、一人やきもきと氣はもめども、肝腎の御本尊さまがいたちの道きりでは困るでは御座んせぬかと恨らまれて與之助、それはお氣の

どくさまと軽くすまます言葉も出かねて、左様いふ次第ではなしなど、言辭をなしける、お辰いよく眞面目に、弟子は子もおなじなれば我が身も可愛きあのち嬢の爲、早くらちのあかせましたけれど、それは一ト筋、お前さまのお情實も汲まぬでは御座んせぬ、まゝごとの昔しより別れて今ではお前さまと一人をたよりの、お新さま可哀しとあるは御尤、いひ譯あそばすほどが可怪しく、左様ありてこそ嬉しきお心を喜んで居ります、なれども田原さまが事として彼のままでは置かれもすまじく、我れさへよくば他人は勝手と其やうな無茶は平常の御氣質とてお言ひになる譯が無ければ、どうでも二タ道にまよひて御苦勞なさるので御座りましよ、おのづから母様には仰せ惜きことも私には御遠慮のいらぬ筈なれば、何とともお打あけなされて御相談下さりませやと、をさな子に飯粒くゝめるやうな申分を、さすが亂暴に狼藉に言ひやぶらるゝ物でなければ、與之助少し勝手のかはりて、まばらしくは黙然となりぬ。

次第に我が本陣へきりこまれて、いづれにか返答せねばならぬ様になれば、いつまで壓のまねも出来ねば思ひきりて與之助、我れはお辰さまが何時もの給ふねゝ様なれば、其やうな義理はりの六つかきしきことは知らず、粹とやら通とやら驚なかせし末の人こそ奥ふかきおもひやりは有るもの、何となりとも察してよき様に計らひ給へ、我れは小豆まくらが相應なればと、美事



とぼけた積りで答れば、ほんに左様で御座んしたもので、海山三千年の我れに比らへて力まけのせし可笑しさ、知らざるを知らずとせよも生意氣らしけれど、ね、様の小癩だては入らぬ事なれば、以來は何事も我が身にまかせてと小言は仰せられますなやと言へば、萬事よろしくお蓋圖をど、與之助はどこまでも申談のつもり成りしが。

其六

その次の日も辰田原どのに車を飛ばせて何事を言上しけん、奥方の笑眉ひらけて見えさせられしが、歸るとそのまゝ、呼出しに人の魂をふらつかせし昔しより、書きなれたる長文の滞るところなく、我れながらをかじさを水いれの水にそいで、する墨のあそこまやかた、筋は立派に萬歳を祝して、きのふは與之助さまも入り嬉しく、然るべく取はからへと仰せの有りけるまゝ、唯今例のに参りて、奥方まで委細申上げぬに、お喜びのほどは去る方に推し給へ、猶この後のさまさまに付きて、お打合せいたしました事の多ければ、みづから参館て、とはおもへど、少しとほる事のありて今日明日自由のきかねば、おはこびの願ひましたきよしをお近のもとも申おくりける、此文を受とりたるお近が喜びより、あきれはてし與之助が、あまりの

事に隠れども思はれず、さりとて青筋たて、怒りもせば、いよ／＼笑はれて茶にされて、我が言條は何所にか立たすべき、母はもとより同意も同意、望みに望む所なれば、我がもしも嫌やなどと言はれ、お辰と同盟してどのやうの難義を言ひ出すやも許られず、彼方よりも此方よりもくどくどと面倒を持ちこまれて、長く苦境に身を置かんより、今後のことは今後の處しかたも有るものをと、せん方なしの断念にお辰がいふ嬰見さまの本色か、うまうま深淵に引入られしをくやみながら、手玉に取られて手も足も出ぬやうに成りぬ。

お近はもと／＼お辰とは意氣の合ふといふ中にも非らず、亡き良人が親友の未亡人さまといふばかり、平常は與之助の好きて通ふをさへ苦々敷いひけるも、此度びのはからひの如何に説きてか我が手にさへ乗らざりしを鎮づめて、うれしき順序のはこびける喜ばしさに、お新のことでさへ打あけて談合するやうに成りける、狭き家のうちの出来ごとを、かくしたりとも遂ひには知れずに居まじく、知りたりとて故障のあるではなけれど、氣まづき思ひをさせるだけが厭やなれば、おもてだちたる事の整はざるさまに、何とか宜き手段もあらば、お新が爲の後來もわるからぬやう、人の妻にといひては未だ與之助が事情をしるまじき彼の娘が、應どはかならず言ふまじければ、行義見ならもひをかしけれど、何とか名をつけて華族がたの大奥にでも



一時の御奉公にいたすか、ともかくも一二年のほど家をはなしたらば、双方に忘れ草のつまる種にもなりて、其後に想をさるなり嫁にやるなり、無關係の人にならば事の易かるべしと、此やうの話をなしける、その中に與之助、此場合にかりて我が身の方はゆるぎの取れぬ事なるを知りつゝ、あかす惜しき心の十分に残れば、取どめて我がものに念は今さら出すべきにもあらねど、何心なく罪なき人を、寄り集りて術計のうちに落し入れる如きを憐れめど、我が嘴をはさみたらば開處を怪しくとられて、いよいよ新を邪魔ものにさるゝ種ならんも知れねば、何事にまればなしの始まりて、いざといふ時に臨まば、新をつゝきて當人より厭やを言はする外に道はなし、新の厭やをかぶりを振りなば、誰れも無理には言ひ難きに、我れも共に詞をそつて理屈をつくり、まばしの時日を延ばすほどには、天に風雨の變あるとちなじく、はからぬ處よりはからぬ事も出で来るものなれば、今までの事の見茶になりて、田原が事の彼方より破れて來たらぬとも言ひ難しなど、人は厭ふ破綻といふ事を空に願ひて、我が心にも非ずはじまりたる縁なれば、萬づ申談のやうに誠しからず、今日の我が身の成りゆきの夢のやうなるに、いつぞは覺めて氣樂に愉快の舊にかへり、ち辰、田原などいふ文字の腦裏をはなれて、大川に足を洗ひたるほど、さつぱりと爲したきものよと思ふに、生憎やち新が哀れいぢら

其七

しの様なる無邪氣の様子にて、我れをいさゝかも見よげにその親切より、衣類の洗ひそゝぎ扱は縫はりの暇なく、夢にも母子が心をさとりたらば斯くはなすまじき朝夕のやさしさ、其身の爲には鬼にも似たりける伯母を、知らぬ心の介抱なほざりならず、今日は谷中に行きて足の疲かれぬといへば、少しもさすり致しましよと取つく憐れさ、常は何とも思はざりしことが目に映りて、何ともいはれぬ厭らしき氣もちの爲しける。

といめんと願ふは與之助が心一つにて、出ださんどつとむるは多數なるに、八方にまはしたる手の届きて、よろしき奉公口ふたつ見當りぬ、一つはち辰の手より出で、霞が關にさる名商き番諸侯の奥づとめ、むかしと違ひて御質素との表面なれど、衣類もち物の支度なみくの嫁入りよりは仰山なれば、御奉公人とても小商人官小吏などの娘小供はなく、よしある嬢さまがたの上つ方を見習ひにち上り遊ばすなれば、ち行儀はもとより、志しがあらば諸藝に通じる事もなりて、三五年の後にはやさしき身代に及ぶまじき拜領ものもありて、よろづ富貴に結構なるち邸どのと、一つは瀬川が舊知己に折々は出入りも爲したりし黒澤何がしと呼ぶ番師どの、



浮世に大家名流の聞えも無けれど、斯道にあつき志しは却りて其大家などいはるゝを厭へば  
 ちのづから隠逸といふ風もある隠居さまにて、家をゆづりし息子に律義なるにかへり見る煩は  
 しさもなければ、先祖が生國ときく甲斐の差手に、磯千鳥君が千代をば八千代となく景色さぐ  
 りがてら、厭氣の出づるまで彼のあたりの山家にまばし引こもらんといふ、妻は此地に育だち  
 たる人なれば、話しがたきもなき山猿の中に遁入りて、さぞ淋しからん月日を思へば、いつそ  
 家にとまりてお歸りを待つ方がよしと思へど、年ごろ陸まじき中は月花のいつくにも手を  
 携へぬ時なく、寸の間もはなれざりしものを、今さら一人はやりともなきに、我まゝなれども  
 此處より一人手廻りの婢をつれたく、お新さんを宜き口あらばとお頼みなりしが、あのやうに  
 可愛くしかも柔順しき娘を、我が子同様に伴ひもしたらば、書ごころもなき我が山ずみの憂さ  
 も慰むべく、萬事に嬉しき連れなるべけれど、良人にしたがる我れさへさのみ進みては行きど  
 もなき山の中へ、花の都を捨て、若き人の行かんとはいはれまじく、又よき御奉公をと望ま  
 るに貧乏醫師が預かり申たしとは口巾たくてお願ひも申されぬばど、壁訴訟のやうに妻なる  
 人の来て語りたる、此二つが此頃の題に成りけり。  
 その身一生の利害を説きて、はじめ奉公をと勧めたる時、いふかしく怪しき事にもひて、俄

かに承知はなすまじと思ひたるに、お新さんのみは驚ろきもせで、思ひもうけたる如く出て、行  
 くへきよしを合點しける、與之助かげに廻りて心を引き見れば、それは伯母さま兄さまのお傍  
 にいつまでも暮らさるゝ物ならば夫れに上てす喜びはなけれど、左様あらぬが世のならひと  
 聞けば、これも詮なきこと、うき世といふものゝ力はいかほどの物やら目には見えぬど、かな  
 しきも嬉しきも我が手業にあたはぬことゝあきらめぬる身は、愁らき時はつらき時の來たりぬ  
 ど思ひ、嬉しき時は嬉しき時ともふ、そのほかには何とも爲れぬでは御座りませぬか、と思  
 ひきりのよきに與之助といふもならず、さらば同じき奉公といへども、立派にうつくしき與之  
 助の、いさゝか氣骨は折れるにせよ遊ぶにひとしき多人數の中にまじりて、絹布づくめに務  
 めらるゝ華族の奉公ならば、その身の爲の行末もよく、世間の聞えも宜かるべきに、お新はい  
 かにぞと問へば、お命令ならば是非がなければ私に撰ばして給はらば華族さまは厭やといふ、  
 さては黒澤の方がよしとてか、我意に氣樂なるには相違なければ、行々の事につきて何ほど願  
 しき宿でもなく、それも東京にでも居ることならば氣やすさに任かせて、もとより奉公などい  
 いふでは無く奥様に細工ものでも習ふ丁簡にて行くも宜けれど、今が今田舎にこもりて、はて  
 白雲の雲水も同様なる彼の人々につきて何處まで行かるべき、されば先方よりも遠慮して欲し



とは明白に言はぬほどなるを、何故に又妙な處をも望むものかなといへば、黒澤さまは書師では御座りませぬか、兄さまも書は好きなるに、私しは書が學びたう御座ります、書ならひて如何するつもりぞと又問へば、戀しき時に妾をかきても戀せられぬ事故といはれて、與之助あとは聞くことの出来ず、一人胸のうちに泣きける。

かくと事の決定ぬる後は猶豫もなく支度の上のひて、一日なりとも長くといふもふは與之助ばかり、表面よりは黒澤が立立の近づきぬと告ぐるに、田原が方は何といふ目だたる事もなければ、裏面の交通やうくはじまりて、お近が胸にはひやくとする事の無きにもあらねば、これは一日もはやくたせたいと思ひ、かゝる時は是非無差別の日のかけに近が念慮の勝をしめて、いよく明日のあけの一番に、上野發の汽車にてといふ段に成りぬ、お新は何ごとを思ふらん、言はぬおもひは人たるによしなけれど、一語にても意味の有りける詞の與之助には利き刃にてをぐらるやうに胸のくるしく、寝られぬ夜半の殘燈のかけ薄れゆくまゝに、やがては鳥もなくらん、かねも驚かすべし、いざと敷居をまたぐ時、汽車の笛の音ひく時、やうく煙りにかけ消えゆくとき、いかならんと思ひやる與之助より、さし手が磯に千鳥を友として、かなしき戀のちもかけを描くらん、不憫やも新が心の内。

# 琴の音

上

空に月日のかはる光りなく、春さく花のどけさは浮世萬人おなじかるべきを、梢のあらし此處にばかり騒ぐか、あはれ罪なき身ひとつを枝葉ちりちりの不運に、むごや十四年が春秋を雨にうたれ風にふかれ、わづかに残る玉の緒の我れとくやしき境界にたゞよふ子あり。

母は此子が四つの歳、みづから家を出で、我れ一人苦をのがれんとにもあらねど、かたむきゆく家運のかへし難きを知る實家の親々が、斯く甲斐性なき男に一生をまかせて、涙のうちに送らせん事いとほし、乳房の別れの愁らしども、子は只一人なるぞかしと、分別らしき異見を女子ごころの淺ましき耳にさしやかれて、真人には心の残るべきやうもあらざりしかど、我が子の可愛きに引かれては、此子の親なる人をおかゝる中に捨て、我が立さらん後ほど、洗石に血をばく思ひもありしが、親々の意見は漸く義理の様にからまりて、弱き心のをしきらんに難く、霜ばしら今たふれぬべきを、知りつゝ、家も此子も、此の親をも捨て、出でぬ。



父は一人ゆきたることもあり、此子を抱きて行きたることもあり、これを突きつけて戻りたることもあり、我れは此まゝ朽はてぬとも、せめては此子を世に出したきに、いかにもして今一たび戻りくれよ、長くには非ず今五年がほど、これに物ごころのつきぬべきまでと、頼みつすかしの欺げきけるが、さりととも子故に聞なるは母親の常ぞ、やがては慈しさに堪へがたく、我れと侘して歸りぬべきものを覺束なきを頼みて、十五日は如何に、二十日は如何に、今日こそは明日こそはと待つ日空しく過ぎて、はては尋ね行きたりとて、面を合はする事もなく、乳母にや出けん、人の妻にや成りけん、百年の契りは誠に空しくなりぬ。

斯くて半年を経たりし後は、父もむかしの父に非ずなりぬ、見かざりて出にし妻を、あはれ賢とし世の人ほめものにして、打すてられし親子の身に哀れをかくる人は少なかりき、夫れも道理、胸にたゞまるもやゝの雲の、まばし暗るはこれぞとばかり、飲むほどに酔ふほどに人の本性はいよいよ暗くなりて、つものゆゆ我意の何處にか容れらるべき、其年の師走には親子が身二つを包むものも無く、ましてや雨露をしのがん軒もなく成りぬ、されども父の有けるほどは、頼む大樹のかげと仰ぎて、よしや木ちんの宿に蒲團はうすくとも、温かき情の身にしみし事もありしを、夫すら十歳と指さるほどもなく、一とせ何やらの祝ひに或る富豪の、か

みを抜いていざと並べし振舞の酒を、うまし天の美酒、これを乗りて我れも極樂へと心にや定めけん、飢えたる腹にしたゝかものして、睡るや御濱の松の下かげ、世にあさき終りを爲しける後は、来よかし此處へ、我れ指ひおけて人にせんと招くもなければ、我れから願ひて人に成らん望みもなく、はじめは浮世に父母ある人うらやましく、我れも一人は母あはれ、今は何處に如何なることをしてと、そらに戀しきこともありしが、父が終りの悲しきを見るにも、我が渡邊の家の末をともふにも、母が處業は悪魔に似たりとさへ恨まれける。

父は無きか、母は如何にと問はるゝ毎に、袖のぬれしは昔しなりけり、浮世に情なく人の心に融なきものど風ひさだめてよきは、生中おはれをかぐる人も、我れを嘲けるやうに覺えて面にくじ、いさや、つらからは一筋につられ、とでもかかても憂身のはてはとぬぢけぬ心に、神も佛も敵とあまへば、恨みは誰れに訴へん、漸々尋常ならぬ道に尋常ならぬ思ひを馳せけり。

あどろに亂れし髪のみまより、人を射るやうなる眼のきらきらと光るほかは、垢にまみれし面かげの、何處にはいかならん好き處ありとも、凡人の目に好しと見ゆべきかは恐ろしく氣味悪く油断ならぬ小僧と指さるゝはては、警察にさへ脱まれて、此處の祭禮かしの織日、人山きづくが中に思はしき疑を受けつ、口をじや前見よ盗人と萬人にわめかれし事もありき。



人の眼はくもりたるものにて、耳は千里の外までも聞くか、あやまり傳へたる事は再度きえず渡邊の金吾は賊の盜賊に成りぬ、やがては明治の何と肩がきのつくべきほど、あそろしがらるる身かへりて恐ろしく、此處を離れて知らぬ土地に走らんと思ひたる事もあり、恨みに堪へかねては死なばやと思ひたる事もあり、幾度水のおもてに墮みて、これを限りと眺めたる事もありしが、易きに似て難きものは死なりけり、捨てはてし身にも猶衣食のおづらひあれば、晝は開處となくさまよひて何となく使はれ、夜は一處不住の宿りに、かくても夢は結びつゝ、一日とたよひにたよひて、過しゆくほどに、脊たけと共にのびゆくは、ねじけたる心なるべし。

下

御行の松に吹かぜ音さびて、根岸田浦に晚稻かりほす頃、あのあたりに森江しつと呼ぶ女あるこの家を、うさんらしき乞食小僧の目にかけつゝ、怪しげなる素振あるよし、婢女ども氣味あるがりに聞き合ひしが、門の扉の明くれに用心するまでもなく、垣に枝たれし柿の實ひとつ、事もなくして一月あまりも過ぎぬるに、何時となく忘れて噂も出ず成しが、主の女が敏き耳に

は、少しあやしと聞かると事あり、秋雨しとくと降りて物あはれなる夜、ともし火のもとに獨り手馴れの琴を友として、あはれに淋しき調べを弄びつゝ、上野の森に聞えいづる鐘の、さりとては更けぬるかな、さしちきて聞けば、軒ばを傳ふ雨しだりのほかに、梢をゆする秋風の

外に、物のけはいの聞ゆる様なること度かさなりぬ。軒ばに高き一もと松、誰れに操の獨栖ぞと問はれ、斯道にと答へんつゝ琴の優しき音色に、一身を投げ入れて、思ひをひそめしは幾とせか取る年は十九、姿は風にもたへぬ柳の糸の、細々と弱げなれども、爪箱とりて居すまゐを改たむる時は、座のうきよの紛雜も何ぞ、松風かよふ糸の上には、山姫きたりて手やそふらん、夢も現も此うちにとほし笑みて、雨にも風にも、はたしめく雷電にも、悠然として餘念なし。

頃は神無月はつ霜この頃ぞ降りて、紅葉の上の照る月の、誰が砥にかけて磨きいだしけん、老女が化粧のたごは凄し、天下一面くもりなき影の照らすらん、大厦も高樓も、破屋の板間の犬の臥床も、さては埋もれ水人に捨てられて、蘆のかれ葉に霜のみ牙ゆる古宅の池も、篋のちとなひ心細き山した庵も、田のもの案山子も小溝の流れも、須磨も明石も松島も、ひとつ光り

のうちに包みて、清きは清きにしたがひ、濁れるは濁れるまに、八面玲瓏一點無私のちも



かげに添ひて、澄のぼる琴のね何處までゆくらん、うつくしく面白く、清く尊く、さながら天上の樂にも似たりけり。

ふ静が琴のねは此月此日ウキ世に一人人生みぬ、春秋十四年雨つゆに打たれて、ねじけゆく心は駿のやうにかたく、射る矢も此處にたしがたき身の、果は臭骸を野山にさらして、父が末路の哀れやまなぶらん、さらすば悪名を路傍につたへて、腰に鎖のあさましき世や送らん、さても心の奥にひそまりし優しさは、三更月下の琴聲に和してこぼれ初めぬる涙、露の玉か、玉ならば趙氏が城のいくつにも替へがたし、戀か情か、其人の姿をも知らざりき、わづかに洩れ出る榮がきこしの聲に、うれしといふ事も覺えぬ、恥かしさも知りぬ、かねては悪魔と恨らみたる母の懐かしさ、一身にしみて、金吾は今さら此世のすて難きを知りぬ、月はいよ／＼深ゆる夜の垣の菊の香たもとに満ちて、吹くや夜あらし心の雲を拂らへば、又かきたつる琴のねのあはれ百年の友とやなるらん、百年の悶えをや残すらん、金吾はこれより百花爛漫の世にいでの。

### 雪の目

見渡すかざり地は銀沙を敷きて、舞ふや蝴蝶の羽そで軽く、枯木も春の六花の眺めを、世にある人は歌にも詠み時にも作り、月花に並べて稱ゆらん浦山しよよ、あはれ忘れがたき昔しを思へば、降りた降る雪くちをしく悲しく、梅の八千度その甲斐もなけれど、勿躰なや父祖累代墳墓の地を捨て、養育の恩ふかき伯母君にも背き、我が名の珠に恥かしき今日、親は環なかれどこそ名づけ給ひけめ、瓦に劣る世を経よとは思し置かじを、そもや谷川の氷あちて流れて清からぬ身に成り終りし、其わやまちは幼氣の、迷ひは我れか、媒は過ぎし雪の日ぞかし。我が故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井の家は土地に聞えし名家にて、身は其一のぶもの成りしも、不幸は父母はやく亡せて、他家に嫁さし伯母の是れも眞入を失なひたるが、立歸りて我をば生したて給ひたき、さりながら三歳といふより手しほは懸け給へば、我れを見ること眞實の子の如く、蝶花の愛親といふ共これには過ぎまじく、七歳よりそ手習ひ學問の師を選らみて、糸竹の藝は御身づから心を盡くし給ひき、扱ふたつ年に關守なく、腰揚とれて細



眉つくり、幅ひろの帯うれしと締めしも、今にして思へば其頃の悪かき、都少女の利發には比らぶべくも非らず、姿ばかりは年齢ほどに延びたれど、男女の差別なきばかり幼なくて、何とこの愛きもなく思慮もなく明し暮らす十五の冬、我れさへ知らぬ心の色を何方の誰れか見とめけん、吹風つたへて伯母君の耳にも入りしは、これや生れて初めての、仇名々々戀すてふ風説なりけり。

世は誤の世なるかも、無き名とり川波かけ衣、ぬれにし袖の相手といふは、桂木一郎とて我が通學せし學校の師なり、東京の人なりとて容貌うるはしく、心やさしければ生徒なづきて、桂木先生と雖れも褒めしが、下宿は十町ばかり我が家の北に、法正寺と呼ぶ寺の離室を假すみなりけり、幼なきより教へを受ければ、習慣うせがたく我を愛し給ふこと人に越えて、折ふしは我が家をも訪ひ又下宿にも伴ひて、ちもしろき物がたりの中に様々教へを含くめつ。さながら妹の如くもてなし給へば、同胞なき身の我れも嬉しく、學校にての肩身も廣かりしが、今はた思へば實に人目には怪しかりけん、よしや二人が心は行水の色なくとも、結ふや島田醬これも小兒ならぬに、師は三十に三つあまり、七歳にしてと書物の上には學びたるを、忘れ忘られずて睡みけん悪かき。

見る目は人の咎にして、有るまじき事と思ひながら、立ちし浮名の消ゆる時なくば、可惜白玉の環に成りて、其身一生の不幸のみか、あれ見よ伯母そだてにて投げやりなれば、薄井の娘が不品行さ、両親あれば彼の様にも成らじ物と、云ひたきは人の口ぞかし、思ふも涙は其方が母、臨終の枕に我れを拜がみて、姉様も願は珠が事をと、幽かに言ひし二言あはれ千萬無量の思ひを籠めて、まこと闇路に迷ひぬべき事なるを、引受けし我れ其甲斐もなく、世の嗤笑に爲しも終らば、第一は亡き妹に對し我が薄井の家名に對し、伯母が身は抑も何とすべき、と御聲ひく、四壁を擲りて、口敷すくなき伯母君が思し合はするとありてか、しみじみと諭し給ひき、我れ初めは一向夢の様に迷ひて何ととも思ひ分かさりしが、漸々伯母君の詞するどく、よく聞けよ、と珠、桂木様は其方を愛で給ふならん、其方も又喜はしかるべし、されども此處に法ありて、我が薄井の家には昔より他郷の人と縁を組まず、况てや如何に學問は長じ給ふとも桂木様は何者の子何者の種とも知らぬを、門閥家なる我が薄井の聲とも言ひがたく嫁にも遣りがたし、よし戀にても然かぞかし、無き名なりせば猶さらのこと、今よりは構へて往來もし給ふな、誓古もいらぬ事なり、其方大切なればこそお師匠様と追従もしたれ、益も無き他人を珍重には非らず、年來美事に育だて上げて、人にも褒められ我れも誇りし物を、口惜しき濡れ衣



させられしは彼の人ゆゑなり、今までは今までとして、以來は斷然と行ひを改ため、其方が名をも雪ぎ我が心をも安めくれよ、兎角に其方が仇は彼の人なれば、家と思ひ伯母を思はば、桂木とも思すな一郎とも思すな、彼の門下さる共寄り給ふな、と憂みかけて仰する時我が胸は斷ゆる手に成りて、何の涙ぞ睡に堪へがたく、袖につゝみて音に泣きしや幾時。

口惜しかりしなり其内心の、いかに世の人とり沙汰うるさく一村擧りて我れを捨つるも、育て給ひし伯母君の眼に我が清濁は見ゆらんものを、汚れたりとぞ思す恨らめし御詞、師の君とても昨日今日の交りならねば、正しき品行は御覽じ知る筈を、誰が曉言に動かされてか打捨て給ふ情なまよ、成らば此胸かきさばきても身の潔白の願はしたやと哭きしが、其心の底何者の潜みけん、駒の狂ひに手綱の術も知らざりしなり。

小籠のすきかけ隔てといへば、一重ばかりも疾ましきを、此處十町の間人目の開きびしく成れば頃は木がらしの風に付けても、散りかふ紅葉のさま蒲山しく、行くは何處までと遠く懸れば、見ゆる森かげ我を招くかも、彼の村外れは師の君のと、住居のさま面かげに浮かんて、夕暮ひよく法正寺の鐘の音かなしく、さしも心は空に通へと流石に戒しり重ければ、足は其方に向ひも得せず、せめては師の君訪ひ來ませと待てど、立つ名は此處にのみなれど、憚りあれ

ばにや音信もなく、と絶えし中に千秋を重ねて、万代いはふ新玉の、歳たちかへつて七日の日來りき、伯母君は隣村の親族がり年始の禮に趣き給ひしが、朝より曇り勝の空いや暗しく成るまゝに、吹く風絶えたれど寒さ骨にしみて、引入るばかり物心はそく不圖ながむる空に白き物ちらく、初こそ雪に成りぬるなれ、伯母様さぞや寒からんと炬籠のものとに思ひやれば、いど小降る雪用捨なく綿をなげて、時の間に隠くれけり庭も籠も、我が肘か好窓はそく開らば一目に見ゆる裏の耕地の、田もかくれぬ畑もかくれぬ、日毎に眺むる彼の森も空と同一の色に成りぬ、あゝ師の君はと是れは抑々まよひなりけり。

彌ひの神といふ者もしあらば、正しく我身さそはれしなり、此時の心何を思ひけん、善ども知らず悪しとも知らず、唯懐かしの念に迫まられて身は前後無差別に、死なれ出しなり海井の家ぞ

是れや名残と思はねば馴れし軒を見も返へらず、心こそぎて庭口を出した、凍凍この雪ふりに何處へとて、お傘をも持たずにかと驚ろかせしは、作男の平助とて老實に愚かなる男なりし、伯母様のお迎ひにと偽はれば、否や今宵はお泊りなるべし、是非お迎ひにとならば老僕が參らん先待給へと止めらるゝ憎くさ、眞實は此の雪に宜くこそと賞められたく、是非に我が身



行きたければ、其方は知らぬ顔にて居よかしと言ふに、取しめなく高笑ひして、お子達は扱て  
らちも無きもの、さらば傘を持ち給へと、其の身の持ちしを我れに渡しつ、轉ろばぬ様に行き  
給へと言ひけり、由縁あれば武藏野の原こひんきならひ、此一ト言さへ思ひ出らるゝを、無情  
りしも我が爲め、厭しかりしも我が爲め、未宜かれとて盡くし給ひしを、思ふも勿躰なきは伯母  
君のことなり。

斯くまでに師は戀ひしかりしかど、夢さら此人を良人と呼びて、共に他郷の地を踏まんとは、  
かけても思ひ寄りざりしを、行方なしや迷ひ、窓の吳竹ふる雪に心下折れて我れも人も、  
罪は賊の罪に成りぬ、我が故郷を離なれしも我が伯母君を捨てたりしも、此の雪の日の夢ぞか  
し。

今さらに我が夫を恨らみんも果敢なし、都は花の見る目うるはしきに、深山人の我れ立ち並ら  
ぶ方なく、草木の冬ど一人しりて、袖の涙に昔しを問へば、何ごとも總べて誤なりき。故郷  
の風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎げき歎げきて、其歳の秋かなしき敷に入り給ひしど  
か、悔こそ物の終りなれ、今は浮世に何事も絶えぬ、つれなき人に操を守りて知られぬ節を保  
たんのみ、思へば賊と式部が歌の、ふれば憂さのみ増さる世を知らじな、雪の今歳も又、我が

破れ垣をつくろひて、見よとや誇る我れは昔しの戀しき物を。



そらろこと

雨の夜

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし、今歳はいかなれば斯くいつまでも丈のひくきなど言ひてしを夏の末つかた極めて暑かりしに唯一日ふつか、三日とも敷へずして驚くばかりに成りぬ、秋かぜ少しそよ／＼とすれば端のかたより果敢なげに破れて、風情次第に淋しくなるほど雨の夜の音なひこれこそは哀れなれ、こまかき雨ははらく／＼と音して草村がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一しきり颯と降くるは彼の葉にはかり懸るかといたまし、雨は何時も哀れなる中に秋はまして身にしむと多かり、更けゆくまゝに燈火のかげなどうら淋しく、寝られぬ夜なれば臥床に入らんも寝なはとて小切れ入れたる疊紙とり出だし、何とはなしに針をも取られぬ、未だ幼なくて伯母なる人に縫物ならひつる頃、狂先、襦の形など六づかしう言はれし、いと恥かしうて是れ習ひ得ざらんほどはと家に近き某の社に日參せし事なをしける、思へば夫れも昔し成り、をしし人は昔の下になりて習ひとりし

身は大方もの忘れしつ、斯くたまさかに取出るにも指の先こわきやうにて、はか／＼しうは得も縫ひがたきを、彼の人あらば如何ばかり言ふ甲斐なく淺ましと思ふらん、など打返し其むかしの戀しうて無端に袖もぬれぬ心地、遠くより音して歩み来るやうなる雨、近き板戸に打つけの聲はしき、いづれも淋しからぬかは、若たる親の瘦きたる肩もむきで、骨の手に當りたるを尋る夜はいと心細いのやむかたなし。

月の夜

村裏すこし有るもよし、無きもよし、みなき立てたるやうの月のかげに尺八の音の聞えたる、上手ならほいとをかしかるべし、三味も同じこと、琴は西片障あたるの垣根ごしに聞えたる、いと長き月に輝く人のかげも見まほしく、物あたりめきて床しかりし、親しき友に別れたる頃の月けとなき時かたうも有るかな、千里のほがれでも思ひやるは海ひも昔は物なれば唯うらやましうて、これを假に鏡となしたらば人のかげも映るべしやなど果敢なき事／＼思ひ出でらる。さ／＼やかなる庭の池水にゆられて見ゆるかげ物いふやうにて、手すくめきたる所に寄りて欠しき見入るれば、はじめは浮きたるやう成しも次第に底ふかく、此池の深さいくばくと



も置られぬ心地に成て、月は其その底のいと深くに住むらん物のやうに思はれぬ、久しうありて仰ぎ見るに空なる月と水のかけと孰れを賦のかたちとも思はれず、物ぐるほしけれと箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さゝ波すこし分れて是れにぞ月のかけ漂ひぬ、斯くはかなき事して見せつれば翺なる子の小さきが眞似て、姉さまのする事我れも爲とて硯の石いつのほどに持て出でつらん、我れも月さま砕くのなりとてはたと捨てつ、それは亡き兄の物なりしを身に傳へていと大事と思ひたりしに果敢なき事にて失なひつる罪得がましき事ともふ此池かへさせてなど言へども未ださながらにてなん、明ぬれば月は空に歸りて餘波もといめぬを、硯はいかさまに成ぬらん、夜な<sup>く</sup>影や待どるらん<sup>と</sup>哀なり。嬉しきは月の夜の客人、つねは疎々しくなどある人の心安げに訪ひ寄たる、男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あらば如何ばかり嬉しからん、みづから出るに難からば文にてもおこせかし、歌よみ添まじきは情くき物なれど斯る夜の一言には身にしみて思ふ友とも成ぬべし。大路ゆく辻占うりのこえ、汽車の笛の遠くひびきたるも、何どはなしに魂あくがる心地す。

雁 が ね

朝月夜のかげ空に残りて、見し夢の餘波もまだ現なきやうなるに雨戸のひびきして打ながむればさど吹く風竹の葉の露を拂ひて、そいろ寒げく身にしみ渡る折しも、落くるやうに雁がねの聞えたる、孤つなるは猶さら、連ぬし姿もあはれなり、思ふ人を遠き縣などにやりて明くれ便りの待わたらるゝ頃これを聞たらば如何なる思ひやすらんと哀れなり。朝霧ゆふ霧のまぎれに聲のみ洩らして過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音きこえて月すむ、田面に落らんかけ思ひやるも哀れ深しや。旅寝の床、佗人の住家、いつれに聞ても物ちもひ添ふる種なるべし。いとせ下谷のほとりに假初の家居して、商人といふ名も耻かしき、唯いさゝかの物とり並べて朝夕のたつきと爲し頃、軒端の庇われたれども月とすなよめとなるにはあらで、向ひの家の二階のはづれを備かにもれ出る影したはしく、大路に立て心ぼそく打あぶ々に、秋風たかく吹きて空にはいさゝかの雲もなし、あはれ斯る夜よ、歌よむ友のたれかれ集ひて、静かに浮世の外物がりなど言ひ交はしつるほど、俄かに其わたり戀しう涙ぐまるゝに、友に別れし雁唯一つ空に聲して何處にかゆく、さびしとは世のつね、命つれなくさ一思はれぬ。搦衣の音に交りて聞えたる如何ならん、三つ口など騒して小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物のをかしく聞ゆるやと浦山しくなん。



虫の聲

垣根の朝顔やうしく小さく咲きて、昨日今日葉がくれた一花みゆるも其はじみの事もはげれ  
 哀れなるに、松虫すも虫のつしか鳴よわりて、朝日生ちりて龍馬の果敢たけは聲を、小溝  
 の端、壁の中など有るか無きかの命のほど、老たる人、病める身などにて聞たらば、さこそ比  
 らべられて物かなしからん。『我が初病は重くまじきと今年は此の齡ひいと短かくて、はやくは  
 聲のかねに成しかな、くつむ虫はかしましき聲もかたもいと丈夫めかしきを、何しが時  
 の間にもとろへ行くらん、人にもさる類ひは有りけりぞをかし。』  
 松虫はふが出でなく聲のうつ  
 くしきければ、物ねたみされて齡ひの短かきなりと點頭かる、松虫も同じことなれど、名ど  
 實と伴はねばあやしむるこそをかし、常盤の松を名に呼べれば、千歳ならずとも樹野の末まで  
 は有るべきぞ、萩の花ちりこぼるゝやがて聲をす成り行く、さる盛りの短かきものなれば、昔  
 時も似よと此名は負せけん、各づけ親ぞ知らまほしき。此虫一とせ籠に飼ひて露にを霜にぞ當  
 てじといたはりしが、その頃病ひに臥したりし兄の、夜なしく鳴くこそ耳につきて物色しく厭  
 はしく、あの聲なれば此夜やすく睡らるべしなと言へるが道理にて、いそぎ取らるして睡草の

茂みに放ちぬ、其夜なくやと試みたれどさらに聲の聞えねば、俄かに露の身に寒く鳴くべき勢  
 ひの無くなりしかと憐れみ合ひし、其とし暮れて兄は空しき敷に入りつ、又の年の秋、今日ぞ  
 此頃なと思ひ出る折しも、ある夜ふけて近き垣根のうちにさながらの聲きこえ出ぬ、よもあら  
 じとは思へど唯其ものゝやうに懐かしく、戀しきにも珍らしきにも涙のみこぼれて、此虫がや  
 うに、よし異物なりとも聲かたち同じかるべき人の唯今こゝに立出で来らば如何ならん、我れ  
 は其袖をつと捉らへて放つ事をなすまじく、母は嬉しさに物は言はれで涙のみふりこぼし給ふ  
 や、父は如何さまに爲し給ふらんなど怪しき事を思ひよる、かくて二夜ばかりは鳴きつ、其後  
 は何處にゆきけん、假にも聲の聞えず成りぬ、今も松虫の聲きけば、其折ももび出られて  
 物かなしきに、籠に飼ふ事は更にも思ひ寄らず、あのつからの野邊に鳴弱りゆくなど、唯その  
 人の別れのやうに思はるゝぞかし。



う つ せ み

(一)

家の間敷は三疊敷の立間までを入れて五間、手狭なれども北南吹どほしの風入りよく、庭は廣々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうつつと見えて、塙處も小石川の植物園にちかく物静なれば、少しの不便を疵にして他には申旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡三月ごしにも成けれど、いまだに住人のさだまらずで、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき。家は何處までも奇麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拜見をぞて来るものも無きにはあらねど、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七圓五十錢といふに、夫れは下町の相場とて折かへして来るは無かりき、さるほどに此ほどの朝まだき四十に近かるべき年輩の男、紡績織の浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そとくさと落つき無きが差配のもとに來たりて此家の見たしといふ、案内して其處此處と戸棚の敷などを見せてあるくに、其等のことは片耳にも入れて、唯四邊の静にさわやかなるを喜び、今日より直にお借

り申まする、敷金は唯今置いて参りまして、引越しは此夕暮、いかにも急速では御座りませぬが直様掃除にかゝりたる御座りますとて、何の子細なく約束はどのひぬ。お職業はと問へば、いえ別段これといふ物も御座りませぬとて至極曖昧の答へなり、御人數はと聞かれて、其何だか四五人の事も御座りますし、七八人にも成りますし、始終ごたくして埒は御座りませぬといふ、妙な事と思ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り來たりしは、相乗りの輓かけ車に妻をつゝみて、開きたる門を真直に入りて玄關におろしければ、主は男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乗り居たるは三十計の氣の利きし女中風と、今一人は十八か、九には未だと思はるゝやうの病美人、顔にも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きどほるやうに蒼白きがいたましく見えて、折から世話やきに來て居たりし、差配が心に、此人を先刻のそい、くさ男が妻とも妹とも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは大八に唯一くるま來たりしばかり、兩隣にお定めの上産は配りけれども、家の内は引越らしき騒ぎもなく至極ひつそりとせし物なり。人數は彼のそとくさに此女中と、他には御飯たきらしき肥大女および、その夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど來たりし人あり、一人は六十に近かるべき人品よき剃髪の老人、一人は妻なるべし對するほどの年輩にてこれは



實法に小なき丸鬘をぞ結ひける、病みたる人は来るよりやがて奥深に床を敷かせて、括り枕に頭を落つかせけるが、夜もすがら枕近くにありて悄然とせし老人二人の面やう、何處やら寝顔に似た處のあるやうなるは、此娘の若しも父母にては無きか、彼のそくさ男を始めとして女中ども一同旦那さま御新造様と言は、應々と返事して、男の名をば太吉太吉と呼びて使ひぬ。わくる朝風すしきほどに今一人車を乗りつけ、人の有けり、袖の單衣に白ちりめんの帯を巻きて、鼻の下に薄ら髯のある三十位のでつふりと太て見だてよき人、小なき紙に川村太吉と書て張りたるを讀みて此處だくと車よりありける、姿を見つけて、お、番町の旦那様と三どんが眞先に襟をはづせば、そくさは飛出していやあ早い出、よく早速あわかりに成りましたな、昨日まで大塚にお置き申したので御座りますすが何分最早、その何だか類に嫌に成りなされて何處へか行かう行かうと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸とまあ此處をば見つけ出しまして御座ります、御覽下さりませ一寸こうも庭も廣う御座りますし、四隣が遠うござりますので御氣分の爲にも良からうかと存じます、はい昨夜はよくお眠に成りましたが今朝ほどは又少しその、一寸御様子が変わつたやうで、まあ、いらしつて御覽下さりませと先に立て案内をすれば、心配らしく髭をひねりて奥の座敷に通ひぬ。

(二)

氣分すぐれて良き時は三歳兒のやうに父母の膝に眠るか、白紙を切て姉妹の製造に餘念なく、物を問へばにこくと打笑みて唯はいくと意味もなき返事をする温順しさも、在風一陣梢をうごかして来る氣の立つた折には、父様も母様も兄様も誰れも後生顔を見せて下さるな、とて物陰にひそんで泣く、聲は胸を絞り出すやうにて私が恐う御座りました、堪忍して堪忍してと繰返し、さながら目の前の何やらに向つて詫るやうに言ふかと思へば、今行ます、今行ます、私も跡から参りますとて日のうちには看護の暇をうかひて駆け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、きれ物としては鉄刀一挺目にかくらぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする薬かも、此續弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて駆け出す時には大の男二人がよりにても六つかしき時の有ける。本宅は三番町の何處やらにて表札を見ればむ、彼の人の家かと合點のゆくほどの身分、今さら此處には言はずもがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせで、醫者は心安きを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ處に住へば見る物残らず嫌やに成り



て、次第に病ひのつもの事見る目も恐ろしきほど懐まじき事あり。  
當主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きあもひやるべし、病ひにふ  
したるは櫻さく春の頃よりと聞くに、夫れよりの晝夜睡を合する間もなき心配に疲れて、老た  
る人はよろしくたよくと二人ながら力なさうの風情、娘が病ひの俄かに起りて私は最う歸  
りませぬとて驅け出すを見る折にも、あれ〜何うかして呉れ、大吉〜と呼立るほかには何  
の能なく情なき身なり。

昨夜は夜もすがら静に眠りて、今朝は誰れより一はな懸けに目を覺し、顔を洗ひ髪を撫でつけ  
て着物もみづから氣に入りしを取出し、友仙の帯に緋ぢりめんの帯あげも人手を借すに手ばし  
こく締めたる姿、不圖見たる目には此様の病人とも思ひ寄るまじき美しくさ、兩親は見返りて  
今更に涕ぐみぬ、附そひの女が病の體を持來たりて召上りますかと問へば、嫌や嫌やと頭をぶ  
りて意氣地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季が明まするか、歸る事が出来るで御座  
んせうかとて問ひかけるに、年季が明るらいつて何處へ歸る丁箇、此處はも前さんの家では無  
いか、此ほかに行くところも無からうでは無いか、分らぬ事を言ふ物ではありませぬと叱られ  
て、夫でも母様私は何處へか行くので御座りませう、あれ彼方に迎ひの事が來て居ます、と

て指さすを見れば軒端のもちの木に大なる珠の巢のかゝりて、朝日にかゝりやきて金色の光あ  
る物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り來て、あれ彼んな事を、貴君も聞遊しましたかど良人に向ひて思は  
し氣にいひける、娘は俄に萎れかへりし面に生々どせし色を見せて、あの夫れ一昨年のお花見  
の時ねと言ひ出す、何ぞと受けて聞けば學校の庭は奇麗でしたかねとて面じろさうに笑ふ、あ  
の時貴君が下さつた花をね、私は今も本の間へ入れてあります、奇麗な花でしたけれど、最  
う萎れて仕舞ました、貴君には彼れから以來御目にかゝらぬでは御座んせぬか、何故逢ひに來  
て下さらないの、何故歸つて來て下さぬの、最うお目にかゝる事は一生出來ぬので御座んす  
るか、夫れは私が悪う御座りました、私が悪いに相違ござんせぬけれど、夫れは兄様が、兄が、  
あゝ誰れにも濟ませぬ、私が悪う御座りました免して免してと胸を抱いて苦しうに身を悶ゆ  
れば、雪子や何も餘計な事を考へては成りませぬよ、夫れがも前の病氣なのだから、學校も花  
もありはしない、兄様も此處にお出でなさつては居ないのに、何か見えるやうに思ふのが病氣  
なのだから氣を落つけて菫の雪子さんに成て呉れ、よ、よ、氣が付きましたか〜と脊を撫で  
られて、母の膝の上ですゝり泣きの聲ひく、聞えぬ。



(三)

番町の旦那様も出で聞くより雪や兄様がお見舞に来て下されたと言へど、顔を横にして振向ふともせぬ無禮を、常ならば怒りもすべき事なれど、あゝ捨て置いて下さい、氣に逆らつてもならぬからとて義母が手づから與へられし皮蒲團を貰ひて、枕もとを少し遠ざかり、吹く風を背にして柱の際に黙然として居る父に向ひ、靜に一つ二つ詞を交へぬ。

番町の旦那といふは口數少なき人を見て、時たま思ひ出したやうにはたゞと團扇づかひするか、巻煙草の灰を拂つては又火をつけて手に持て居る位なもの、絶えず尻目に雪子の方を眺めて困つたものですなど言ふ計、あゝ此様な事と知りましたら早くに方法も有つたのでせうが今に成つては驕馬も及ばずです、植村も可愛想な事でした、とて下を向いて歎息の聲を洩らすに、どうも何とも、我は悉皆世上の事に疎しな、母もあの通りの何であるので、三方四方埒も無い事に成つてな、第一は此娘の氣が狭いからではあるが、否植村も氣が狭いからで、何うも此様な事になつて仕舞たで、我等二人が實に其方に合はせる顔も無いやうな仕義でな、然し雪をも可愛想と思つて遣つて呉れ、此様な身に成つても其方への義理ばかり思つて情ない事を言

ひ出し居る、多少教育も授けてあるに狂氣するといふは如何にも恥かしい事で、此方から行く家の恥辱にも成る實に憎むべき奴ではあるが、情實を汲んでな、これほどまで操といふものを取止めて置いただけ憐んで遣つて呉れ、愚鈍ではあるが子供の時から是れといふ不出來しも無かつたと思ふと何か残念の極にもあつて、賊の親馬鹿といふので有らうが平適らぬほどならば死ぬとまで諦がつきかねる物で、餘り昨今忌はしい事を言はれると死期が近よつたかと取越し苦勞をやつてな、大塚の家には何か迎ひに来る物が有るなど、騒ぎをやるにつけて母が詰らぬ易者などにも見て貰つたか、愚な話しではあるが一月のうちに生命が危ふいとか言つたさうな、聞いて見ると餘り心よくも無いに當人も頗ど嫌がる様子なり、ま、引移りをするが宜からうとて此處を探させては來たが、いや何うも永持はあるまいと思はれる、殆毎日死ぬぬぬと言つて見る通り人間らしい色艶もなし、食事も丁度一週間ばかり一粒も口へ入れる事か無いに、夫ればかりでも身軀の疲勞が甚しからうと思はれるので種々に異見も言ふが、何うも病ひの故であらうか兎角に誰れの言ふ事も用ひぬには困りはてる、醫者は例の安田が來るので斯う素人まかせでは我まゝ計つので宜く有るまいと思はれる、我の病院へ入れる事は不承知かと毎々聞かれるのであるが、夫れも何う有らうかと母などは頗どいやがるので我も二の足を踏



んで居る、無論病院へ行けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分此頃飛出しが始まつて我などは勿論大吉と倉と二人ぐらゐの力では到底引とめられぬ働きをやるからの、萬一井戸へでも懸られてはと思つて、無論蓋はして有るが往來へ飛出されても難義至極なり、夫等と思ふと入院させやうと思ふが何か不憫らしくて心一つには定めかねるて、其方に思ひ寄り有らば言つて見て呉れとてくるくゝと刺たる頭を撫で、思案に能はぬ風情、はあゝと聞居る人も詞は無くて諸共に溜息なり。

娘は先刻の涙に身を揉みしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよゝと母の膝へ寄添ひしまし眠れば、お倉お倉と呼んで附添ひの女子と共に郡内の浦團の上へ抱き上げて臥さずにはや正体も無く夢に入るやうなり、兄といへるは靜に膝行寄りてさしのぞくに、黒く多き髪の毛を最惜しげもなく引つめて、銀杏返しのこはれたるやうに折返し折返し鬘形に畳みこみたるが、大方横に成りて狼藉の姿なれども。幽霊のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投出し、浴衣の胸少しあらはに成りて締めたる緋ぢりめんの帯あけの解けて帯より落かゝるも炯かしからで惨ましきさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折返し覗くと呼び、書物よむとて有し學校のまねびをなせば、心にまかせて紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙を手に取りて見れば、怪しき書風に正躰得しれぬ文字を書ちらして、是れが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに讀まれたるは村といふ字、郎といふ字、お、植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

(四)

今日は用なしの身なればとて兄は終日此處にありけり、氷を取寄せて雪子の頭を冷す看護の女子に替りて、とれ少し我がやつて見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ります、お召物が濡れますと言ふを、いゝと先さけて見てくれるとて氷袋の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭を冷して下さるのですとて、母の親心付れども何の事とも聞分ぬと覺しく、目は見開きながら空を眺めて、あれ奇麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様兄様と聲を限りに呼べば、こら何うした、蝶も何も居ない、兄は此處だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、え、見えるか、兄だよ、正雄だよ、氣を取直して正氣になつて、お父さんやお母さんを安心させて呉れ、こらし聞分て呉れ、



よ、お前が此様な病氣になつてから、お父様もお母様も一晩もゆるりとお眠に成つた事は無い、お疲れなされてお瘦せなされて介抱して居て下さるのを孝行のお前に何故わからぬ、平常は道理がよく了解する人では無いか、氣を静めて考へ直して呉れ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懸に吊つて遣れば、お前が手づから香花でも手向れば、彼れは快よく眠する事が出来ると遺書にも有つたと言ふでは無いか、彼れは潔く此世を思ひ切つたので、お前の事も合せて思ひ切つたので決して未練は殘して居なかつたに、お前が此様に本心を取亂して御両親に欺をかけると言ふは解らぬでは無いか、彼れに對してお前の處置の無情であつたも彼は決して恨んでは居なかつた、彼れは道理を知つて居る男であらう、な、左様であらう、校内一流の人だとお前も常に褒めたではないか、其人であるから決してお前を恨んで死ぬ、其様な事はある筈がない、憤りは世間に對してなので、既に其事は人も知つて居る事なり遺書によつても明かでは無いか、考へ直して正氣に成つて、其の後の事はお前の心に任せるから思ふまゝの世を経るが宜い、御両親のある事を忘れないうで、御両親が何れほどお歎きなされるかを考へて、氣を取直して呉れ、え、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れるでは無か、醫者にも及ばぬ、藥にも及ばぬ、心一つ居處をたしかにしてな、直つて呉れ、よ、よ、こら雪、

宜いか、解つたかと言へば、唯うなづいて、はらはいと言ふ。

女子どもは何時しか枕もとを遠慮して四邊には父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るても解らぬとも覺えぬとも兄様兄様と小さき聲に呼べば、何か用かと氷袋を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身体が痛くてと言ふ、夫れは何時も氣の立つまゝに駆け出して大の男に捉へられるを、振はなすとして恐ろしき力を出せば定めし身も痛からう生紙も處々に有るぞ、それでも身体が痛いが知れるほどならばと果敢なき事をも両親は頼母しがらぬ。お前の抱かれて居るは誰君、知れるかへと母親の問へば、言下に兄様で御座りませうと言ふ、左様わかれば最う仔細はなし、今話して下された事覚えてかと言へば、知つて居ます、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同かほを見合せて情なき思ひなり。瓦しばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き聲して、最う後生を願ひで御座ります、其事は言うて下さりますな、其やうに仰せ下さりましても私にはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出るに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何處へお出遊はすのど岸破と起きて、不意に驚く正雄の膝を突きのけつゝ縁の方へと駆け出すに、それとて一同はらしくと勝手より太吉ちくらなど飛來るほどに左のみも行かず縁先の柱のもとにびたりと坐し



て、勘忍して下され、私が悪う御座りました、始めから私が悪う御座りました、貴君に悪い事は無い、私が、私が、申さなうが悪う御座りました、兄と言つては居りまするけれど。むせび泣きの聲聞え初めて断續の言葉その事とも聞かき難く、半かへげし軒ばの籠、風に音する夕ぐれ淋し。

(五)

雪子が線かへす言の葉は昨日も今日も一昨日も、三月の以前も、其前も更に異なる事を言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと言ふ言葉、學校といひ、手紙といひ、我罪、あゝとから行まする、戀しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此處に心はもぬけの殻に成りたれば、人の言へるは聞分るよしも無く、樂しげに笑ふは無心の昔しを夢みてなるべく、胸を抱きて苦悶するは遣るかた無かりし當時のさよの再び現にあらはるゝなるべし。あいたはしき事とは大吉と言ひぬ、ち倉と言ひ、心なきも三とんの末まで嫌さまに罪ありとはいふさか言はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき高踏にお根がけは櫻色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪一つ淡泊と遊して學校がよひのち委今も目に殘りて、何時蓄

のやうに御平癒めそばすやらと心細し、植村さまも好い方であつたものともち倉の言へば、何があの色の黒い無骨らしき方、學問はえらからうとも何うで此方のお嬢さまが對にはならぬ、根つから私は癒めさせぬと三の力めば、夫れはお前が知らぬから其様な憎くいな事も言へるもの、三日交際をしたら植村様のあと追うて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方とは質が違つて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村様は何だと聞いた時には可愛想な事をと涙がこぼれたもの、お嬢さまの身に成つては恐らからうでは無いか、私やお前のやうなやつと来いならば事は無いけれど、不斷つゝしんでお出遊ばすだけ身にしむる事も深からう、彼の親切な優しい方を斯う言つては悪いけれど若旦那へ無かつたらお嬢さまも御病氣になるほどの心配は遊ばすまいに、左様いへば植村様が無かつたら天下泰平に納まつたものを、あゝ浮世は愁らしいものだね、何事も明すけに言つて除ける事が出来ぬからとて、ち倉はつくづく、儘ならぬを傷みぬ。つとめある身なれば正雄は日毎に訪ふ事もならで、三日おき、二日おきの夜な／＼車を柳のもとに乗りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辭す時あり、稚子のやうに成りて正雄の膝を枕にして寐る時あり、誰か給仕にても箸をば取らざと我儘をさへれど、正雄に叱られて同じ膳の上で粥の湯をすゝる事もあ



り、癒つて呉れるか。癒ります。今日癒つて呉れ。今日癒ります。癒つて兄様のお袴を仕立て上げます。お召も縫うて上げます。夫れは辱し早く癒つて縫うて呉れと言へば、左様しましたらば植村様を呼んで下さるか。植村様に逢はして下さるか。逢はして還る、呼んでも来る、はやく癒つて御両親に安心させて呉れ、宜いかと言へば、あゝ明日は癒りますと憚りもなく言ひけり。

正しく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ來た、容体ごとくく變りて何を言へども嫌々として人の顔を見るを厭ひ、父母をも兄をも女子をも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中をば廣き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ。

俄かに暑氣つよく成し八月の中旬より狂亂いたく暮りて人をも物をも見分ちがたく、泣く聲は晝夜に絶えず、眠るといふ事をつて無ければ落入たる眼に形相すさまじく此世の人とも覺えず成ぬ、看護の人も疲れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのぶも植村に逢ひしと言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔て、姿を見るばかり、霧の立ちほうて膾氣なれども明日は明日はと言ひて又そのほかに物いはず。

いつそは正氣に復りて夢のさめたる如く、父様母様といふ折の有りもやすと覺束なくも一日二日と待たれぬ、空蟬はからを見つしもなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋風のおと聞こえよがな。



軒もる月

我が良人は今宵も歸りのおそくおはしますよ、我が子は早く睡りしに歸らせ給はく興なくや思  
 さん、大路の霜に月氷りて踏む足いかに冷たからん、炬燵の火もいとよし、酒もあたゝめんば  
 かりなるを、時は今何時にか、あれ、空に聞ゆるは上野の鐘ならん、二ツ三ツ四ツ、八時か、  
 否、九時に成けり、さても遅くおはします事かな、いつも九時のかねは膳の上にて聞き給ふを  
 それよ今宵よりは一時づゝの仕事を延ばして此子が爲の収入を多くせんと仰せられし成りき、  
 火氣の溜たる室にて頸やいたからん、振あぐる鐘に手首や痛からん。  
 女は破れ窓の障子を開らきて外面を見わたせば、向ひの軒はに月のぼりて、此處にさし入る影  
 はいと白く、霜や深ひ來し身内もふるへて、寒氣は肌針さすやうなるを、しばし何事も打わ  
 すれたる如く眺め入て、ほど長くつく息月かげに煙を蒸がきぬ。  
 櫻町の殿は最早寢處に入り給ひし頃か、さらずは燈火のもとに書物をや開き給ふ、然らば机  
 の上に紙を展べて靜かに筆をや動かし給ふ、書かせ給ふは何ならん、何事かの御打合せを御朋

友の許へか、さらずば御母上に御機嫌うかひの御状か、さらずば御胸にうかぶ妄想のすて所  
 時か歌か、さらずば、さらずば、我が方に賜はらんとて甲斐なき御玉章に勿躰なき筆をや染め  
 給ふ。  
 幾度幾度の御文を拜見だにせぬ我れいかばかり憎くしと思しめすらん、拜さば此胸寸断に成り  
 て常の決心の消えうせん覺束なき、ゆるし給へ我れいかばかり憎くき物に覺しめされて物知  
 らぬ女子とさげすみ給ふも厭はじ、我れは斯る果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、殿  
 が憎くしみに逢ふべきほどの果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、ゆるし給へ不貞の女  
 子に計はせさせ給ふな、殿。  
 卑賤にそだちたる我身なれば始より此以上を見も知らで、世間は裏屋に限れる物と定め、我家  
 のほかに天地のなしと思はれ、はかなき思ひに胸も燃をじを、暫時がほども交りし社會は夢に  
 天上に遊べると同じく、今さら思ひやるも程とほし、身は櫻町家に一年幾度の出替り、小間  
 使といへば人らしけれと御寵愛には大猫も御膝をけがす物ぞかし。  
 言はれ我が良人をはづかしむるやうなれど、そも〱御暇を賜はりて家に歸りし時、筆と定ま  
 りしは職工にて工場がよひする人と聞きし時、勿躰なき比らべなれど我れは殿の御地位を思ひ



合せて、天女が羽衣を失ひたる心地もしたりき。  
よしや此縁を厭ひたりとも野末の草花は香院の花瓶にさくれん物か、恩愛ふかき親に苦を増さ  
せて我れは同じき地上に彷徨ん身の取あやまちても天上は叶ひがたし、若し叶ひたりとも夫は  
邪道にて正當の人の目よりはいかに汚らはしく淺ましき身とぞされぬべき、我れはさても、  
殿をば浮世に誹らせ参らせん事くち惜し、御覽せよ奥方の御目には我れを憎しみ殿をば嘲りの  
色の浮かび給ひしを。

女子は太息に胸の雲を消して、月もる窓を引たつれば、音に目さめて泣出る稚子を、あはれ可  
愛しいかなる夢をか見つる乳まいらせんと懐あくれば笑みてさぐるも惜くからず、勿躰なや此  
の子といふ可愛きもあり、此子が爲我が爲不自由あらせむ愛き事のなかれ、少しは餘裕もあれ  
かしとて朝は人より早く起き、夜は此通り更けての霜に寒さを堪へて、袖よ今の苦勞は愁らく  
とも暫時の辛棒ぞしのへかし、やがて伍長の肩書も持たば、鍛工場の取締りとも言はれなば、  
家は今少し廣く小女の走り使ひを置きて、其かよわき身に水は汲まされ、我れを肺甲斐なしと  
思ふな、腕には職あり身の健かなるに、いつまで斯くてはあらぬ物ぞと口癖に仰せらるゝは、  
何所やら我が心の顔に出で、卑しむ色の見えけるにや、恐ろしや此大恩の良人に然る心を持ち

て假にも其色の願はれもせば。

父の一昨年うせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱に夜も帯を解き給はず、咳  
き入るとては脊を撫で、寐がへるとては抱起しつ、三月にあまる看病を人手にかけしと思し召  
の嬉しさ、夫れのみにて我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に不足らしき素振の有りし  
か、我れは知らぬと左もあらば何とせん、果敢なき樓閣を空中に描く時、うるさしや我が名の  
呼聲、袖、何せよ彼せよの言附に消されて、思ひこゝに絶ゆれば恨をあたりて寄せもやしたる  
勿躰なき罪は我が心よりなれど櫻町の殿といふ面かけなくば胸の鏡に映るものもあらじ、罪は  
我身か、殿か、殿だになくば我が心は靜なるべきか、否、かゝる事は思ふまじ、呪咀の詞と成  
りて思むべき物を。

母が心の何方に走れりとも知らず、乳に倦きれば乳房に顔を寄せたるまゝ思ふ事なく寐入し見  
の、頬は薄絹の紅さしたるやうにて、何事を語らんとや折々曲ぐる口元の愛らしさ、肥えたる  
腮の二重なるなど、斯かる人さへある身にて我れは二心を持ちて濟むべきや、夢さし二心は  
持たぬまでも我が良人を不足に思ひて濟むべきや、はかなし、はかなし、櫻町の名を忘れぬ限  
り我れは二心の不貞の女子なり。



見を静かに寢床にうつして女子はやをら立あがりぬ。眼ざし定まりて口元がたく結びたるまゝ、  
 臺の破れに足も取られず、心さすは何物ぞ葛籠の底に納めたりける一二枚の衣を打かへして襪  
 黄ちりめんの帯揚のうちより、五通六通、敷ふれば十二通の文を出して舊の座へ戻れば、蘭燈  
 のかげ少し暗きを捻ぢ出す手もとに見ゆるは殿の名、よし匿名なりとも此眼に感じは變るまじ  
 今日まで封じを解かざりしは我れながら心強しと誇りたる淺はかさよ、胸のなやみに射る矢の  
 おそろしく、思へば卑怯の振舞なりし、身の行ひは清くもあれ心の腐りのすてがたくは同じ不  
 貞の身なりけるを、卒さらば心試しに拜し參らせん、殿も我が心を見給へ、我が良人も御覽せ  
 よ。

神もおはしまさば我が家の軒に止まりて御覽せよ、佛もあらば我が此手元に近よりても御覽せ  
 よ、我が心は清めるか濁れるか。

封じ目ときて取出せば一尋あまりに筆のあやもなく、有難き事の數々、辱じけなき事の山々思  
 ふ、戀ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎、是等の文字を縦横に散らして、文字はやがて耳の腦  
 に恐しき聲もて叩くぞかし、一通は手もとふるへて巻納めぬ、二通も同じく三通四通五六通よ  
 り少し顔の色かはりて見えしが、八九十通十二通、開らきては讀みよみては開らく、文字は目

に入らぬか、入りても得よまぬか。

長なる髪をうしろに結びて、舊りたる衣に軟べたる帯、やつれたりとも美貌とは誰が目にも許  
 すべし、あはれ果敢なき座塚の中に運命を持てりとも、穢なき汚れは禁むらじと思へる身の、  
 猶何所にか悪魔のひそみて、あやなき物をも思はするよ、いと雪ふらは降れ風ふかば吹け、我  
 が方寸の海に波さわきて沖の釣舟もひも亂れんか。風きたる空に囀なく春日のどかに成なん  
 胸か、櫻町が殿の容貌も今は飽くまで胸にうかべん、我が良人が所爲のちさなきも強いて隠く  
 さじ、百八煩惱のづから消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け炎も燃へばも  
 よとて、微笑を含みて讀みもてゆく、心は大龍にあたりて濁世の垢を流さんとせし、某の上人  
 がためしにも同じく、戀人が涙の文字は幾筋の瀧のほとばしりにも似て、氣や失なはん心弱き  
 女子ならは。

傍には可愛き兒の寐姿みゆ、膝の上には無情の君よ我れを打捨て給ふかと、殿の御聲ありあり  
 聞えて、外面には良人や戻らん更けたる月に霜さむし、たとへば我が良人今此處に戻らせ給ふ  
 とも、我れは恥かしさに面あかみて此膝なる文を取かくすべきか、恥づるは心の疚ましければ  
 なり、何かは隠くさん。



殿、今もし此處にまはしまして、例の辱けなき御詞の数々、さては恨みに憎くみのそひて御覽  
あらく、さては勿躰なき御命いませを限りとの給ふとも、我れは此眼の動かん物か、此胸の騒か  
んものか、動くは逢見たき愁よりなり、騒ぐは下に懸しければなり。  
女は暫時惚惚として其すゝけたる天井を見上げしが、蘭燈の火かけ薄き光を遠く投げて、おぼ  
ろなる胸にてりかへすやうなるもうら淋しく、四隣に物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠えすと  
く、寸隙も風おともなく身に迫りくる寒さもすさまじ、來し方往く末ももひ忘れて夢路をた  
どるやう成しが、何物ぞ俄にその空虚なる胸にひききたると覺しく、女子はあたりを見廻して  
高く笑ひぬ、其身の影を顧り見て高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者ぞと高く笑ひぬ  
目の前に散亂れたる文をおけて、やよ殿、今ぞ別れまいらするなりとて、目元に宿れる露もな  
く、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面に手もふるへで、一通二通八九通、残りなく寸断  
に爲し終りて、熾んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止めず煙りは  
空に棚引き消ゆるを、うれしや我執着も残らざりけるよと打眺むれば、月やもりくる軒ばに風  
のおと清し。

うらむらむら

(上)

夕暮の店先に郵便脚夫が投げ込んで行きし女文字の書状一通。炬燵の間の洋燈のかけに讀んで  
くるくると帯の間へ巻納むれば起居に心の配られて物案じなる事一通ならず。自づと色に見  
えて、結構人の旦那どの、何うぞしたかとお問ひのかゝるに、いゑ、格別の事でも御座ります  
まいけれど、仲町の姉が何やら心配の事が有るほどに、此方から行けば宜いのなれど、八かま  
しやの良人が暇といふては毛筋ほども明けさせて呉れぬ五月蠅さ、夜分なりと歸りは此方から  
送らせうほどにお良人に願ふて鳥渡來て呉れられまいか。待つて居る。と言ふ文面で御座りま  
す。又繼娘と紛雜でも起りましたのか、氣の狭い人なれば何事も口には得言はで、たんと胸を  
痛くするが彼の人の性分、因りもので御座ります、とて態どの高笑ひをして聞かせれば、はて  
扱氣の毒など太い眉を寄せて、お前にすれば唯た一人の同胞。善惡どもに分けて聞ねば成らぬ  
役を笑ひ事にしては置かれまい。何事の相談か行つて様子を見たらば良からう女は氣の狭いも



の、待つと成つては一時も十年のやうに思はれるで有らうを。お前の怠りを私の故に取られて恨まれても徳の行かぬ事。夜は格別の用も無し。早く行つて聽いて遣るが真からう、と可愛き妻が姉の事なれば、優しき死しの願はずして出るに、飛立つほど嬉しいを此方は態と色にも見せず。では行きませうかと不肯く、に筆筒へ手を懸れば、不實な事を言はずと早く行つて遣れ先方は何れほど待つて居るか知ればせぬぞと知らぬ事なれば佛性の旦那どの急き立るに、心の鬼や自づと面ぼてりして、胸には動悸の波たかたり。

糸織の小袖を重ねて、縮緬の羽織にも高僧頭巾、背の高き人なれば夜風を厭ふ角袖外套のうつり能く、では行つて来ますと店口に駈下駄直させながら、大吉、大吉と小僧の背を人さし指の先に突いて、お舟ごと真似に精の出で店の品をばちよるまかされぬ様にしてお呉れ。私の歸りが遅いやうなら構はずと戸をば下して、行火へ焙るなら無限も床の中へ入れて置いては成らないぞえ。さんは臺處の火のものを心づけて、旦那の御枕もとへは例の通り御湯わかしたお煙草盆、忘れぬやうにして御不自由なせませぬ成るだけ早くは歸らうけれど、と硝子戸に手をかくれば、旦那どの聲をかけて車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいかと甘たるき言葉、何の商人の女房が店から車に乗出すは榮耀の沙汰で御座ります。其處らの角から能いほど

に直切つて乗つて参りましょ。これでも勘定は知つて居ますに、と可愛らしい聲にて笑へば、世帯じみた事をも旦那どのが忍悦顔。見ぬやうにして妻は表へ立出でしが大空を見上げてはつと息を吐く時、曇れるやうの面もちいと雲深く成りぬ。

何處の姉様から手紙が来ようぞ、真赤な嘘を我が家の見返られて、何事も御存じなしに快いお顔をして暇を下さる勿躰なさ。あの様な毒の無い、物うたがひと言ふては露ほどもお持ちならぬ心のうつくしい人を、能うも能うも舌三寸にだましましたつて心のまゝの不義放埒。これがまあ人の女房の處業であらうか。何と言ふ悪者の、人でなしの、法も道理も無茶苦茶の犬畜生の様な心であらう。此様ないたづらの畜生をば、御存じの無い事とて天にも地にも無いかの様に可愛がつて下すつて、私が事と言へば御自分の身を無い物にして言葉を立てさせて下さる思し召し。有難い嬉しい恐ろしい、餘りの勿躰なさに涙がこぼれる、彼のやうな良人を持つ身の何が不足で劔の刃渡りするやうな危ない計畫をするのやら。可愛さうに彼の人の好い仲町の姉さんまでを引合ひにして三方四方嘘で固めて、此足はまあ何所へ向く。思へば私は悪黨人でなし、いたづら者の不義者の、まあ何と言ふ心得違ひ、と辻に立つて歩みも得やらず。横町の角二つ曲りて今は我家の軒は見えぬを、振かへりては熱き涙のはらりとこぼれぬ。



良人のなほ小松原東二郎、西洋小間物の店は名ばかりに、有あまる身代を藏の中に寐かして、さりとは當世の算用知らぬ人よし男に、戀女房のお律が手ばしこそ奥も表も平手に揉んで、美くしい賤に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元からお客様への世辭も出る。年も根ッから行きなさらぬに、伶俐な内儀さまと見るほどの人褒め物の、此人此身が裏道の働き。人は知らじと自ら晦ませども、優しき良人が心ざし生憎纏はる心地してお律は路傍に立すくみしまし、行くまいか行くまいか、寧ろ思ひ切つて行くまいか。今日までの罪は今日までの罪。今から私が氣さへ改たれば、彼のち人として左のみ未練は仰しやるまじく、ち互ひに清い交際をして人知らぬうちに汚れを溜いで仕舞つたなら、今から後の彼の方の爲、私の爲、生中がれて附纏ふたどて、晴れて添はれる中ではなし。可愛い人に不義の名を着せて少しも是れが世間に知れたら何とせう。私は兎も角彼の方は是れからの御出世前一生を暗黒にさせまして夫れで私は満足に思はれやふか。ち嫌やな事恐ろしい。何と思ふて私は逢ひに出て來たか。よしやあ文が千通來ようと言へせねば、ち互ひ疵にはなるまいもの。最う思ひ切つて歸りませう、歸りませう、歸りませう、歸りませう。ち最う私は思ひ切つたと路引違へて駒下駄を返せば生憎夜風の身に寒く、夢のやうなる考へ又もやふつと吹破られて、ち私は其やうな心弱い事

に引かれて成らうか。最初おの家に嫁入する時から、東二郎どのを良人と定めて行つたのでは無い物を。形は行つても心は決して遣るまいと極めて置いたを、今更に成つて何の義理はり。悪人でも、いたづらでも構ひは無い、ち氣に入らずばち捨てなされ。捨られれば結局本望。彼のやうな愚物様を良人に奉つて吉岡さんを袖にするやうな考へを、何故しばらくでも持つたのであらう。私の命が有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい。良人を持たうと奥様も出來なさらうと此約束は破るまいと言ふて置いたを、誰れが何のやうに優しからうと、有難い事と言ふて呉れようと、私の良人は吉岡さんの外には無い物を、最う何事も思ひますまい思ひますまいとて頭巾の上から耳を押へて急ぎ足に五六歩かけ出せば、胸の動悸のいつしか絶えて、心靜かに氣の好えて色なき唇には冷やかなる笑みさへ浮びぬ。



# 十三夜

(上)

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まつた娘ではないかと兩親に出迎はれつる物を、今宵は辻より飛のりの車さへ歸して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かはらずの高聲、いはし私も福人の一人、いつれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には褒められる、分外の欲さへ渴かねば此上に望みもなし、やれく有難い事と物がたられる、あの相手は定めし母様、あゝ何も御存じなしに彼のやうに喜んでお出遊ばす物を、何の顔さげて離縁状もらふて下されと言はれた物か、叱られるは必定、太郎と言ふ子もある身に置いて置け出して来るまでには種々思案もし盡しての後なれど、今更にお老人を驚かして是れまでの喜びを水の泡にさせます事つらや、寧ろ話を返らうか、戻れば太郎の母と言はれて何時くまでも原田の奥様、御兩親に奏任の御がある身と自慢させ、私さへ身を節儉れば時たまは口に合ふ物も小遣ひも差あげられるに思ふまゝを通して離縁とならば太郎には繼母の愛き目を見せ

御兩親には今までの自慢の鼻にはかに低くさせまして、人の思はく、弟の行末あゝ、此身一つの心から出世の鬼も止めずはならず、戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか、彼の鬼の、鬼の良人のもとへゑ、厭や厭やと身をふるはす途端よろくとして、思はず格子にたたりと言さすれば、離れだど大きく父親の聲、道ゆく悪太郎の悪戯とまがへてなるべし。

外なるはあはしと笑ふて、お父様私で御座んすといかにも可愛き聲、や、離れだ、離れであつたと障子を引明て、ほうお開か、何だな其様な處に立つて居て、何うして又此おそくに出かけて来た、車もなし、女中も連れずか、やれく早く中へ遣入れ、さあ遣入れ、何うも不意に驚かされたやうでまごくするわな、格子は閉めずとも宜い私しが閉める、兎も角も奥が好い、ずつと月様のさす方へ、さ、蒲團へ乗れ、蒲團へ、何うも畳が汚ないので大屋に言つては置いたが職人の都合があると言ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬから夫れを敷ひて、呉れ、やれく何うして此遅くに出て来たお宅では昔お變りもなしかと例に替らずもてはやされるれば、針の席にのる様にて奥さま扱かひ情なくじつと涙を呑込で、はい離れも時候の障りも御座りませぬ、私は申譯のない御無沙汰して居りましたが貴君も母様も御機嫌よくいらつし



やりますかと問へば、いや最う私は噓一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道と言ふ奴を始めるがの、夫れも蒲團かぶつて半日も居ればびろ／＼とする病だから仔細はなしと元氣よく阿々と笑ふに、亥之さんが見えませぬが今晚は何處へか参りましたか、彼の子も替らず勉強で御座んすかと問へば、母親ははた／＼として茶を進めながら、亥之は今しがた夜學に出て行きました、あれもお前も陰さままで此間は昇給させて頂いたし、課長様が可愛がつて下さるので何れ位心丈夫であらう、是れと言ふも矢張原田さんの縁引があるからだとして宅では毎日いひ暮して居ます、お前に如才は有るまいけれど此後とも原田さんの御機嫌の好いやうに、亥之は彼の通り口の重い質だし何れも目に懸つてもあつけない御挨拶よりほか出来まいと思はれるから、何分ともお前が中に立つて私どもの心が通じるやう、亥之が行末をもお頼み申して置ても呉れ、ほんに替り目で陽氣が悪いけれど太郎さんは何時も悪戯をして居ますか、何故に今夜は連れてお出でない、お祖父さんも懸しがつてお出なされた物をと言はれて、又今更にうら悲しく、連れて来やうと思ひましたけれど彼の子は宵までひで最う疾うに寐ましたから其まゝ置いて参りました本當に悪戯ばかりつものりまして聞わけとは少しもなく、外へ出れば跡を追ひまするし、家内に居れば私の傍はつかり覗みて、ほんに／＼手が懸つて成ませぬ、何故彼様で御座りませうと

言ひかけて思ひ出しの涙むねの中に漲るやうに、思ひ切つて置いては來たれど今頃は目を覺して母さん母さんと婢女どもを迷惑がらせ、煎餅やおこしの侈しも利かたで昔々手を引いて鬼に喰はずと威かして居るやう、あゝ可愛さうな事をと聲たてゝも泣きたきを、さしも両親の機嫌よげなるに言ひ出かねて、烟にまぎらす烟草二三服、空咳こん／＼として涙を襟袵の袖にかくしぬ。

今宵は舊曆の十三夜、舊弊なれども月見の真似事に團子をこしらへてお月様に備へ申せし、これはお前も好物なれば少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も何か極りを悪るがつて其様な物は止なされと言ふし、十五夜にわけなんだから片月見に成つても悪るし、喰へさせたいと思ひながら思ふばかりで上る事が出来なんだに、今夜來て呉れるとは夢の様な、ほんに心が届いたのであらう、自宅で甘い物はいくらも喰へやうけれど親のこしらいたは又別物、奥襟氣を取つて、今夜は昔しのお關になつて、見得を構はず豆なり栗なり氣に入つたを喰べて見せてお呉れ、いつでも父様と噂すること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位の宜い方々や御身分のある奥様がたどの御交際もして、兎も角も原田の妻と名告て通るには氣骨の折れる事もあらう、女子どもの使ひやう出入りの者の行渡り、人の上



に立つものは夫れ丈に苦勞が多く、里方が此様な身柄では猶更のこと人に侮られぬやうの心懸けもしなければ成るまじ、夫れを種々に思ふて見ると父さんだとして私だとして孫なり子なりの顔の見たいは當然なれど、餘りうるさく出入りをしてはと控へられて、ほんに御門の前を通る事はありとも木綿着物に毛織子の洋傘さした時には見す／＼と二階の簾を見ながら、呼お聞は何をして居る事かと思ひやるばかり行過ぎて仕舞ます、實家でも少し何と成つて居たならばお前の肩身も廣からうし、同じくでも少しは息のつけやう物を、何を云ふにも此通り、お月見の團子をおあげやうにも重箱からしてお恥かしいでは無からうか、ほんにお前の心遣ひが思はれると嬉しき中にも思ふまゝの通路が叶はねば、愚痴のトつかみ賤しき身分を情なげに言はれて、本當に私は親不孝だと思ひます、それは成程和らい衣類きて手車に乗りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父さんや母さんに斯うして上やうと思ふ事も出来ず、いはゞ自分の皮一重、寧ろ賃仕事してもお傍で暮した方が餘つばと快よう御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、其様な事を假にも言ふてはならぬ、嫁に行つた身が實家の親の貢をするなどと思ひも寄らぬこと、家に居る時は齋藤の娘、嫁入つては原田の奥方ではないか、勇さんの氣に入る様にして家の内を納めてさへ行けば何の仔細は無い、骨が折れるからとて夫れ丈の運のある身

ならば堪へられぬ事は無い筈、女など、言ふ者は何うも愚痴で、お袋などが詰らぬ事を言ひ出すから困り切る、いや何うも團子を喰へさせる事が出来ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調製たものと見えるから十分に喰べて安心させて遣つて呉れ、餘程甘からうとて父親の滑稽を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆ありがたく頂戴をなしぬ。  
嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩行して來るなど悉皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例ほど燦かならず、稀に逢ひたる嬉しさ左のみは心も付かさざりしが、舞よりの言傳とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎れし處のあるは何か仔細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、これやモウ程なく十時になるが關は泊つて行つて宜いのかの、歸るならば最う歸らねば成るまいぞと氣を引いて見る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父様私は御願があつて出たので御座ります、何うぞ御聞遊してと屹となつて疊に手を突く時、はじめて一トまづく幾層の憂きを洩しそめぬ。  
父は穩かならぬ色を助かして、改まつて何かのと膝を進めれば、私は今宵限り原田へ歸らぬ決心で出て參つたので御座ります、勇が許して參つたのではなく、彼の子を寐かして、太郎を寐